

---

# とある科学の無尽火焰《フレイム・ジン》

冬霞

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある科学の無尽火焰  
フレイム・ジン

### 【Nコード】

N0088V

### 【作者名】

冬霞

### 【あらすじ】

学園都市に七人しかいない超能力者《レベル5》。  
その中でも異質な学園都市序列第六位『無尽火焰』フレイム・ジンことカガリは、  
学園都市序列第一位『一方通行』アクセラレータと親しく付き合う希有な人間であった。

日々繰り返される妹達との実験。  
シスターズ  
アクセラレータ

そして一方通行と過ごす、日常。

本来なら逢うはずのなかった風紀委員の少女達と、超能力者《レベル

ル5』の第三位。彼女たちとの邂逅が、二人の運命を変えていく。

ありとあらゆる能力が効かない、『絶対無敵』の第六位。

学園都市最強の発火能力者<sup>パイロキネシスト</sup>はいつたい何を思っ  
て物語りに関わるの  
だろうか。

彼の目的は？ そして物語の行方は？

交わるはずのない科学と科学が交差するとき、物語は始まる！

【とある科学の無尽火焰<sup>フレイム・シン</sup>】！ ご期待下さい！

## 第0話 『男、二人、ゲーセン巡り』（前書き）

作者は他に数本の連載を抱える身ですので、誠に勝手ながら当小説は定期的な更新をお約束出来ません。

また、作者は人間ですので完璧なチェックが出来ていない可能性があります。

原作と相違ある部分などありましたら、是非ご連絡をお願い致します。

皆様のお力添えで、すばらしい小説になればと思いますので、どうぞよろしく！

## 第0話 『男、二人、ゲーセン巡り』

誰かのために生きる。

そんなことを言った人間が、有史以来ただけ存在したことだろうか。

高潔な言葉に聞こえるだろう。それはどこまでも献身的で、道義に法ったモノであり、誰もが賞賛を惜しまない生き方だ。

いや、この際もう生き方なんて言葉をすっ飛ばしてしまっても構わないだろう。ただ『誰かのため』。そんな言葉の中に感じる響きを、どう思うだろうか。

単純にこの言葉だけを考察するのなら、非常に多岐にわたる解釈があげられる。

たとえば具体的に何をするつもりなのか。発言の主によってその方向性、方針というものも大いに変化してくるだろうが、それにしても共通理解として、やはり誰かのためにと言う以上は具体的に他者の利益になる行動をとることになるのだろう。

例えば、ある人はご老人に電車やバスで席を譲ると言う。

例えば、ある人は友人の頼みは快く引き受けると言う。

例えば、ある人は募金を積極的に行おうと言う。

例えば、ある人はNGOに参加して直接恵まれない地域の人々を救いに行くと言う。

どれも程度や手段は異なるが、立派に“誰かのために”なることだ。

何ら恥じるところはない。世間一般では間違いなく“善”とされる心と、その表れである行為がそこには存在している。

しかしここで純粹に思考実験としてこの言葉を考えてみると、不思議なことがわかる。

つまり当たり前のように誰もが口にするだろう“誰かのための生き方”とは、乃ち“不特定多数の誰かのための生き方”ということになるのだ。

このことから何が分かるか。

乃ち、人は基本的に“身内以外の他人”に対しての献身を“善”と捉えると、そういうことであろう。

身内に対しては献身して当然、などと極端なことを論ずるつもりはないが、儒教的な文化が大陸を通じて遙か昔から形を微妙に変えながらも根付いているからだろうか、とかく日本は身内に対しての認識が他国に対して大きく違った。

身内に対しての親切、献身を『偉い』ではなく『当然』と評価する。これは字面だけ取るとひどく傲慢で理不尽なことのように見えるかもしれないが、日本の風土を紐解けば当然のことで、一概に非難するのも偏った見方だろう。

ある男は言った、『一人でも多くの人を助けたい』。

ある男は言った、『大切な一人を守りたい』。

この二つの発言に、どれほどまでの違いがあるうか。優劣をつけることが、出来ようか。

どちらも尊く、美しい。後者に見てみたところで、いくら儒学的な精神に染まった日本人だったとしても文句なしに尊さを認めるはずだ。

けれど、どうするのだろうか。

『一人でも多くの人』と『大切な一人』との利益が食い違った場合は。

片方を犠牲にしなければ、片方を救えない場合は。

本来ならばどちらも尊い二人の信念。しかし、手を取り合う可能性はない。二人がどちらも自分の救うべき人を、救うべき人達を譲ることが出来ないのならば、そこには争いが生まれる。

仮に法が存在するならば、

おそらく多数の利益を少数の利益が阻害することは、好まれない。あるいは状況によって、悪と断ずることもあるだろう。

しかし二人の間では、そのようなことは関係ない。そこには信念と個人のぶつかり合いがあるのみ。

ならば、きっと、その善悪の判断は、

勝者にのみ、

委ねられることになる。

「暑イ。いや、もう、暑イつか、熱イ」

ジリジリと太陽が照りつける中、午後の麗らかな繁華街で一人の少年が、こんな天気の中では誰もが抱くだろう苛立ちを呟いた。

街を歩けばすれ違う人々の五人に一人は同じようなことを呟くだろう。今年の夏は例年に比べても随分と暑く、熱中症などの病人が多い。行政も例年より厳重に指導を徹底している。

「なんだなンだよなンですかアこの暑さは?! 俺を焼き殺すつもりですかア?! 太陽サマが人間サマ焼き殺そうだなンて一体なンの冗談なんですかよオ!」

「怒鳴ると血圧が上がって、もっと暑くなるとか思わないのかキミは。周りも変人見る目で見てるし、僕としては少し静かにして欲しいってことです」

「あークソ、余計な体力消耗した。だから俺ア外は苦手なンだよ、似合わねェんだよ、出来れば日陰でのんびりしてたいんだよ」

その服装は決して涼しげ、とは言い難いものであったが、それにしてもこれ以上脱ぐことはできないレベルなのは間違いなく、現状で暑さを凌ぐ手段も持ち合わせていないように見える。

そも、このような日中に何の日差し対策もしないで外に出ることは乃ち熱中症を予期させるものであるが、それにしても出ずにはいられないのが若者ならではということであろうか。

少年は帽子の一つもかぶらないままに、フラフラと人並み溢れる歩道を歩いていた。



「久しぶりに外に出るからって、調子に乗って能力を切るから悪いってことです。キミの能力だったら紫外線はおるか、余計な熱を遮ることだって簡単だろうに」

「あん？ 分かってねエなア、テメエは。そういうのは風情がねエって言ったじゃねエか。この殺人的な暑さを感じてこそ、わざわざ夏に外に出る意味つつうのがあんだろうがよオ」

駅前の繁華街は、モノレールの高架に隠れないところはビルの陰ぐらいしか日陰がない。

公園があるにはあるけれど、都市設計の問題が大規模な広葉樹を植えるわけにはいかなかったらしく、緑は目を楽しませる程度の役割しかなかった。

ベンチや花壇の縁は学生達やカップル達の恰好の語らい場かもしれないが、こと今日この時間においては殺人的な日差しが降り注ぐ拷問椅子だ。

いつもなら楽しみに街を闊歩している学生達も、どうやら今日は涼しい喫茶店やファーストフード店内へと避難しているらしい。

「つかそれを言うなら部屋でゲームしててもいいンだよ、別に。大体よオ、家の中でゲームやるばっかじゃなくて、外を歩きたいつつたのはテメエだろオに」

「僕は家に籠もっているのは好きじゃないってことです」

「テメエはそうかもしれねエけどなア」

「まあ確かにキミの言う通りかもしれないけどさ。とはいえ横で延々弱音ばかり吐かれても困るってことです」

歩道を行儀よく縦に並んで歩く二人は、それなりに個性的な顔がそろった街の中でも随分と異彩を放つペアだった。

だるだるゝと歩きながら弱音を吐いている少年は、本当に男なのかと疑うくらいに華奢で、細い体つきをしている。白髪と赤目という典型的なアルビノで、顔つきは凶悪の一言に尽きる。

黒いＴシャツには獣の牙か爪、目のような意匠が施され、ブランド物のジーンズをしっかりと履きこなしていた。貧弱すぎることを除けば、モデルのように余計な肉がない。

もう一人は冴えない男だ。精悍で爽やかな好青年といった顔立ちをしているのだが、表情というものがなく、呆れたように笑いなगरも目には感情の色がなかった。

声には十分に抑揚があつて、間違つても機械的ではない。しかし、軽い。軽薄なわけでもなく、不愉快なわけでもなく、ただ単純に声の質が軽いのだ。

そして彼はこの暑いのに長い白衣を着こんであり、白衣の下には多くの学校で夏服として採用される白いシャツと黒い学生ズボンを履いている。

シャツの胸ポケットには、今は見えないが名門として有名な長点上機学園の校章が縫い付けられていて、装いは奇抜だがエリートであることを分かる人には悟らせるだろう。

黒く短い髪の毛は無造作に後ろへ撫でつけられていて、灰色の瞳でぼんやりと目の前を文句たらたら歩く友人を見つめている。

「というか僕としては、あちらこちらのゲーセンを回るよりも一つのゲーセンを楽しみ尽くした方が良いと思うってことです。こうやって一つで満足しないで他のゲーセン探して歩き回るから、一々外に出て暑い思いをしなきゃいけないんだろう？」

「それこそ馬鹿かってんだ。一つのゲーセンでウダウダしてたところで何が面白エンだよ？ この辺全部のゲーセンを制覇してこそ、ゲーセン巡りの楽しみつてもンだろオが」

「レトロゲームの醍醐味ってのは、僕にはよく分からないってことです。大体こうして徒歩で探すっていうのも納得できないんだけどな。どうして携帯の検索機能を使わないんだ？」

「俺の携帯は通話とメールしか出来ねエンだよ。研究所から支給されたやつだからな」

「そいつは無精してるなあ」

近頃この辺りの学生の中では人気のクレープ屋や、CDショップを通り過ぎる。

朝早くからこの珍妙な二人組は、この付近に幾つか点在しているゲームセンターを軒並み手当たり次第にハシゴしていた。

主に標的は対戦ゲーム。オーソドックスな格闘ゲームから、ゾンビを射殺する射撃ゲーム、あるいはレースゲームなど、意外にも二人はかなりの種類のゲームに精通している。

問題としては決して神業と呼べるぐらいまで洗練された腕前ではないということだが、それでも有る程度の勝ち星が得られているのならば、少々の黒星は刺激というものだろう。

学校をサボってゲームセンターに屯たむろしている連中の大体を相手取ったら、移動。また好き勝手遊び回る。そんなことを白髪の少年はやたらハイテンションで、白衣の青年は何処はかとなく呆れた様子で、それでもそれなりに楽しんでいた。

「しかしなあ、さっきのでもう五軒目だぞ？ そろそろ昼時だし、客も減る。一端休憩した方が良いんじゃないのか？」

「まアそれもそうか。俺でも腹減りまでは“反射”出来ねエし。手近なところでメシでも買って、静かな公園でも探して食うとすつか」

「そこまでして外に拘るか？」

「騒がしいのが嫌いなンだよ、面倒くせエ。しかし何を食うかね。ここンところファミレスで洋食ばっか食ってたし、和食つてのも捨てがてエな」

「僕はよく分からないが、せっかく外で食べると決めただから手軽な物が良いんじゃないかと思うってことです。確かホラ、この辺りにはファーストフードとかも多かっただろう？」

購買者達は基本的に、安い商品を探している。

特にこの辺りはかなりの広さに渡って学生街だ。そしてこれはさらに基本的なことだが、金持ちの学生なんぞ一握りだ。否、そんな奴は学生じゃねえ。

学生街では安くて量が多く、気っ風の良いおばちゃんおじさんが店主をやっているような定食屋、というイメージが多いだろうが、

駅前繁华街ではやはりチェーン店が持て囃される。

特に日本でも全国的に巨大なシェアを我が物としている某ハンバーガーチェーンなどは、ファストフードの代表店と呼べるだろう。

駅前の一等地を狭いながらも当然のような顔をして占拠しているその店に、白衣の青年の発言に釣られた白髪の少年は自然と視線が吸い寄せられた。

「『ナツいアツを乗り切ろう！ 南国の香り、新作トロピカルバーガー！ 今ならセットで四百九十円！』、か」

「なんだい、その無性に背筋が寒くなる煽り文句は？」

「さアな。砂糖漬けの輪切りパイナップルとハンバーグ、あとサニーレタスつてところか。ヘエ、このぶっ飛んだアイデア気に入たぜ。買ってやろうじゃねエか」

「正気か？」

店の正面にはパツと見た感じ一畳よりは一回り大きい布の看板が垂れ下がり、そこには新商品を一押しする文句と写真が並べられている。

どうやらこの夏、本社が自信を持って送り出した新商品は白髪の少年が今まさに口にした『トロピカルバーガー』らしい。

普通のハンバーガーに使われているバンズよりも分厚い特性のバンズには、ことさら分厚く存在感を主張する砂糖漬けの真っ黄色な輪切りパイナップル。そしてそれと一緒に普通のハンバーガーに使われているのと同じハンバーグと、色も鮮やかに緑なサニーレタス

が彩りを添えている。

見た目自体は、悪くない。実際に何処ぞの某ピザ配達チェーン店ではパイナップルを主役にしたピザを販売したりしているし、肉を柔らかくするからと酢豚にパイナップルを入れる主婦の方々も少なくはない。

しかし、ハンバーガーである。

さらに言うなら、一緒に挟まれているのは普通のハンバーグである。写真で見ると豪華だが、実際に食べてみると残念過ぎる分厚さもといて分薄さのピラピラ牛肉だ。

ちなみに使っているソースは『ハワイアンソース』らしい。ハワイアンでフルーティでホットサマーな味が楽しめるそうだが、さっぱりちつとも分らない。

これに手を出すのは相当の強者、あるいは馬鹿、あるいは博打野郎だけだ。

「いや、でも気になンだろ『トロピカルバーガー』？ だってトロピカルなんだぜ、南国だぜ？ 南国って言ったらテメエそりゃハワイとかグアムとかサイパンとかそっちだろ？」

「まあ、多分」

「さっぱり特産品が分かんねエじゃねエか！ そこに痺れるねエ、憧れるねエ！ こりゃ俺が直々に味を確かめてやんねエといけねエなア！」

「それなりに深く付き合ってきたつもりだけど、僕にはキミのそういうところはさっぱり分からないってことです」

やはり暑さで頭でもやられたか、と白衣の青年は先程よりも更に呆れた視線を白髪の少年に向けた。

それなりに前に知り合った友人は、怪我はおるか病気や体調不良にも 除く不機嫌および低血圧 縁がないが、確か自分の知る限り、この暑さで能力をOFFにしたのは今日が初めてである。先程は偉そうに夏の楽しみ方について白衣の青年に講釈を垂れていたが、今までは能力を使って快適に外歩きを楽しんでいたのだ。

「よし、ちょっと買ってくるからよオ、そこら辺で待ってる。なんなら公園を探してくれてもいいぜ？」

「悪いけど御免被るよ、それこそ面倒ってことです。適当にブラブラしてるよ、買い物が終わったら僕の方から探しに行くから、そっちもこの辺りをブラブラしてくれ」

「おう」

やはり暑いのが堪えているのかフラフラと、それでも何処はかとなく楽しそうに歩いていく白髪の少年の背中を見送りながら、こちらも何処はかとなく嬉しいげな吐息をついた。

日差しは相変わらず殺人的な光量と熱量で彼を照らし続けるが、幸いなのか不幸なのか、彼はこの手の感覚には縁がない。

ただ流れる風景を目に収め、風と人々の声を耳に入れ、無表情に立ちつくすのみである。

「さて、昼時はとくに過ぎてるけど三時のおやつの時間だし、

店が混んでたら時間もかかるかな。ちょっとブラブラしてこようか」

フワリと白衣を翻す彼を追う視線は、不思議なことに近くを通り過ぎる幾人かだけだった。

驚く程に、存在感が薄くなっている。それは何かの能力、なんてもんどえは当然ない。ただ、彼という人間の持つ雰囲気、先程まで友人といた時と比べて、薄くなってしまっているのだ。

「まあ、今日も学園都市は平和ってことですよ、みんな」

人混みで溢れた交差点でやけに大きく響いた独り言は、それでも誰の耳に届くこともなく、風に乗って、何処ぞ誰も知らない場所へと、飛んでいった。

一体その呟きがだれに届いたのか。当然ながら知るのは、呟きを放った当人と、受け取った誰かだけである。



## 第0話 『男、二人、ゲーセン巡り』（後書き）

一方通行 ゲームマニア

主人公 巻き込まれ型不幸体質

このように、原作キャラ達は微妙に頭が緩くなっています。

どこかほのぼのしたやりとりをお楽しみいただければ、幸いです。

## 第1話 『少女、二人、繁華街』（前書き）

当作品では一話当たり一万文字以下にしようと思っていたのに、  
普  
段のペースで書いてたらアッ！という間に二万文字に。  
というわけで分割しました。圧縮は無理だったよ一通サン。  
話の進展は、あんまり無いかも。

## 第1話 『少女、二人、繁華街』

日本には、まるで嘘のような都市伝説が一つある。

否、言い換えよう、都市伝説のような都市が一つある。

言葉遊びのように思われてしまうかもしれないが、事実だ。それは紛れもなく、“都市伝説のような都市伝説”だった。

曰く、外界に比べて数十年の違いを見せる圧倒的な科学技術。

曰く、実用不可能なレベルの研究が平然と実用され、そもそも理論の段階にしか至っていない理論が平然と実験の段階にあり、机上の空論だと検証すら馬鹿にされる理論を、まじめに議題として発表する。

曰く、東京都の三分の一の面積を、神奈川や埼玉に一部を及ばせながら円形に占拠し、その総人口は二百三十万人にも及ぶ一大都市。

曰く、学園都市。総人口の八割は学生であり、日夜最高レベルの学問を修めることが出来る世界最先端の実験都市。

曰く、部外者の出入りは完全に管理された、秘密の園。その学園に通う全ての学生を守るために、ありとあらゆる警備体制が敷かれた完全無欠のセキュリティ。

最先端科学によってあらゆるものが管理された生活に、誰もが憧れを禁じ得ない。

学園都市は巨大な場所で、相応の人数の学生が集まっている。

よって日本全国、ありとあらゆる学生は学園都市での生活に憧れる。それなりの情報統制、そしてそれなりの情報公開がされているとはいえ、やはり学園都市での内情というものが正確に流布するわけではない。

色々な憶測や噂が、その情報の信憑性を大きく揺らがせている。

とはいえ概ね科学技術に対する情報は、主に学術論文などの必要性から比較的正确に外界に把握されていると言える。

如何に科学技術が、それも数十年のレベルで進歩しているとしても、既にある程度は公開されている情報に、噂好きとはいえ学生が過度の憧れを示すことはない。

それこそ、ほんの触りぐらいの情報しか無く、かつ全く実態が明らかになっていない。そんな情報にこそ学生は想像を膨らませ、仲間内での話は加速度的に肥大化していく。

ここには噂の広まり、尾ひれがつく様子の真実が含まれているだろう。実際、学園都市については愚にも付かない多数の噂が流布している。

曰く、密かに人体実験が行われていて、学園都市に通う生徒は皆、その実験台として集められているとか。

曰く、学園都市には警備と称して暗殺機関が存在しており、学園都市に害を為すと判断された者は秘密裏に始末されるとか。

曰く、その為に学園都市には全体に秘密の監視網が敷かれており、全ての学生の動きは秘密裏に全て監視されているとか。

その全てがあながち荒唐無稽な噂話だと、切り捨てることも出来ないのが学園都市であるのだが。

「うー！いいーはあるーうあーっ！！」

「きいやあああああ？！……！」

さて、そんな科学最先端の街である学園都市でも、世界気候までも簡単に操作できる訳ではない。

相も変わらず、当然のことながら夏は暑い。初夏に入ったばかりだというのに暴力的な日差しはアスファルトで綺麗に舗装された道路を焼き、優雅に敷き詰められた赤煉瓦の歩道を熱する。

学園都市においては五、六世代ほど前になる某家庭用据え置き型ゲーム機の第三世代などは、使用時にはその表面で卵焼きが焼ける程に発熱したと言うが、今の歩道も同じくらいには暑い。

靴の底が焼け付いて路面にくっついてしまうのではないかという暑さ、否、熱さに学生達は皆一人残らず肩を落とし、力なく家路に着いていた。

「なつ、何するんですか佐天さんっ?! こんな往来でスカートめくるなんて止めて下さいよおっ!」

「いやーごめんごめん、初春つてばまた無防備なお尻さらしてるもんだから、ついつつかり世の中の厳しさを教えてあげようかなーって。

ていうか相手が絶賛アブリギッシュ四十代な中年親父ならともかく、私のはスキンシップだしねー。初春がしつかりとジャッジメントとして周囲に気を張っていることが出来ているか、チェックするのも友人としての勤めってヤツよ」

「いやいや私この前もう止めてって言いましたよね?! ていうか女の子同士でもセクハラって通用しますよね?! 私ジャッジメントだから変態行為現行犯で詰め所まで連れていってもいいですよね?!」

学園都市はほぼ中央に位置する、第七学区。

数多ある学区の中でも最大級に近い面積を持つ学区には、それこそ多数の学校がひしめいており、道を歩く生徒達の制服も多種多様。有名ブランドのデザイナーの力を借りた制服も多く、センスも良く独創的な服装は生徒達の自尊心の類を大いに刺激する。中には制服のデザインで学校を決めようとし、結局失敗撃沈した学生も多い。

その中でもシンプルな部類。真っ白な生地カラーに紺色の襟に白いライン。そして赤いタイ。スカートは膝上少し上の落ち着いた丈。

世間一般的な女学生の制服をパターン化したら、紛れもなくトップ3には入るだろう代表的なデザインのそれは、ある意味では野暮つたいと言えるかもしれない。

生徒からも賛否両論だ。中には奇天烈なデザインの制服もあるから何とも言い難いらしいが、やはり学生として個性は拭いがたい。

しかし学園都市の清潔なイメージには十分以上にマッチする。そんな制服を着込んだ女子中学生が二人、姦しいという表現がこの上なく似合う雰囲気を選びに撒き散らしながら騒いでいた。

「今日のパンツはピンクのストライプかあ。別に悪くはないけど、ちょっと王道過ぎない？ まあこれが水色だったら本当にテンプレ乙ってカンジだけど、もうちょっと上品で大人っぽい下着でも文句は言われないっていうか」

「ななななんで私の下着のことまで佐天さんに言われなきゃいけないんですかっ?! もういい加減にして下さいよーっ!」

一人は背中の中程まである長い黒髪を真っ直ぐに下ろし、白い花の意匠をした髪留めをアクセントにあしらった少女。

勝ち気そうな眉毛が特徴的で、今も気っ風の良い姉御肌といった笑みを浮かべ、目の前で慌てふためきながらスカートめくりを抗議する友人をからかっている。

もう一人は百を超える学生の中に埋もれない強烈な個性を放つ少女。いや、顔立ちはそのままで目立つものではない。可愛らしいが、悪く言えば十人並み、良く言えば親しみやすい美少女である。

一際異彩を放つのは短めに切りそろえたショートカットの頭の上にのせられた、花冠。

子どもが遊びで作るようなレベルではない、色とりどりの、見事な花の盛り合わせだ。炎天下だというのに頭の上の花は元気に咲き誇り、見慣れたのだろうか、道行く生徒達からの視線は奇異を含んだものではないが、彼女自身が都市伝説の一つになりかけているのは、知らぬは本人ばかりなりというものであった。

「ふう、初春は毎日毎日ホントにからかいがいがあるよねー。  
ところで初春は今日も風紀委員のお仕事？」  
ジャッジメント

「えーと、今日は確かシステムのチェックとかで支部に入れないんですよ。私、せつかくの機会だから支部のPC根こそぎ魔改造しようと思ってたのに、入るなって言われて。」  
メンテナンス

だから部屋のお掃除でもしようかと思ってたんですけど。佐天さんは何か用事でもあるんですか？」

「ああ、そりゃ良かったわ。ちょうど今日さ、――の新譜が発売されるっていうから、CDショップに寄りたかったのよねえ」  
おしごはつ

「CDショップって、駅前広場の近くにある店ですか？」

「そうそう。最近改装したとかでキャンペーンやってるからさあ、せっかくだし初春に付き合ってもらおうかと思ってたんだけど、どう？」

「いいですよお。ヒマでしたし、一人で部屋の掃除するのも寂しいですからね」

相も変わらず日差しは暴力的だが、それでも日常は普通に存在している。

暑いからといって部屋に閉じこもるのは残念な大人の選択肢かもしれないが、現在進行形で青春を謳歌している彼女たちにとってはあり得ない選択肢だ。

学園都市では技術が進歩している分だけ、家の中においても娯楽は数多い。特に髪の長い方の少女、佐天 佐天涙子にしてみれば、趣味によってヒマなど簡単につぶれてしまう。というか潰れてはいけない時間まで潰してしまい、テスト前に痛い目を見ることが多い。しかし自然に、外に出ることを選ぶのも彼女たちぐらいの年頃だからこそだろう。実際あまり長時間炎天下に居ては熱中症の危険性すらあるのだが、そこまで考えてはいないようだ。

「トンクス。じゃあ突っ立ってるのも何だし、さっさと行こうか！CDショップに寄る前に喫茶店で涼んでくのもいいし。このまま立ってるとこんがり焼けちゃいそうだね。日焼けって意味じゃなくてさ」



「それもそうですね。早めに行かないと混んじやうかもしれませんが、急ぎましようか」

第七学区は巨大だが、その分だけ駅やバス停なども充実している。涙子や初春、初春飾利の通う柵川中学も駅から微妙に離れたところにあるから、バス路線も通っている。とはいえ生活に必要な設備だから学生は格安で利用できるとはいえ、やはり混む。

特に朝、一分一秒でも早く学校に急ぎたい時などに混んでいて乗れなかったなんてことになったら悲惨だ。そのためにそれなりの数の学生が徒歩通学を選択していた。

「あーあ、今日は五限が長引いちゃったから、それだけでも不利よねえ。教師もプロなんだから時間通りに終わらせるのが職務意識つてもものだと思うんだけど」

「まあ先生方にも色々あるんですよ。ウチの中学は低レベル能力者ばかりですから、指導に熱も入っちゃうって前に別の先生も言っていました」

「どれだけ指導に熱入れられても、それだけで能力が伸びたら苦労はしないんだけど、ね」

「あー」

何処か自嘲気味に呟いた涙子に、初春は逡巡気味に声を発した。彼女の事情からすれば、確かに褒められたものではない発言も納得出来る。だからこそ自分が慰めの言葉を持っていないことにも、

自分自身への苛立ちの一種を感じさせられた。

学園都市を、外の世界に対して神秘的な、非現実な存在にしている要素の一つ。

それは外部との交流を立つ閉鎖的な体質でも、数十年分も進んだ  
オーバーテクノロジー  
超科学でもなく、秘密警察やら暗殺組織やらの根も葉もない  
も言い難いが、そういった確証のない噂でもない。

「 すいません、佐天さん」

「 え？      ああ、別に初春が謝るようなことじゃないでしょ？  
私が無能力者レベル0なのも、一向に超能力者レベル5はおるか低能力者レベル1にすらな  
れないのも、初春のパンツがピンクのストライプなのも、ぜーんぶ  
誰が悪いわけでもないでしょ？」

「私のパンツは関係ないですよおっ！！」

E S P  
超能力。

近代に入り、科学技術が進歩して、魔術や呪いや占いの類の噂の  
信憑性が薄らいでいくのに代わり、根も葉もないトリックやペテン  
の類として広まった噂の一つ、と認識されている。

曰く、手も触れずに物を動かす。

曰く、人の心を読む。

曰く、心で会話をする。

曰く、遮蔽物の向こうのものを見ることが出来る。

曰く、未来を幻覚として視る。

曰く、瞬間移動をする。

曰く、火を出すことが出来る。

昨今ではバラエティ番組などで見せ物のように登場したり、詐欺師としてトリックを暴こうという企画が生まれたり、与太話の一種であった。

もちろん中には、あるいは本物がいたのかもしれない。けれど当然のようにそれを確かめる手段などなく、結局のところ大抵が正真正銘の詐欺、ペテンの類である。

しかし、そう、つまり、偽物があるということは、本物があるということだ。

乃ち、サイコネシス念動力。  
乃ち、サイコメトリー読心能力。  
乃ち、テレパス念話。  
乃ち、クレヤボヤンス透視能力。  
乃ち、ブレイクニション予知。  
乃ち、テレポーテーション空間移動。  
乃ち、パイロネシス発火能力。  
乃ち、

「薬も脳開発も、なんか自分が能力者に向かって前進してるって実感ないし。ホント、あんなので実際に超能力者になれるのかなあって思っちゃうわよね」

「まあ実際にウチの中学からでも異能力者<sup>レベル2</sup>や強能力者<sup>レベル3</sup>も出てますし。まあ年に一人か二人いれば良い方だって言いますけど」

この、学園都市が外の世界に対して異常と言われる所以が、これだ。

昔から与太話として信じられていた超能力の、超能力者の開発。  
それがこの学園都市の最大の特徴。

約二百三十万人の学生は、基本的に残らず能力開発を受け、超能力者への道を歩んでいた。

無能力者<sup>レベル0</sup>。六割方の学生が当てはまる、能力を発現出来なかった学生。全く能力が無いわけではないが、それでも所謂落ち零れとして扱われてしまう大多数が持つ力。

低能力者<sup>レベル1</sup>。多くの学生が当てはまる、スプーンを曲げる程度の力。  
異能力者<sup>レベル2</sup>。レベル1と程度は大体同じ。日常ではあまり役には立たない力。

強能力者<sup>レベル3</sup>。レベル1やレベル2とは異なり、はつきりと観測され、日常では便利だと感じる程度。このあたりから、能力的にはエリート扱いされ始める力。

大能力者<sup>レベル4</sup>。このあたりになると圧倒的な威力を持ち、軍隊において戦術的価値を得られる程の力。

超能力者<sup>レベル5</sup>。学園都市でも七人しかいない、一人で軍隊と対等に戦える程の力。

能力者はこのように5段階の区分けがされ、自らが持つレベルによって学園都市から受ける恩恵も様々だ。

具体的に言えば奨学金の増減や入学する学校の制限、利用できるサービスの違いなど。特に基本的にはアルバイトをせずに奨学金で生活をする学生にとっては、収入の増減はダイレクトに生活に影響する。

だが、どちらかといえばそういうことは些事ではない。結局のところ学生の為の街なのだから、生活必需品の類は非常に安価に設定されているのだから。

「あれ、でもウチの学校で強能力者<sup>レベル3</sup>なんていたらすぐにエリート扱いで噂になってるはずだけど」

「そういう人って、すぐに他の学校に転校しちゃうらしいですよ。ホラ、ウチの中学じゃ高位能力者向けの学習環境が整ってないらしいですから」

「ああ、エリート様はもつと良い学校に行っちゃうってわけね。はあ、大星霸祭でも良いトコなしだし、イマイチ冴えないよねえウチの学校」

「大星霸祭だと、高位能力者の数が勝負を分けますから。私達の学校は、そもそも無能力者<sup>レベル0</sup>と低能力者<sup>レベル1</sup>が殆どを占めてますから、高位能力者が多い中学相手だとフルボッコですよ」

何処の街にもチンピラはいる。同じように、学園都市の路地裏にも不良が溜まっていて、問題を起こす。

けれど学生ばかりの都市だから、学生ならではの問題も他に比べて多くなるのだ。

乃ちそれは、能力による格差と虐待、偏見。それらは能力のレベル別に厳格な区別がされている学園都市だからこそ、外の世界に比べて根強く息づいていると言えた。

虐める方もそうだが、虐められる方の弱者意識にも、きわめて根強く。

「最近では高位能力者による、無能力者<sup>レベル0</sup>狩りなんてものも流行してるって上層部でも問題になってるらしいですよ？ 佐天さんも、一人で路地裏とか歩いちゃだめですよ！」

「分かってるってば、初春は心配性だなあ。第一このあたりの中学はみんな似たり寄ったりで、高位能力者なんて数えるぐらいしかないじゃないの」

「そうはいつでも、第七学区は繁華街とかも多いですから」

暫く歩くと店も増え、日陰側に寄れば日差しも防げる。その分だけそちらに通行人も多めになるから歩道は随分と混むが、それは仕方がないことだろう。

この辺りはまだまだ長閑で、学生達が繁華街と呼ぶようなところではない。せいぜいが学校帰りによる喫茶店と言ったところあり、野暮ったい。

それにこの辺りで喫茶店なんかに入ってしまったては、また駅前まで長く暑い道のりを堪え忍ばなければいけない。それは勘弁被りたいところだった。

「ところで初春、なんかいつもすごく忙しいけど、風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>って具体的に何やってるんだっけ？」

「え？ 佐天さんだって風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>がどんな組織だってことぐらいは知ってるでしょう？」

「そりゃ、警備員<sup>アンチスキル</sup>と並ぶ学生主導の治安維持組織<sup>ジャッジメント</sup>っていうお題目ぐらいなら知ってるし、パトロールしてる風紀委員は良く見るよ？ けどさ、初春が仕事してるとこなんて見たことがないし、風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の支部<sup>kws k</sup>だって見たことないし。そこんとこ詳しく」

「まあそれは確かにそうですね」

初春が右袖に付けた緑色の腕章。盾をモチーフに扱った、外の世界では警察官も付ける腕章に似たデザイン。

学園都市にある二つの治安維持組織の内の一つ、ジャッジメント風紀委員。学生達によって組織され、実際の警察官と同じような役割を与えられた事実上の警察組織。

不完全ながら逮捕権なども持った権力構造の一端でありながら、その殆どを学生だけで占められており、いわゆる文字通り、一つの学園を守る風紀委員という体だった。

「そうですね、まあ一番の仕事はパトロールってことになるんですけど、その道すがら色んな仕事をしてますよ？

ゴミ拾いとか、失くし物探しとか、迷子案内とか」

「意外に地味なんだなあ」

「地味言わないで下さいっ！ いいですか佐天さん、事件なんて起こらないに超したことはないんです！ 私たちは所詮学生なんですから、学生の視点からの風紀管理が必要なんです。押しつけた風紀なんて学生としても楽しくも何ともないですからね。」

私達、ジャッジメント風紀委員の本当に仕事っていうのは、そういう草の根からの治安維持とか風紀管理ってヤツですね！」

「すごい難しいこと言ってるけど、自分で分かっている？」

「べ、別に研修で教えてもらったことをそのまま口にしてるわけじゃないんですよっ！ 分かってないから暗記してテスト乗り切った

つてわけでも、ないんですからねっ！」

アンチスキル  
警備員は逆に、教員によって構成された治安維持組織である。

実際の逮捕権や拘留権などは主に大人であるこちらが担当している。しかし如何せん相手は学生、乃ち、超能力開発を受けた学生が相手では所詮一般人である教員には荷が重い。

何せ生身でトラックをぶん投げたり電撃飛ばしたり火炎放射器よろしく炎を飛ばして来たりする学生である。戦車が装甲車でも持つてこないと相手にならない。

ジャッジメント  
結局のところ風紀委員の後始末、あるいは後詰めとして存在している点もあった。もちろん、学生では不十分な判断力を補う役割もあるのだが。

「まあ総括すると、やっぱりパトロールが基本ですね。通報された場所に急行することも多いですけど、やっぱり支部で籠もっていても出勤が遅れますし。」

レベル1  
まあ私は低能力者ですから戦闘は役立たずですし、支部で情報整理とか後方支援をやっていることが多いんですけど」

「へえ、そういえば初春ってPCいじくるの好きだったよね。適材適所、ってヤツかしら」

「そう言ってもらえると嬉しいですけど　まあ、高位能力者に憧れはありますよ、やっぱり。学園都市の学生ならみんなそう思っているはずですよ」

もう十五分ぐらいは歩いたことだろうか、次第にビル街に近くな



つて来た。

ここまで来ると学生の数も多くなってくる。様々な制服は、しかし通い慣れた今となっては物珍しいものではない。

超能力を学ぶ学生達とは言えども、本質は外の世界と全く変わらない。道行く顔が無駄にキリリとしていたり、無駄に理知的であったり、逆に暴力的に見えたりということとはなかった。

結局のところ人間の本质なんてものは早々変わるものじゃないのかもしれないと、佐天はぼんやりと考えながら歩いていた。

「パトロールって、いつもやってんの？ 初春ってば週の半分は風紀委員のお仕事なんですーって忙しいけど」

「大体は夕方、暗くなるまでぐらいですね。風紀委員も学生ですから、例外を除いて完全下校時刻になったら軽々しく出歩くわけにはいきませんし」

「その後はどうするのよ？」

「警備員の出番ですね。まあ基本的には人通りとか無くなるはずですから、仕事も楽で良いって聞いたことがあります」

モノレールの駅から少しだけ離れた、しかし繁華街にはほど近く遊びの前に寄るにはちょうど良い場所。

そんなところにある大きめの喫茶店。学園都市内でしかないチェーン店のファーストフード。既に放課後を楽しむ学生で溢れている。五限の能力開発が長引いたせいか、二人分ならやっという席しか空いていない。

「ふーん、成る程ねえ。パトロールなんて言葉だけ聞くと簡単そうだけど、色々と頑張ってるんだ、初春は」

「まあ雑用みたいなものばかりですけどね。」

でもパトロールの最中に因縁ふつかけられることはまあ、無いわけじゃないんですよ？ 路地裏で屯たむろしてる不良とかだと風紀委員ジャッジメントに恨みを持っている場合も多いですし」

「へえ　　って、それって危ないんじゃないの？！」

「大抵は白井さんと一緒にいますから、瞬殺してくれるんですけどね。　前に一回、ちよつと一人の時に絡まれちゃったことがあって、その時は通りすがりの人が助けてくれたから問題は無かったんですけど」

「通りすがり？」

夏場に無性に飲みなくなる不思議飲料、マクロシエイクを頼んで席につく。

店内は冷房がガンガンに効いていて快適だが、全面ガラス張りの外を見れば暴力的な日光は相も変わらず道を歩く学生達を殺したいのかという勢いで仕事をしており、まるで天国と地獄だった。

「夏の太陽ってホント殺人的よねえ。　こうでなきゃ夏！　って感じはしないんだけど、それでもやっぱり嫌になっちゃうわよねー」

「まあ学園都市でも天候操作出来るレベルの能力者は限られています

し。ていうか佐天さん、なに勝手に私のシェイク味見してるんですかっ?!」

「私のはバニラだしー、初春のストロベリーはどんな味かなーってほら、初春も私のバニラ味見してもいいからさあ」

「そういう問題じゃないです　って、こんなに飲んで！　もう仕返しですっ！　ポテト下さいねっ！」

「あーどうぞどうぞ、好きなだけ。私ケチャップ貰ってくるねー！」

楽しそうに跳ねてカウンターへと向かう涙子に、初春は軽くため息をついて遠慮無くバニラシェイクを啜った。

確かに涙子は強引でお調子者なところがあるが、やはり良い友人だ。自分は振り回されがちだけれど、不思議なことに何だかんだで楽しい。

なぜ一緒にいるのかと問われれば、やはり楽しいからだと答えるのだろう。　パンツめくるのだけは止めて欲しいけど。

「はあ、ホント佐天さんは台風みたいな人です　。少しぐらい私が佐天さんを振り回せたら、楽しいのに　　ッ?!」

瞬間、轟音。そして震動。

机と一体化された椅子を激しい震動が襲い、思わず手にしたバニラシェイクを取り落とす。緩く蓋を閉じられていたのだろう、簡単

に中身がこぼれ落ちてしまった。

「な、何っ？！ 何なんですかつ？！」

慌てて爆音がした方向へ視線を走らせると、そこは店の入り口だ。綺麗にガラスが張られていた自動ドアは無惨にも焦げ付き、爆発し、吹き飛んでしまっている。床まで真っ黒で、かなり高威力の火炎か、あるいは電撃で攻撃されたのだろう。

基本的にはカウンターの下に、警備ロボットが据えられているのだが、攻撃はそこまで及んだのか、警備ロボットの格納スペースは完全に破壊されてしまっていた。

「手を挙げるっ！ 全員その場から動くなっ！」

学生達が自由を謳歌する放課後。

その放課後に不釣り合いな怒鳴り声を上げたのは、誰が見ても明らかに格好をした二人の男。

久しぶりの非番から、仕事へ。  
ジャッジメント

風紀委員の職場が、そこには広がっていたのだった。

第1話 『少女、二人、繁華街』 (後書き)

初春 PC 狂

佐天 ネラー

どうしてこうなった

## 第2話 『男、少女、第六位』（前書き）

ここまでで書き溜めていた分が終了。早いですな（汗）。まあ一話につき五千文字前後を目標にしているので、かなり早いペースで更新できるでしょう。何故、倫敦の方は一話あたり二万文字なんて馬鹿みたいなことになったのか。

## 第2話 『男、少女、第六位』

「手を挙げるっ！ 全員その場から動くなっ！」

すぐさま風紀委員の腕章に手を添えてカウンターに向かって走り出した初春を、年若い男の怒声が遮った。

立っているのは二人の男。一人は何の変哲もない白いワイシャツに、学生服の黒いズボン。もう一人は醜悪な髑髏をデザインしたTシャツにジーンズ。どちらも時代錯誤な黒い目出し帽を、この暑い夏のさなかに被っていて、顔は分からない。

この状況を見て誤った判断をする者は一人もいないだろう。乃ち、強盗。

「おいコラ、店員のお前！ 警報は無駄だぞ、電気系統は俺が電撃で全部潰した！」

「レジにある金を全部この袋に詰めなっ！ 金庫の金もだ、早くしろ！ 早くしねえと丸焦げにするぞ貴様らっ！」

状況判断。

店の出口は一つだけ。非常口はどうやら、カウンターの向こう、キッチンにあるらしい。

ガラスを破れば出られないことはないが、もちろんそれは犯人に

気づかれる。そうしたら、カウンターの方にまだ残っている客が襲われるかもしれない。

犯人の能力は、ざっと見て強能力者<sup>レベル3</sup>以上。簡単に人を殺せるだけの能力を持っていることは間違いないのだ。

「もしもし風紀委員第一七七支部ですか？ 固法先輩、私です、初春です。第七学区中央駅前ファーストフード店で強盗事件発生、至急警備員<sup>アンチスキル</sup>の派遣を要請します！」

『初春さん?! 分かったわ、急いで白井さんを急行させるから、関係者の安全を最優先に行動しなさい!』

「了解しました!」

再度、状況判断。

犯人は二人。どうやら発言から鑑みるに、夏仕様の学生服は発電<sup>エレクトロ</sup>能力者、そしてもう一人の能力は不明。だが拳銃を持っている。

既に店員は抵抗を諦めて金を集めており、犯人達はニヤニヤと自らの成功を確認して笑っている。

「佐天さん!」

視線を移動すると、あろうことが犯人から一番近い場所に涙子がいる。

拳銃の銃口は涙子に向けられており、わずかに身じろぎするだけで引き金は引かれてしまうことだろう。



「これじゃ手が出せない。お金、取られちゃう」

再々度、状況判断。

ここまで完璧にあいての思惑通りに言ってしまうと、この場での捕縛は不可能。なにせ自分は低能力者であり、戦闘手段は皆無に等しい。

念のためスタンガンを持参してはいるのだが、そういえば発火能力者<sup>バイロキ</sup>に熱が効きにくいと同様、発電能力者にはスタンガンなどの電気系の武器が効かないと聞いたことがある。

ましてや拳銃やら能力やらで人質が取られてしまっている状況で下手に動くと、被害を拡大させる恐れがあるのは、風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の研修で耳が痛くなる程に聞かされていた。

「仕方ありませんね、ここは人質に被害が出ないように注意して、応援の到着を待つしか」

一人の学生にやれることには限界がある。それに、事件を未然に防ぐのと同様に、事件が起こった後、あるいは完了してしまった後にも解決すれば良い話。

逃げた犯人を追跡し、然る後に捕縛。これも十分に風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>の仕事である。

初春はカウンターから遠い位置のテーブル席にいることを利用して、犯人達から見えないように近くの監視カメラと風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>第一七七支部のPCとの接続を開始した。

こんな大事件が起きてしまつては、支部のメンテナンスチェック

も中止。となると諦めていたPCの魔改造<sup>メンデナンス</sup>だって出来るかも知れない。

「よし、これで全部か?!」

「は、はい、金庫の鍵は店長が持ってますので、開けられませんでしたが」

「ちっ、シケてやがるな。おい、ずらかるぞっ!!」

「お、おう!」

どうやらレジの金だけを詰めたらしい。用意した袋はぺたりと残念な量を示しており、憎々しげに舌打ちをした夏服の男が、袋を掴んで走り出す。

Tシャツの男は夏服の男に遅れること数拍、拳銃で回りを牽制してから走りだそうとして

「おっ?」

「あん?」

ドン、と軽い音がして、あからさまに緊急事態の店内に入ってきた一人の少年にぶつかった。

見事なまでに真っ白な白髪に、小柄な体躯。牙か爪のようなデザインの黒いTシャツを着て、黒いジーンズを履いている。まるで女

かと思まごう程の、華奢な少年だ。

もしかしたら体重は自分よりも軽いのではなからうか。腕や足は  
大の男が握ったら折れてしまいそう。

が、よろめいたのは少年ではなく、強盗の方。

「な、なんだよこのガキ?!」

「なんだよ、はこつちの台詞ですけどオ?　つかホントに何な  
ンですか、この有様はア?　俺ア新発売のトロピカルバーガーセッ  
ト買いに來ただけなんだがなア。

あ、ドリンクはコーヒーな。アレ普通のドリンクよりも二十円高  
いからよ、セツトにするとオトクなんだよなア、そう思わねエか?」

「ば、馬鹿にしてんのか貴様!」

「はア?」

「拳銃<sup>コレ</sup>が見えねえのか!　さつさと其処を退きやがれ!」

「ハ、ハハ、ハハハ、もしかしてそんなチンケな玩具でこの俺  
にケンカ売ってやがンですかア?

冗談キツイぜおい、俺を殺すつもりなら核弾頭でも持ってきなア  
!」

「な、嘗めんなこの野郎!　いいぜ、死ねクソガキ!」

「や、やめて下さいっ!」

銃声、二回。

真っ直ぐに少年の額に向けた銃口から放たれた銃声は、過たず少年の額を穿ち、血の花を咲かせる。

そう考えた初春は思わず風紀委員の腕章を隠すことも忘れて身を乗り出し、叫び声を上げた。

まさか、一般人に犠牲を出してしまうとは。こんな風紀委員失格

「  
が」

「え？」

「ああああああッ?!」

だがしかし、悲鳴を上げたのは少年ではなく男の方。  
拳銃を取りこぼし、自らの足を悲痛な叫びを上げながら押さえる。  
見ればジーンズは太股の辺りが真っ赤に染まっている。

「こ、このクソガキ、何しやがったああああ?!」

「ハ、別に何もしてませんけどオ? テメエが何かしたンじゃねえのかア、ん? “俺に向かってその玩具ぶっ放す”とか よオ!」

「じ、お ツ?!」

一閃、少年の振り上げた足が唸りを上げて男の腹へと吸い込まれ

る。

どれほどまでの威力だったのだろうか、その足は過たず“水月”と呼ばれる急所にぶち当たると、男の体を浮かせてカウンターの向こう、キッチンまで軽々と吹き飛ばした。

「な、何なのよコレ　！」

「佐天さん大丈夫ですかっ？！」

「あ、あたしは大丈夫、けどコレはいつたい　」

すぐさま涙子に近寄って安否を確認すれば、幸いにして無傷。ただし腰が抜けてしまったようで、ぽかんと今さっき強盗犯の片割れを蹴り飛ばした少年を目を見開いて見つめている。

「アー、悪いけどトロピカルバーガーセット貰えますウ？　ドリンクはコーヒーで。あ、あとコーラー一つ追加で」

「す、すいませんお客様、アンチスキルこんな調子ですから、ちょっとご注文は。こ、こら君、早く警備員に連絡を！」

「チッ、使えねエ。　　オイお前、そこの脳天花咲か女」

「そ、それもしかして私ですかっ？！」

こんな有様だというのに図々しく注文しようとする少年を、それ

なりの地位にいるらしい制服の違う店員が冷や汗混じりで丁重に断り、もう一人の店員に檄を飛ばす。

苛々と舌打ちをする少年は続けて呆然としている初春達に振り向いて、言った。

「お前さア、ジャッジメント風紀委員だろ？ さっき逃げた片割れ、追っかけなくていいのかア？」

「え？ あ、はい、佐天さん失礼します！」

「ちょ、ちよつと初春ッ?!」

慌てふためき、走り出す。幸いにももう一人の犯人が逃げ出した方向は目になっていた。

応援が来るまで、せめて力のない自分でも相手の居場所ぐらいは把握しておかなければいけない。ジャッジメント風紀委員としての使命感から、初春は自分の出来る限りの力で足を動かした。

「ま、待って下さい！ ジャッジメント風紀委員ですっ！」

「何いつ?! くそ、こんなに早く！ んの野郎なにしていやがった?!」

人通りが邪魔したのだろう、男が通った後は人が疎らになって逃げた方向を見ていたから、追うのは足が遅い初春でも何とかあった。そも覆面なんて付けた人間が目立たないわけなどないのだ。どう

しようもなく、分かりやすかった。

「クソが！　こんなところで捕まるわけにはいかないんだよっ！」

「きゃあっ？！」

電撃、疾る。

流石に逃げながら正確に電撃を追っ手である初春に当てるのは難しかったらしく、それでも低能力者<sup>レベル1</sup>の初春を怯ませるには十分だった。

「なんだよ、途中まで上手くいったのに　　こんなところでやめられねえだろうがぁ！」

焦燥感ばかりが先行し、走り続ける。

粗雑な計画に見えて、実は入念に練っていた。人の出入りをしっかりと観察して、店員のシフトも確認していたし、風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>や警備員<sup>アンチス</sup>の巡回が無い時間帯も見計らった。

もう止められないのだ、ここまでやったら途中で投げ出すことなど出来ない。後ろに付いていた相手は既に捕まってしまったのかもしれないが、ここまで来たら徹底的に、逃げ切ってやる。

「チイツ、通行人か！　おいテメエ、そこを退けえ！！」

そう必死で思いながら走っていると、目の前に人影が見えた。

長身で肩幅は広く、髪の毛を無造作にオールバックに纏めた男。年の頃は高校生か、ともすれば大学生ぐらいか。この暑いのに長い白衣を着込み、奇妙な存在感を辺りに振りまいている。

顔立ちはごくごく普通。どちらかといえば精悍な方かもしれないが、表情はぼんやりと、何処か空虚な色をたたえていた。

細身の体には強大な力が眠っているように、ちつとも見えない。確かに骨格はがっしりとしているかもしれないが、全体的に肉が足りない印象で、何処はかとなく不自然。

しかしどんな存在かは知らないが、無視できない。そんな空気を感じ、強盗犯は足を止めた。

「ん？」

「そこを、退けて、言っただろうがああー!!」

右手に電撃を収束、放電。

何条もの、何万ボルトもの電流が立ちつくすままの白衣の男を襲う。人体を感電死に追い込むには、いや、もはや感電などという生温いものではなく、やけどにまで追い込んでもおかしくない威力の電撃。

それが何の容赦もなく、炸裂した。

「ん？」

「え？」



「ふむ、何をしたのかな、キミは？」

「何い?!」

間違いなく全力の電撃だった。自分に放てる、最高の電力だ。  
冷静になって考えてみれば人一人ぐらいなら十分に殺せるだけの  
威力だったはずなのに、直撃したはずなのに、どうして目の前のこ  
の男は平然と立っているのだろう。

「ああ、なるほど、キミは一発電能力者<sup>エ</sup>か。悪いねボーヤ、  
僕にはそういうの効かなかったりするってことです」

「き、効かない?! お前まさか俺と同じ、いや、俺より高位の発  
電能力者<sup>レクトロハンド</sup>?!」

「お? あー、いやいや別にそんなことはないさ。僕の能力は何の  
変哲もない『発火能力<sup>バイロキネシス</sup>』だよ」

白衣の下に着込んだ白いワイシャツに焦げを作りながらも、合点  
がいったように白衣の男は笑った。

ぞくり、と背筋に悪寒が走る。“とある事情”で自分の能力に最  
近自信がついてきたというのに、圧倒的な差を感じさせられる、恐  
怖。

「ただし残念なことに、キミと僕では強度<sup>レベル</sup>が違っってことで  
す」

「おおあああああああ？！！！！！」

瞬間、周りの大気が燃え上がり、強烈な熱を感じた。

それは自分を焦がすわけではない。が、不思議にも意識  
遠のい て が

「ふわあゝ、凄い」

「まあ、こんなモンかな。怪我させないように制圧するのも、僕  
能力だと一苦労ってことです」

追いかけてきた初春は、その一部始終を見て息を呑んだ。

白衣の男から疾った炎は強盗犯の周囲を囲み、燃烧によって酸素  
を奪い、それによって強盗犯の意識を奪ったのだった。

倒れた強盗犯を見れば、集中的に酸素を奪ったはずの顔面には焦  
げ一つない。どれだけ精密な能力制御だろうか、尋常ではない精度  
だ。

「おや、キミは確か前に不良に絡まれてた残念な風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>？」

「残念な？！ ていうか貴方はあの時の？！ そ、その節は本当に  
ありがとうございましたっ！」

ちらりと視線をこちらに移した白衣の男が、ぱちくりと目を瞬か

せる。

初春にとつては、街中ではあまりにも特徴的な服装と、遭遇した状況からしっかりと記憶にあった人物。

「いやぁ悪いね、街中で能力使っちゃったけど、これ見逃してくれると嬉しいことです」

「あ、それは犯人逮捕に協力してくれたということで処理できるから、問題はありませんが。って、ああ早く警備員に連絡しないとっ?！」

「事情聴取とか、必要なかなぁ。連れがいるから勘弁して欲しいんだけど」

慌てて携帯を取り出し、アンチスキル警備員へと逮捕の要請をする。実際に護送などの機材を所持しているのは風紀委員ではなく警備員だ。ジャッジメント

犯人を引き渡し、報告書を作成して風紀委員の仕事は終わる。ここからが本番だと言っても過言ではない。ジャッジメント

「そうですね、そちらは警備員アンチスキルの方の管轄ですから私には何も。でも協力者ってことですから、簡単に終わらせてくれると思いますよ！ わ、私も協力しますし！」

「そりゃそうかい。いやぁ、ありがたいってことです。連れはすぐに機嫌を悪くするもんで」

「はい、ありがとうございます。あ、そういえば電撃受けてま

したよね?!　だ、大丈夫なんですか?!」

へらへらと笑う白衣の男の腹を、慌てて初春は確認した。  
傍目に見ても強力な、事故レベルと呼んでも良い電撃だったのだ、  
某かの手段で防御したのかもしれないけれど、不安は残る。

「あれ、本当に無傷　？」

「あんまりジロジロ見ないで欲しいんだけどな。少しばかり恥ずかしいってことです」

「うわあっ?!　す、すいませんっ!」

見ればシャツに焦げ跡はあるが、確かに掠り傷すら見あたらない。  
一体どういう理屈だろうか、服が焼け焦げていて、肌は無事という  
のは不可思議なことだ。

例えば服越しにスタンガンを押し当てられたりしたならば焦げ跡  
が無いのも納得できるが、実際に服が焦げているのだから、電流を  
無効化したとしても、熱の跡が残っていておかしくないのである。

「ホントに、大丈夫なんですか　？」

「ああ、ちよつとした体質ってことです。ああいう攻撃は効かない  
んだよ。

それよりも服を焦がされた方がよろしくないね。まあ、白衣の前  
を閉じれば問題はない、か」

不思議そうな初春に、白衣の男は苦笑してみせる。

はあゝと目をぱちくりさせれば、確かにぴんぴんしている。何か能力が関係しているのかもしれないし、大丈夫なのだろう。

確かに焦げたのはシャツの腹の部分だから白衣の第三ボタンあたりからしたを閉じれば見えることはないだろうが、まったくもって暑苦しい。

「しかし二度目となると、何か運命じみたものすら感じるね。名前を聞いてもいいかな？」

「あ、はい！ 私、ジャッジメント風紀委員第一七七支部の初春飾利といいます！  
あの、貴方のお名前もお伺いしても？」

「ありや、言つてなかったっけ」

「はい、前はドタバタしてお伺いしてなかったのだから」

ゆらりと首を傾げる白衣の男の仕草は、その外見に似合わず妙に子供じみていて、違和感を感じる。

いわゆるギャップ萌えというヤツを狙っているのかと、初春は全くもって見当違いのことを考えた。

「僕は」

「おう、こんなところで待ってたのかよテメエは？ 探したぜエ、さ

っきの広場にやいねエんだからなア」

くるり、と突然聞こえた声に振り向くと、そこには先ほど店で強盗犯の一人を豪快に蹴り飛ばした少年が立っていた。

片手にはマクロナルドの近くにある牛丼チェーンの袋を提げている。どうやら近場で昼食をとることにしたらしい。

「ああ、そういうキミも随分と遅かったじゃないか。何やってたんだ、一方通行？」  
アクセラレータ

「うつせエなア、メシ買いに行ったら絡まれたンだよ。しょうがねエから別の店探して来たンだ、俺アトロピカルバーガー楽しみにしてたンだけどなア」

「あれ、お連れさんって？」

「うんうん、コイツってことです。あれ、もしかして二人は知り合いだったり？」

「ああ？ 知るかこんな歩く花瓶娘」

「花瓶 ツ?!」

さもどうでもよさそうに、空気を吐くように自然に悪態をつかれ、思わず衝撃に思考が停止する。

初対面の人間相手にここまで好き勝手言える人間に未だかつて会ったことがあるだろうか、いやない。(反語)

そもそも下手すると自分よりも年下の相手から、言いように扱われるのはどうなのだろうか。実際問題、年上の威厳とか何とか。

「まあまあ初春堪えて堪えて」

「って佐天さん、どうしてここに？」

「この人がフラフラ歩いていったから、私も初春追っかけなきゃって思ってた。そしたら方向が同じだったただだよ。それにしても派手にやったねえ」

周りを見れば確かに、狭い路地裏は強盗犯が放った電撃によってあちらこちらが焼けこげており、白衣の男の炎にしても、強盗犯に怪我を負わせないように配慮はしても周囲は気にしていなかったらしく、見事に焦げを作っていた。

見るも無惨、というのが当てはまる有様である。

「オイオイこれはデメエがやったんですかア？　ちょっとはしゃぎすぎだろ、いくら何でも」

「強盗犯の片割れ蹴飛ばしてカウンターの向こうに吹っ飛ばしたアンタにや言われたくないと思うんだけど」

「ありや正当防衛だつつの。俺に楯突くのが悪いンだろオが」

全く悪びれもせず言い放つ少年、白衣の男の呼びかけを信じる

ならば名前は『アクセラレータ一方通行』。

能力の正体は分らないが、至近距離で放たれた銃弾をはじくところから、それなりの強度レベルの能力者らしい。

「オラ用事が終わったンなら行くぞ。ゲーセン巡りは終わってねエんだからよオ」

「やれやれ、マイペースな人に振り回されるのは、残念ながら慣れてるってことです。悪いね、アンチスキル警備員にはキミの方からよろしく頼むよ、初春飾利サン」

「え？　ちょ、ちょっと待って下さい！　せめて連絡先　お名前だけでも！」

勝手に歩き出してしまったアクセラレータ一方通行に連れられて、白衣の男も歩き出す。

それは、困る。なんていうか状況的に止めるのも無理そうだが、アンチスキルせめて警備員に説明する時のために連絡先、最悪名前だけでも聞いておかなければ風紀委員の仕事が立ち行かない。ジャッジメント

「　ああ、それもそうか」

ゆらり、と男は振り返る。

何処か空虚な瞳と薄く微笑んだ唇。前に会ったときもフラリと消えてしまった、つかみ所のない姿。

その男は今回もまた、とらえどころのない様子で口を開いた。



「カガリ、だ。」

みんな僕のことをそう呼ぶよ。僕はよくあっちこっちブラブラしてるから、もしかしたらまた、こうして会うこともあるかもね。

その時にはまた、よろしくってことです」

結局フラリと男　カガリは消える。

入れ替わりのように警備員アンチスキルの護送車のサイレンが聞こえ、初春は自分がしなければいけない仕事を思い出した。

とりあえず鞆の中に一つだけ持っている手錠を犯人にかけて、もう片方の強盗犯も回収に行かなければいけない。あちらは一方通行アクセラレータが吹っ飛ばした後そのままだが、この短時間で目が覚めるようなことはないだろう。

だからそれは確かに“いつも通り”というわけではなかったけれど、十分に風紀委員ジャッジメントとしての初春飾利の日常だった。

## 第2話 『男、少女、第六位』（後書き）

主人公の能力の一端が明らかになりました。

とはいえまだまだこれだけでは分らないと思いますけどね。

ちなみに作者は真面目に熱力学とか語る姿勢を持たないので、そのあたり触れない感じで行きたいと思います。

一応ガチ理系なのでやろうと思えばやれるのですが、ちょっと面倒なので、申し訳ない。

第3話 『少女、二人、風紀委員』（前書き）

試験前なのに、同時に引越しが。

一体全く持って何なのか、もうわけがわからないよ！

### 第3話 『少女、二人、風紀委員』

「初春、聞きましたわよ！ 第七学区の強盗事件、お手柄だったそうですね！」

#### 風紀委員第一七七支部。 ジャッジメント

第七学区内は居住区、学校区としては学園都市の中でも一、二を争うほどに巨大な学区であり、故にそこに存在している生徒たちも非常に多い。

分母が大きければ、それにつられて当然のように分子も増える。それは例えば学区内における犯罪数、および犯罪者の数もそうであるが、もちろん同じように風紀委員や警備員の数も多い。

第一七七支部もその内の一つ。大能力者<sup>レベル4</sup>を一人強能力者<sup>レベル3</sup>が一人、ついでに低能力者<sup>レベル1</sup>が一人という能力者編成は、支部の規模に対しては随分と豪華な面子であった。

特にその内の大能力者<sup>レベル4</sup>が学園都市内でもかなり希少な空間転移能力者<sup>タ</sup>というのも、この支部の検挙率などの水準に影響を与えている。他の支部ではバイクやく車などを使って補っている機動力を、単独で、しかもさらに高いレベルで備えているというのは非常に大きなメリットになっていた。

「残念ながら店の設備に被害は出てしまいましたが、幸いにして被害者の中に怪我人はおらず、犯人も二人とも逮捕。盗まれた現金もすべて回収完了でしたわ。事後処理も完璧で、警備員<sup>アンチスキル</sup>の方も褒めて

いましたのよ」

「そうですか。でも私はたいしたことしてませんよ、白井さん。ほとんど通りすがりの二人組がやってくれたようなもので、はあ、こんなんじや風紀委員失格ですね」

ジャッジメント

風紀委員第一七七支部は、全体的にこじんまりとした事務所という雰囲気を感じていた。

清潔な白で統一された室内の調装は、アットホームというよりは完全にシステムティックなもので、ところどころにおいてある鉢植えやPC周りの私物などに生活というか、仕事をしている個人の名残を感じることが出来る。

給湯室の方に行けば個人が有志で持ち寄った紅茶やコーヒー、ココア、お茶菓子の類が整理整頓されており、そこは学生らしい所帯じみた部分を感じられるだろう。

ジャッジメント

基本的にはボランティアである風紀委員であるが、その仕事内容は本職の警察官にも勝るとも劣らず、それなりなハードワークを使命感で支えている状態だ。

決してオーバーワークというわけでもないのだが、かなりの時間を支部で過ごすのだから、可能な限り仕事環境は過ごしやすいように整えておきたい。

「そんなことはありませんわよ。正直、完全に予想できなかった状況からあそこまでの被害を店に与えられては、慎重になるのも当然です。」

ジャッジメント

結果として犯人を捕らえることもできたのですから補償もあるでしょうし、でしたら店側としても風紀委員をとにかく言うこともないというものです。風紀委員とて万能ではありませんから、で

きることをすればいいのですわ」

結局のところ風紀委員は学生に過ぎない。ジャッジメント

そもそも取り締まる相手が能力者であることが多いからこそ、同じ能力者である学生でないと対抗できない場合もある、というものであるが、実際のところ犯罪者の割合は圧倒的に無能力者や低能力者であることが多く、警備員でも十分に対応できる。アンチスキル

むしろ相手が銃火器で武装していたりする場合には学校の制服に腕章をつけただけの風紀委員の装備では対抗できない場合も多い。ジャッジメント

一応学園都市謹製の特殊素材を用いた盾や防具などの装備も無いことはないのだが、パトロールの際にまでいちいち必ず装備しているというわけにはいかないのだ。まず威圧感があつては、元も子もないことであるし。

そういった相手ならばしっかりとボディーマーを着用し、こちらにも実銃や各種対能力者使用の装備を整えた警備員の方が適任だったりする。アンチスキル

そもそもいくら使命感があつたとしても学生のボランティア。

学業優先であることは当然であるし、勿論いくら覚悟があるといつても風紀委員の活動で必要以上に重傷を負うというのもナンセンスである。ジャッジメント

出来ることを、出来る限り。職務中に負傷することは状況が許さなかったのならば決して悪いことではないが、もちろん褒められたことでもないのだ。

むやみやたらに危険に身を突っ込むのは、勇敢ではなく無謀と呼ぶ。

「白井さんがそれを言いますか」

「何か仰いまして？」

「いえ別に、何でもありませんよ？ そんなことより白井さんも、事後処理の後半を代わってくださいとあってありがたいと思いました」

「気にしないで下さいな。現場到着が遅れたのですから、そのまま暇していたりしては私の矜持に障りますの。初春は頑張って犯人を追いかけてくれたのですから、久しぶりに頭脳労働を引き受けただけですわ」

第七学区駅前にある某有名ハーバーガーチェーン、マクロナルド。学生たちで賑わう、ちょうど放課後に当たる時間帯。そこに突然現れた二人の強盗に、偶然にもその場に居合わせた初春は、犯人を捕縛して警備員ジャッジメントに引き渡した。

本来ならこのような荒仕事は背後で感心の声を上げている同僚

大能力者レベル4の空間転移能力者テレポーター、白井黒子の担当であり、低能力者レベル1で戦闘に使えるような能力でもない自分は後方支援が主である。

だからこそ黒子は、決して強度の低い初春レベルを卑下するわけでも何でもなく、惜しみない賞賛の言葉を送った。

「それにしても初春、さつきから何を調べておりますの？ 確かに今日のメンテナンスは中止になりましたが、非番なものには変わりないんですよ？」

あと、危険だからと固法先輩から貴女を必要以上にPCに近づけないように言われてるんですけど  
「

「何を言ってるのか、さっぱりです」

黒子の言葉のとおり、事件があったとはいえ今日<sup>ジャッジメント</sup>は基本的には非番であることから、支部の中に詰めている風紀委員は初春と黒子だけだ。

その黒子も事件を聞いて駆け付けた後の処理をしてきた帰りであるし、初春はそれこそ調べものがしくて色々融通が利く支部のPCを私的利用しようと思うたに過ぎない。

ちなみに第一七七支部が機能していない内は、他の支部がそれぞれ不足分を埋めていてくれるから、本来ならば事件があったとしても二人が出てくる必要はなかったはずなのだ。

「さっきも言いましたけど、犯人だって二人とも私が捕まえたわけではないんですよ。通りすがりの人が協力してくれなきゃ、逃げられてたかもしれません」

「通りすがり、ですか？」

「はい。名前だけは聞いてましたから、ちょっと気になったんで調べようかと」

支部に戻ってきてからこっち、初春は延々PCに向かってカタカタとキーボードを叩いていた。  
<sup>ジャッジメント</sup>

風紀委員の支部においてあるPCは決して最新式のものではなく、むしろ初春が日常的に自宅で使用しているものに比べても旧式の烙印を押されてしまうことだろう。



しかし使用目的、および使用者が使用者なために様々なことに  
いて融通が利く。たとえばその最たるものが、書庫バンクへのアクセスで  
あった。

「支部のPCの私的利用は控えるようにと、固法先輩から言い  
つけられていたような気がしますの」

「私的利用なんかじゃありませんよ。だってホラ、せっかく事  
件解決に協力してもらったのに素性が知れないままじゃ報告書を書  
くのも大変ですし」

書庫バンクとは、学園都市の学生達の情報を保存したデータベースであ  
る。主に能力について詳しくデータ化されたそれは、基本的に一般  
の学生には閲覧の権限がない。

能力はあくまで学業の一環として開発されるが、実際に能力行使  
を大々的に規制する方法などあるわけがなく、日々の生活に能力は  
密接に関係している。

その中の要素の一つは、やはり能力を用いた戦闘だ。決して多く  
の能力に該当するわけではないが、能力の強度レベルは戦闘能力に影響を  
及ぼす場合が多い。

何より能力の詳細が知られてしまうことは、乃ち相手に大きなア  
ドバンテージを与えてしまうことになるのだ。

また、学園都市では有る程度以上の強度レベルの能力者になると、学内  
の研究機関と協力して某かの研究に従事している場合がある。

そのような場合には、やはり能力の詳細を敵対組織に知られてし  
まうのは、かなりの問題があるだろう。

例えば研究の詳細が知られてしまうことになるだろうし、そこか

ら対抗策を練られてしまう可能性もある。企業利益が絡んでいる分だけ、むしろこちらの方が深刻かもしれない。

「やろうと思えば私のノートPCからでも書庫に接続ぐらいは出来るんですけど、やっぱり素直に支部のパソコンを使う方が波風立たないですし」

「まずその発想から何とかしなさいと申しているんですの！ ていうか物騒なんですよ貴女は、ことPC関連に限っては！」

「やだなあ、物騒なのは私じゃなくて簡単に突破される学園のセキュリティですって」

「その発言が既に物騒なんですのっ！ とにかく風紀委員として  
ジャッジメント  
といえますか一般市民として犯罪行為は慎んで下さいまし！」

唯一例外を挙げるならば、それなり以上の規模を持った研究機関や教師、ジャッジメント風紀委員や警備員などの治安維持組織などだ。アンチスキル

こちらはある程度のレベルまでの閲覧ならば、特に許可を得ることなくアクセス出来る。事件の度にしかるべき場所へ申請などして  
ジャッジメント  
いては、捜査が滞る。

もちろん申請無し、というよりは組織に応じて閲覧できる層があり、ジャッジメント風紀委員の支部が許可無しに閲覧出来る層などでは大能力者  
レベル4  
の能力の詳細程度で、個人情報までは確認出来ない。然しその程度であつても、初動捜査には十分に過ぎた。

「しかし初春、貴女が数十分から一時間も検索して見つけれ

ないんですの？」

「あ、はい。流石に“カガリ”っていう名前だけだと、ちょっと無理が。

名字かなって思ってた検索したんですけどHITしなくて、名前かなと思っていろいろと漢字を変えて検索しても駄目で。読み仮名でも検索出来てるはずなんですけど」

「それは妙ですの。確かその彼、能力開発を受けた『発火能力者』パイロキネシストなんでしょう？ だとしたら書庫バンクにデータが無いはずはありませんわ。たとえば無能力者だとしても、能力開発を受けていれば書庫バンクにデータは残りますもの」

突然に現れ、強盗犯二人を無力化した白髪の少年と白衣の青年。アンチスキル結局のところ自分がしたのは意識を失った犯人の拘束と、警備員への連絡だけ。小学生でも出来る簡単なお仕事です。少し前までは小学生だったのも確かだけど、風紀委員ジャッジメントとしては実に情けない。

白髪の少年の方は自分と同年か、あるいは下手すれば年下の可能性もあるだろう。身体強化系の能力者だったのか、銃弾を弾き、あの細い体からは予想もつかない程の力で拳銃を構えた強盗を蹴り飛ばしていた。

白衣の青年は間違いなく自分より年上だろう。大学生 いや、高校生か。おそらく三年生ぐらいだろう、背丈は百八十を超える長身だったし、顔立ちも随分と大人びていた気がする。

彼などは見事に片方の強盗、エレクトロハンド発電能力者から大能力者レベル4クラスの電撃を食らっていた。

だというのに、無傷。本人は『発火能力者』パイロキネシストと嘯うそぶいていたが、火

や熱で電流をどうやって防いだのだろうか。

「二度あることは三度ある。二回も会ったんですから次もあるかもしれないし、出来ましたらしっかりと調べてちゃんとしたお名前を知って、お礼をしたいところです」

「単に興味があっただけではありませんの？」

「それもそうですけど」

“カガリ”、とだけ彼は言った。

順当に考えれば名前なのだろう。名字なのか名前なのかは分からないが、普通は自己紹介をするならばフルネームと所属ぐらいは言うて欲しい。

「まさか偽名だったという可能性はありませんわよね？」

「だったとしても不思議じゃありません。別に不良の類には見えませんが、ジャックメント風紀委員に名前を知られたら困るような人って可能性もありますし」

「はあ、だとしたら探すのは不可能に近いですね。

学園都市二百三十万人の学生の中から、ひたすらに顔写真を照会し続ける作業なんて、よっぽど退屈を愛する人間でなければ耐えられませんの」

「出来ないこともありませんけど、ちょっと御免被りたいところ

るではありませんね」

ジャッジメント  
風紀委員第一七七支部所属、初春飾利。

戦闘などでは殆ど活躍できない低能力者でありながら風紀委員として立派に活動する彼女の本領は、情報処理能力の高さにある。

幾つものディスプレイを並べながら、並列してPCを操作、現場のバックアップをする。それは監視カメラの映像をチェックしながらの誘導などから、容疑者を書庫<sup>バンク</sup>から検索する作業まで、幅広く何でもこなす。

今までも目撃情報だけを頼りに真正銘二百三十万人いる書庫<sup>バンク</sup>のデータから犯人を捜しだしたことだってあった。けれど、それは仕事だからで、正直普段の些細な調べ物からそのレベルの労力を費やすのは馬鹿馬鹿しい。

「『発火能力者』のカテゴリで絞り込みは致しました？」

「ポピュラーな能力ですから、それでも膨大な数になりますよ。」

「確かに学園都市でもトップ10に入る能力ではありませんわね。やれやれ、八方塞がりではありませんの。」

バイロキネシスト  
『発火能力者』。  
エレクトロハンド  
『発電能力者』。  
サイコキネシスト  
『念動力者』。  
ハイドロハンド  
『水流操作』。

これらは学園都市でも代表的な能力であり、それぞれのカテゴリに非常に多くの学生が存在している。

それを一々調べるのでは、結局のところ覚悟が必要な能力であることには違わない。これは正直、キツイ。

「ちよつと時間がかかるかもしれませんが。今日明日とかでやる必要もないことだし、後回しにしますか」

「その方がよろしいですね。　　そういえばもう一人、協力して下さった方がいらっしゃったんですね？　そちらの方は調べなくてもよろしいんですの？」

「あ、そういえば」

二回も会った衝撃的な白衣の男性の方にはかり意識がいつていたと、初春は手鼓を打つ。

確かに協力してくれた通りすがりの人は二人だった。強盗犯を豪快に蹴り飛ばして全治二週間の怪我を負わせた　　正当防衛とはいえ　　白髪の少年。どちらかといえば書類の処理が面倒だったのは彼の方である。

「確か名前は　　アクセラレータ　“一方通行”とか呼ばれてたような」

「アクセラレータ　“一方通行”？　まるで能力の名前みたいですの」

「渾名ですかね？　とりあえず検索かけてみましょうか」

カタカタカタ、と軽快にキーボードの上を白い指が走る。

マウスやキーボードなどの前時代的な端末以外にも、学園都市には当然のようにタッチパネルや音声入力式の端末も存在しているが、初春は軽い快音がする黒い板を気に入っていた。

実際には利便性と汎用性から学園都市内でも殆どの場所でキーボードは未だに使用され続けているが、特に初春はこの端末を愛している。

何より手首を固定したままに両手の指が届く範囲での捜査で、基本的にはPCの全ての操作ができるのが良い。自分でキー配列を工夫すれば更に自由度や利便性は上がるし、使いこなしているという実感があるのも良かった。

「あ」

「見つかりましたの？」

「はい、こっちは意外に早かったですね。やっぱり能力名だったらしいです。」

えーと、学園都市序列第一位、『アクセラレータ一方通行』  
って、序列第一位?!」

ガタン、と椅子の肘掛けを大きく叩いて、初春は思わず体を浮かせた。

隣に立っていた黒子も組んでいた両腕をだらんと垂らし、はしたなく口と目を丸く開けている。

学園都市序列第一位。

文字にすると非常に簡潔なものであるが、それも当然、つまるところ学園都市に存在している二百三十万人の能力者の頂点。ただ一

人存在する絶対強者ということである。

大能力者<sup>レベル4</sup>というエリート中のエリートである黒子にしてみても、軽く雲の上の人間だ。いや、もはや人間という表現を当てはめても良いのかすら怪しい。

何せ学園都市に七人しかいない超能力者<sup>レベル5</sup>というのは、単独で軍隊を相手に出来る戦力を保持しているのだから。

「お姉様と同じ、超能力者<sup>レベル5</sup>。しかも、序列第一位ですの」

「はい、確かにいとも簡単に強盗の人を制圧してたから只者じゃないとは思ってましたけど、まさか第一位とは思いませんでした」

書庫<sup>バンク</sup>にあるのは、顔写真と能力の名前のみ。

どんな能力か、ということは一切書いてない。それどころか本名すら無く、写真の中の白髪の少年は如何にも不機嫌そうにこちらを睨みつけている。

「そういえば白井さんが『お姉様<sup>レベルガン</sup>』って読んでる人って、常盤台中学の『超電磁砲<sup>レベルガン</sup>』なんですよね？」

「ふむ、その通りですわ。お姉様こそ常盤台中学が誇る天下無敵の電撃姫。学園都市序列第三位、『超電磁砲<sup>レベルガン</sup>』の御坂美琴お姉様ですわ！

ああお姉様、今日はお姉様とお買い物にいけないで申し分ありませんの。でも黒子は、黒子は何時でもお姉様のことを思っておりますわ！ ああお姉様お姉様――



「あーあトリップしちゃった。白井さんってこうなると長いからなあ」

横で体を抱えてくねくねと気色の悪い動きを、気色の悪いだらしなない笑顔で始めた黒子を放置して、初春はぼんやりとマウスを動かした。

そういえば超能力者<sup>レベル5</sup>のリストなんて初めて見る。普段の捜査で使う資料は大能力者<sup>レベル4</sup>が精々であるし、支部にいる間は考えてみれば忙し過ぎて書庫巡りなんてしていなかった。

その分だけPCを好き放題弄ったりして支部長の頭痛の元を鋭意作成していたりしたのだが、そこは割愛。

「えーと何々、学園都市序列第二位『<sup>ダークマター</sup>未元物質』。

学園都市序列第三位『<sup>レールガン</sup>超電磁砲』。

学園都市序列第四位『<sup>マルチタウナー</sup>原子崩し』。

学園都市序列第五位『<sup>メンタルアウト</sup>心理掌握』。

学園都市序列第六位『<sup>フレイム・ジン</sup>無尽火焰』。

学園都市序列第七位『削板軍覇』。

あれれ？　なんで最後の人だけ名前で、能力名がないんですかね　　って、あああああ！！！」

「ど、どうしましたの初春？！」

一人一人、データを呼び出して見ていつてみる。

第三位の御坂美琴以外は顔写真すらない者も多く、能力については当然ながら説明などされていない。

<sup>ベル5</sup>が、その中の一人。『学園都市最高の“<sup>バイロキネシスト</sup>発火能力者”』である超<sup>レ</sup>

能力者の項目を開いたとき、初春は思わず歓声というよりは驚きに  
近い大声を上げた。

「み、見つけました！ 見つけましたよ白井さん！」

初春が指さす、ディスプレイ。

そこには先程口に出した、学園都市序列第六位、『フレイム・ジン無尽火炎』と  
いう能力名の超能力者<sup>レベル5</sup>。

学園都市最高の『パイロキネシスト発火能力者』とだけ説明されている欄の隣、半  
分近い超能力者<sup>レベル5</sup>が“NO PICTURE”と表示されていた写真  
の項目。

そこに、つい今日さつき会ったばかりの、精悍かつ爽やかな顔つ  
きながらも無表情な、

白衣の男の写真が、載せられていたのだった。

第3話 『少女、二人、風紀委員』 (後書き)

話が進まんっ！  
初春をもっともっと黒くしたい。

#### 第4話 『一位、六位、超能力者』（前書き）

実は明日引越したり。そして明日、試験だったり。

今日うつったのは後顧の憂いをなくすだけで、決して現実逃避じゃないんだからねっ！

あ、次からは毎日更新はさすがに無理です。暫く空きます。そろそろ倫敦の方も執筆しなきゃね！

#### 第4話 『一位、六位、超能力者』

「いらつしゃいませ、こんばんわ。お客様はお二人様でよろしいですか？ 喫煙席でよろしければすぐにご案内できますが」

「あー、ハイハイどっちでもいいですよ。腹減ったんで早く案内しろっつんだ」

「まったく、キミは腹が減ると途端に機嫌を悪くするなあ。あ、コイツのことは気にしなくてもいいってことです」

「は、はあ？ それではお席の方にご案内いたします」

夜。時刻は大体十時ぐらいだろうか。いくら太陽が出ている時間が長い夏とはいっても、流石にこの時間になると外は暗い。

基本的に暗くなったら完全帰宅時刻であり、自炊が推奨されている学園都市とはいっても、もろもろの事情で外食を余儀なくされる学生はいるし、当然ながら多数存在する大人たちも利用する。

そのためにふつつなならば学生が歩かない夜の時間であっても、それなりの数の飲食店が営業していた。

代表的なものは、ファミレスだろう。外の世界でも全国的なチェーン店が何種類か、学園都市の内部でも軒を連ねている。

学生の昼食などにはお手軽で安価なコンビニやファストフードチェーン、丼チエーンなどが喜ばれるが、流石に夕食までそれでは心が貧しくなるといふものだ。

「ご注文がお決まりになりましたら、お手元の呼び出しボタンを押してください。こちら、メニューでございます」

「どうも、ありがとುತ್ತてことです。ほら一方通行、水」  
アクセラレータ

「おう」

店内は残業やら何やらを終えたのだろう大人たちで賑わっている。そもそも規模としてあまり大きくない店なのか、既に禁煙席は満席だ。

ところどころにちらほらと親子連れも見えるのは、学園都市に勤めている教師や研究員たちの家族だろう。二百三十万人の八割を学生が占めているとはいえ、残りの二割は立派に大人。学生たちが快適に過ごすためには彼らの存在が欠かせない。

そもアルバイトなどが推奨されない場所であるから、こういった店の従業員などはしっかりと外部から店員を派遣してきているのだ。大学生などになると比較的バイトもするようになるらしいが、特に高校生に対する学園都市のカリキュラムはバイトに現を抜かしていられるレベルではない。

学園都市は、まさしく学問のための都市であった。

「なんつうか遊びすぎて腹減ったなア。昼飯食ったのは三時ぐらいだったはずなんだが」

「お開きする頃にはボーリングやったりバツティングセンター行ったりしてたから、疲れるのも当然ってことです。もともとゲーセン

なんてそこまで数がないんだから、仕方ないと言えば仕方ないかもしれないけどさ」

「最後のゲーセンで会った連中と意気投合しちゃったからなア。大勢で騒ぐのも、たまにはいいモンだ」

「よく言うよ、群れるのは嫌いだっていつつも言ってるくせに」

「だからたまにはって言ってンだろオが。それに普段からつるむよ  
うだと目障りになンだよ。一期一会で会った連中だから、後腐れな  
く騒げンだ。いつも大勢でいんのは、俺の趣味じゃねエ」

「ま、そうだね」

カラリ、と店員が持ってきたお冷のグラスの中で氷が音を立てる。  
夏だからとキンキンに冷えているグラスは表面が自然と結露して  
いて、手についた水滴を一方通行はベクトル操作で一滴残らず床へ  
弾いた。

ちなみに当初の予定と違い、昼食はアツアツの牛丼を余儀なくさ  
れたので、堪え性のない第一位は早々に熱と日差しの反射をデフォ  
ルトに戻している。

体力を削る要素が一つ無くなったからか元気になった白髪の少年  
は、そこからさらにペースを上げて遊び倒し、第七学区最後のゲー  
センで出会った、おそらくは武装無能力者集団の類だろう不良達と  
意気投合。

互いの素性どころか名前も喋らぬままに、ボーリングやらバッテ  
ィングセンターやらで遊び倒した。

もつとも彼らも意気投合した相手の二人が、多かれ少なかれ能力者であるだろうことは勘付いていたし、二人にしても相手が無能力者<sup>レベル</sup>だろうなと当りをつけていた。

ここでその勘繰りを確信へと変えてしまえば、軋轢が生じるのは明白。よって互いに空気を讀んで一切の個人情報漏らさなかったのは、懸命であると同時に粹というものだろう。

「俺と一緒にいんのは、俺が触ってもコワレねエ奴だけだ」

「該当するのは僕ぐらいってこと、かな？」

「否定はしねエよ。まアいつかはテメエも、コワセルようにならねエといけねエンだろうがな」

「キミは僕を殺せないし、僕じゃキミを殺せない。お互いに能力の相性が悪すぎるってことです。

まあ楽しみにしてるよ。僕としても、誰かが僕を消してくれるのが心待ちで仕方ないってことです」

片手の指で足りる友人と自分との視線を遮るように、水の入ったグラスを目の高さに掲げる。

光のベクトルを操作すれば、水とグラスで偏光して僅かに歪んだ像など簡単に元通りに直すことも出来るが、特にそんなことはしなかった。

決して長い付き合いというわけではないが、それでも外見上は軽く五つばかり年上に見える友人は、きつと相変わらずの色を感じさせない無表情でこちらを見ているのだろうから。



「さて、くだらねエ話は止めだ。腹も減ったし何か食わねエと死んじまう。」

ふつうの定食も飽きたし、何か無エかな、季節限定とか当店限定とかの面白そうなメニューは」

「そのミハーなところは何時まで経っても治らないね。僕にしてみれば、とっても不思議なことです」

「俺ア退屈が一番嫌いなんだよ。日々刺激が無エと、退屈で死んじまいそうだ。つかテメエも似たような存在だろオが、いつつもいっつも愚痴ばかり言いやがって」

「僕のそれはキミとはちょっと方向性が違っただけです」

真面目な目を普段の気怠げなソレへと変えて、一方通行はメニューアクセラレータへと視線を落とした。  
「へと視線を落とした。」

学園都市最強の超能力者レベル5である彼にとってみれば、日常は実に退屈な代物なのだろう。カガリが彼と知り合ってからずっと変わらず、面白いモノ、目新しいモノ、珍しいモノを探す姿勢は変わらない。特に顕著なのが食べ物で、基本的に目の前でメニューの端から端までじっくりと眺めている白髪の少年は、基本的に限定品の類に弱い。

季節限定の商品には必ず手を出すし、奇抜なメニューがあれば一切躊躇せず、むしろ楽しそうに果敢に挑戦する。

カガリ自身は体質上その煽りを食らったことはないが、それにしてもいくら珍しいモノが好きだからといって、その姿勢が一体どこから湧いてくるのか、彼にとってみれば不思議で仕方がなかった。

「お、いいなコレ。“夏を乗り切る新メニュー！ 杏仁麻婆！”」

「」

「“ピリリとした麻婆ソースと甘い豆腐がナイスマッチ！ 口の中で混じり合う、未知の甘辛メニュー”」

「ホント、僕には全く分からないってことです」

「なアに言ってた？ こオいう少しの間だけ一瞬、だけど閃光のように輝いてアーツ！という間に消えてくメニューだからこそ、挑戦する価値があんだろオが。」

すいませェん、この杏仁麻婆つつーの定食で。あとコイツにメロ  
ンフロート一つ」

メニューの写真には、杏仁豆腐と麻婆豆腐を合わせたトンデモ料理が載せられている。

パツと見た感じでは変なところなど何も無いが、麻婆の泥の中に浮いた豆腐がやけに真っ白で、ついでに麻婆の泥はやや透明な汁と混ざり合っていた。

写真を撮ったプロの腕が相当良かったのだろう。冷静に考えれば信じられない組み合わせなのだが。真っ赤な麻婆の中に純白の豆腐、そしてその周りに悪い夢かとも言いたげに配置された各種の缶詰フルーツが、色鮮やかで目に美しい。

「いやア楽しみだぜ。どんな味がすんだろオなア？」

「きつと肩の肉が挟れたり、歯が生え替わったりするような味だと思っつてことです。骨は拾ってあげよう、成仏するんだぞ」

「ったく、フロンティア精神を理解出来無エ奴だな。そんな無気力な面してやがるから、路地裏歩く度に余計な連中から絡まれんだよ」

「あれはどっちかっていうと一緒に歩いているキミのせいってことです。僕は基本的に争い事は好まないんだよ。暴力は振るうのも振るわれるのも、教育上よろしくないってことです」

「失礼致します、お先にお飲み物の方をお持ち致しましたー！」

やや大きめのグラスいっぱい注がれた、盛大に気泡を立てる透き通った緑色の炭酸飲料。

見る目を楽しませる美しい色の液体には目の前に座る少年の髪の毛よりも白いアイスクリームが浮いており、そこにチョコレートを棒状のビスケットに塗りたくった菓子が一本刺さっていた。

例えばそれは小学生などの子どもが、好んで注文する商品。たとえ今が初夏の、それも尋常じゃなく暑い熱帯夜だったとしても、大人の大人が飲むのは少々恥ずかしい代物だ。

まだ辛うじて少年と言え<sup>アクセラレータ</sup>る一方通行がそれを飲むのならば、まだ何とか絵になったかもしれない。しかし実に嬉しそうにストローに口をつけたのは、カガリの方だった。

百八十を優に超える身長を持つ彼がメロンフロートを囓っている姿は、ある意味では十分に第三者が目を見開いてもおかしくはない光景だ。

一口ごとにニコニコとはにかむ様子だけ見るならば、とても高校生には見えないだろう。精々が中学校低学年、あるいは女子中学生

である。

もちろん彼が、身長百八十を超え、肩幅広く、足の長い立派な青年でなければの話なのだが。

「うん、やっぱり炭酸は美味しいな。この喉を通り抜けるシュワシユワって感覚がたまらないってことです」

「テメエは何か飲む時アいつもそれだよなア？ 俺には良くわかんねエってことです」

「人の台詞を取らないで欲しいってことです。そういえばキミは食べ物に嫌になるぐらい冒険するくせに、飲み物はいつも決まってブラックのコーヒーだよな」

「あア、俺は至高の飲み物を見つけちゃったからな。特に缶コーヒ―は最高だ、あの安っぽい苦さがたまんねエ」

「大変お待たせいたしました、こちら杏仁麻婆定食でございます。熱かったり冷たかったりしますので、お気を付けてお召し上がり下さい」

アクセラレータ

ドヤ顔で笑う一方通行の前に、大皿が一つと小皿が二つ。それに中華スープとご飯の盛られたお椀が一つずつ置かれる。

小皿が二つあるのは、メロンフロートしか注文していないカガリに対する配慮だろう。もっとも彼は友人と違ってこの手のゲテモノ料理を好かないので、口をつけることはないだろうが。

「来た来た！　なるほどなア、こいつが杏仁麻婆か」

「これはひどい」

実際に目に見てみると、ソレのインパクトは並大抵のものではなかった。

鉄鍋に盛られた麻婆豆腐は一般のソレとは異なり、血の池地獄と見紛う程に毒々しい赤色をしている。おそらく、いや、間違いなく辛い。それも、相当なレベルで。

その麻婆豆腐に彩りを添えているのが、これまた目を見張るぐらゐに真っ白な杏仁豆腐だ。こちらは麻婆で煮込んだわけではなく、麻婆豆腐の上に盛りつけているらしい。

おそらくは麻婆の方の豆腐も杏仁豆腐に使われる独特の舌触りのものを用いているのだろうが、それにしても鮮やかな白だ。血の池地獄に浮かぶ、白骨のようなイメージだが。

ちなみに鉄板の外周部に彩りを添えるべく並べられているフルーツ達は、当然しっかりと熱せられている。これがパイナップルやリンゴならまだ我慢できるかもしれないが、みかんあどになると十分に悪夢の範疇だ。

こんなものを食べる奴は、よほどのキワモノか、味覚が破壊された奴に違いない。そう万人に思わせる料理である。

「いいねエいいねエいい面構えてやがンじゃねエか！　おい見ろよテメエこの毒々しい色をよォ！　食べる奴に食欲つてもンを起こさせねエ見た目、辛い麻婆ソースと甘ったるい杏仁豆腐の混じり合った力オスな匂い！」

こいつア俺に挑戦してやがンな。いい度胸だ、学園都市序列第一位の実力つてもンを、祖のみに味あわせてやらア

「！」

「南無」

スプーンを取り、ぐるりと一混ぜ。この手のミックス料理は基本的に混ぜ合わせるのが基本的なコンセプトだ。

よく冷えた杏仁豆腐に、麻婆が絡む。どうやら豚挽肉ではなく鶏挽肉を使っているようで、あっさりとした鶏肉を使うことで甘い汁との調和を試みているらしい。

「そんじゃまア」

「ドキドキ」

「いただきまーす　　」と

パクリ、パクリ、もぐもぐもぐもぐ。

「アクセラレータ  
一方通行？」

もぐもぐもぐもぐ。

期待にあふれた表情のまま、まるで凍り付いたかのように、機械にでもなったかのように、黙々と一口目を咀嚼し続ける。

そもそもからして、そこまで歯ごたえがある食べ物ではないはずだ。豆腐の種類にもよるが、下手すれば飲み込むことだって簡単の  
はず。

「おい、そんな調子で大丈夫か？」

「だだだだ大丈夫だ、mンダイ無イ」

「見るからに問題大ありってことです。 まったく無茶しやがって、僕は知らないって言っただろうに」

「ごくり、と杏仁麻婆を飲み込んだ瞬間、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は口から白い煙を吐き出して小刻みに震え出す。

予想以上の味だったらしい。<sup>アクセラレータ</sup>さすがに一方通行とはいえ、味覚から来る精神的ショックまでは反射出来ない。他の能力者からの精神干渉なら話は別だが、この衝撃にはベクトルが存在しなかった。

「おいおい、ホントに大丈夫か？」

「あア、大丈夫だ。ちょっと意識が良いカンジに飛ンじまったが、乗り切った。

くそ、まさかこの俺が一瞬でも敗北しかけるとは、<sup>ライバル</sup>トンでもねエ敵だったぜ。俺はコイツを好敵手に認めてヤンよ」

「随分と安い好敵手<sup>ライバル</sup>もあつたってことです」

ぶるぶると震えながらも、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は第一位としての矜持を賭けてスプーンを手にする。

一口、たったの一口食べただけで、あの有様だったというのに。

なおも挑戦しようと言うのか。いったい何処からそのエネルギーが沸いて出てくるのだろう、カガリは心底呆れた視線を友人へと向けた。

「まあ、食べ物を粗末にしない姿勢は評価できるってことです」

「　　なアおい、これ炎で燃やせたりしねエか？」

「　　前言撤回。自業自得なんだからキミだけで頑張って下さい  
ってことです」

震えながらもスプーンを手にして杏仁麻婆に果敢に挑戦する一方  
ラレータ 通行を見て、カガリは呆れたように溜息をついた。

彼は生まれの関係上、食べ物を粗末にしたり、お金を無駄遣いし  
たり、そういう行為に対して非常に抵抗感がある。

そういう意味では一方通行は基本的に遊び以外ではさほど金を好  
アクセラレータ んで使う生活をしないので、友好的な関係を築けている一助だ。

「　　そついえば一方通行」  
アクセラレータ

「辛くて甘くてくか、かカ、かカkかカk　　っは、今おかしな  
世界に意識がとんでやがったぞ　　！　　なんだ？」

「今日の“実験”は、中止なのか？　　僕の方には連絡が来てないっ  
てことです」

「　　ッ」



瞬間、空気が凍り付いた。

アクセラレータ

何とか鋼の克己心で以て杏仁麻婆を退けた一方通行から、途端に感情の色という物が消えて無くなる。

怒りも苛立ちもなく、ただ純粹に氷のような事実がそこにあるだけ。

あるいは何かの感情があったのかもしれないが、カガリはそれを探る、という姿勢をそもそもにして持ち合わせていなかった。

「まあほら、最近この時間帯はキミと一緒にいるからね。僕の方に連絡が来なくてもおかしくはないってことです。

けど僕としては正直、今日はもう眠らないと負担がかかってしまうので 出来れば早めに用事をすませてしまった方が嬉しいってことです。無いなら無いで、それにこしたことはない。そうだろ？」

「 あア、テメエは夜更かし出来無エ体質だったな。そりゃ悪かった、今日は散々連れ回しちまってよオ」

「 そういうこと言ってるわけじゃ、ないってことです」

何とか完食した、綺麗に空になった杏仁麻婆の皿に空虚な視線を落とす。

その瞳には何も写っていなかった。皿も、机も、視界の上端にちらほらと見え隠れする友人も。

実際に網膜に映像が投影されているか否か、そんなことは問題じゃない。瞳に移すという意志がなければ、人間はそれを見ているということにはならないのだ。

「今日で何回目だい、アクセラレータ一方通行？」

「さアな、百回から数えんの止めちまったよ。いつものお相手がペラペラ喋ンので確認するだけだ」

「キミの目標まで、実験完了まで、あと何回だろうね？ 僕は正直、飽きてしまったってことです」

「そうかよ」

ギロリ、と視線が疾る。その視線だけで人間を殺せるんじゃないかというぐらいに凶悪な視線だが、それを受けた力ガリは相変わらずの無表情を崩さない。

あアそうだ、そオいえばこの友人は決してブレることがなかったんだっただか。

その感情の色を見せない無表情を暫く睨みつけたアクセラレータ一方通行は、1人で動揺して激昂している自分がまるで道化のようだと、フンと鼻を鳴らしていつも通りの不機嫌を装う。

「今日の実験は調整の都合で深夜らしい。場所は第十学区の倉庫、細かい時間は俺の携帯の方に連絡が入るんだとよ」

「おいおい、そいつは随分と、何時にも増して適當ってことです」

「さアな、俺にも理由なんて知るかよ。で、どうすんだよ？ テメエ長い間起きてられねエ体質だろオが」

「うーん、とはいえ僕は強制じゃないとはいえ見届け役だからなあ。それに、キミを1人で実験に出すわけにもいかないってことです。心配だ」

「ケツ、テメエに心配される程、耄碌しちゃあいねエよ。おい、俺の名前を言ってみな」

不機嫌な表情の中に、自嘲を含んだ笑みが混じる。

本人は自信満々の笑みのつもりなのだろうか。語調は勇ましいが、苦笑いにしか見えなかった。

「学園都市序列第一位、『<sup>アクセラレータ</sup>一方通行』」

「だろオ？　いくら俺と第六位<sup>テメエ</sup>の能力の相性が悪いからってよ、格下に心配される云われは無エんだよ。

とつとと帰って、明日に備えて寝ちまいな。　また明日も隙してンだろオが。どっか、行くぞ」

「やれやれ、生憎と振り回されるのは慣れてるってことです」

無表情が一瞬崩れて、笑みが漏れる。

その笑みも結局のところ感情が感じられない、仮面のようなものだ。それはカガリの特徴、個性のようなものだから仕方がない。<sup>アクセラレータ</sup>しかし一方通行には、そこに呆れを感じることが出来た。

「ホントに、大丈夫なのかい？」

「くどい。何もあるわけ無エだろオが。俺ア“最強”なんだけ？  
なア、“絶対無敵の第六位”サマ？」

「その看板、キミが相手でも下ろしたつもりはないから、皮肉みに使わないで欲しいってことです」

ガタリ、と音を立てて席を立つ。

こうして呼び出されて付き合った後は、基本的に飲食の代金は一  
方通行が持つというのが二人の間での決まり事だった。  
クセラレータ

もちろんカガリとて超能力者である以上はそれなり以上の額を学  
園都市から貰っているわけだが、そのあたりは当人達の間でという  
もののなかろう。

「じゃあ僕はご厚意に甘えて帰らせてもらってことです。また明  
日な、一方通行」  
アクセラレータ

「おう帰れ帰れ。ちゃんと明日は朝起きんだぞ」

ありがとうございましたー！と元氣な店員の挨拶を背に受けて、  
カガリは通い慣れたファミレスを出た。

熱帯夜とはいえ、ビル風は勢いが良く随分と肌寒い温度だ。昼間  
との温度が違い過ぎて、一日中外に出ていた人などは風をひいてし  
まうこともあるだろう。

「 やれやれ、心配な子ども達が多すぎて、お兄さんは心労が絶えないってことです」

今し方出てきたばかりのファミレスを振り返りながら、カガリは呟いた。

ああ言っではいるが、一方通行が<sup>アクセラレータ</sup>“実験”に関して一定以上のストレス、悩みを抱えていることは間違いない。そしてその原因というのが単純に無いように関するものではないことも分かるからこそ、自分にはどう対処していいか分からない。

そもそも自分は、能動的な存在ではなかったか。  
自分のような存在が、他人の悩みを解消しようと思案するのが、  
そもそも間違いないのではないか。

もっと適役がいるだろう。結局のところ自分は、誰かの悩みに共感したり出来る存在ではないのだから。

しかし同時に、実際それが誰かの役に立つか、ということは別にして、自分は誰かを心配する存在ではあった。

それは純粹に、前提条件だ。自分という存在は、他者の“面倒を見てやる”姿勢を前提条件として植え付けられている。

だからこそ、最終的にその“誰かの力になるうとする自分の悩み”が労を結ぶかどうかは別として、きっと自分は悩み続けるのだろう。

「 うん、そうだね。悲しいかもしれないけど、それでもこれが現実ってことです」

誰かに言い聞かせるように、教えるようにカガリは虚空に向かって囁いた。

能動的に干渉する存在ではないから、だからこそせめて、友人として自分は一方通行のそばにいろ。<sup>アクセラレータ</sup>

きつといつか、彼にも側に居てくれる人物が現れる。自分のような存在ではなく、もっと親身に、自分のことのように彼のことを考えてくれる人物が。

そんなことを考えながら踵を返し、彼は学園都市の路地裏へと白衣を翻して歩き出す。

一陣の突風、ビル風が白衣を巻き上げて、その次の瞬間には、陽炎のようにカガリの姿は消えていた。

#### 第4話 『一位、六位、超能力者』（後書き）

一方通行 ゲテモノ好き。

ほんとうに  
どうしてこうなった？

マジでこんな予定無かったのになあ。てか一通さんキャラ崩壊  
激しくないか？ちなみにカガリの正体、能力については複線ばらま  
いています。予想されるのも、よろしいかと。

展開を早く、進めていきたいですね。テンポ良いストーリーを目標  
に、頑張ります！

第5話 『長点上機、常盤台、超能力者+』（前書き）

実は先日引越しをしまして、更新遅れました。申し訳ないってこととです。

ちなみに同時に試験も。

これは素早く書き上げたから、勉強から逃避なんてしてないんだからねっ！

ほんとに、ほんとなんだからねっ！



第5話 『長点上機、常盤台、超能力者+』

「アクセラレータ  
一方通行」

「なんだよ」

「僕はキミに一つ、言いたいことがあるってことです」

宇宙空間に打ち上げられた衛星に搭載されたスパコン、『ツリー樹形図  
ダイヤグラム  
の設計者』によって完全に“予言”された天気が開される学園都市では、分単位、秒単位で次の天気が分かる。

そんな学園都市で、わざわざ雨の日を選んで出歩く奴は居ない。故に今日もたくさんの人で賑わう第七学区の大通りは、相変わらず暴力的な日差しが降り注ぐ快晴であった。

「キミに呼び出されるのは別に構わないってことです。もう慣れてるし、僕としてもキミと遊ぶのは楽しいと思ってる。

けどね」

「おう」

「研究室で実験協力している最中に、無理矢理呼び出すのはどうかと思うってことです。このままじゃ間に合わないって、研究

員の人たち泣いてたんだぞ？」

「知るか」

日々技術が進化し続ける学園都市。

最も一日、または短期間での進歩や成長がめざましい少年少女達が住む巨大都市とはいえ、季節の変化を除いては毎日の景色がそう変わることはない。

それは例のごとく二人そろくと尋常じゃなく目立つ学園都市序列第一位と第六位にしても同じだった。

ブラブラと歩く白髪の少年は毎度のごとく気怠げだが、今日は紫外線や日差し、熱を反射しているので体調が悪いわけではなかった。ただ光は反射し切れてないのか、まぶしそうに目を細めている。

「いいだろオが、あんなくったらねエ実験。実験のシュミレーション段階で検証が足りねエから、まだまだダメエが出て協力するレベルじゃ無エよ」

「そこまで分かってるんなら、言ってあげればいいってことです」

「面倒臭エ。つうか俺のこのスパコン並の超絶頭脳を貸してやるレベルの実験じゃ無エよ、連中は」

もう1人の青年も、同じくいつも通りだ。

初夏とはいえこの気温。だというのに長い白衣を着込み、汗の一滴もかいていない。

ただし昨夜が遅かったからか、心なしかユラリユラリと左右に揺れている気がする。あと若干フワフワ歩いている。非常に分かり易い、寝不足の症状だった。

「随分と自信満々だね。まあ納得出来てしまうのがキミがキミたる所以なのかもしれないってことです」

「超能力者の演算能力なんて大体そんなもんだろオが。あア、ワケ分かん無エ第七位とテメエは違ったか」

「確かに。僕自身の演算能力なんてキミの足下にも及ばないだろうね。まあ僕の本質はそういうところじゃないってことです」

「ありや演算してるワケじゃ無えのか」

「オート自動つてことです」

時間は午後。ちょうど今日はどの学校の授業が早めに終わっているらしく、まだ早い時間なのに大通りには学生の姿も多い。

もちろん二人に関して言うと、どちらも学校なんてものには通っていないから放課後も授業中も関係ない。好きな時間に起きて、好きな時間に歩き回るだけだ。

たまに学生がいてはいけない時間帯に出歩いてしまったりして警備ロボット、通称ドラム缶から注意を受けることもあるが、大概は片手間に一方通行が能力を使って電気信号を操作し、追いつく。

基本的に一方通行は日常的に能力を使い、快適な生活を楽しんでいた。学園都市としては建前として能力の乱用を自粛するように呼びかけているが、勿論それを鵜呑みにしている学生などいない。

特に二人は、超能力者<sup>レベル5</sup>の中でも相当にフリーダムに動き回っている方である。質の悪いことに、この二人は系統こそ違いが、どちらも学園都市において敵無し、と言い切れる存在だった。

「で、キミにとってはどうでもよくても、実験の途中で呼び出されたんだ。まさか何も考えてないってことは、ないはずだよな？」

「おう」

「ないはずだよな？」

「お、おう。そりゃ、そオだ。　　まアなんだ、とりあえずメシでも食うか」

「やれやれ、振り回されるのには慣れてるってことです」

目指す場所は、いつものファミリーレストランだ。

最近どうやら一見して普通じゃない客の来店が　　二人除く

増えてきたおかげで店員も肝が据わったらしく、以前一回強盗事件に遭った時も全く慌てず冷静に対処出来たらしいと噂であった。おかげで繁盛しているらしいが、逆に濃いメンツばかりが集まっていると密かに店長が冷や汗を流しているのは客には決して見せない裏事情である。

「いらつしゃいませ、こんにちわ。いつもの席が空いています、そちらでよろしいですか？」

「おう」

「随分と慣れたのは僕だけじゃないみたいってことです」

よく見る店員に案内されて、これまたよく座る席へと移動する。  
実はあからさまに怪しい二人組がよくこの席に座っていることを常連の客なら大体が知っていて、意識して座らないようにしているのだが、そんなことは誰も知らない。

この時間帯にファミレスなどに来る奴は大概がお喋りに夢中で、長居する。だというのにその席はしっかりと空席であった。

「さアて、何か面白メニユーは無エかなアつと」

「ああ、コイツはいつも通り放っておいてもいいってことです。僕はコーラを」

「はい、かしこまりました」

真つ先にメニユーの端から端まで食い入るように眺め始めた白髪シカトの少年を完全に無視した店員は、比較的常識人だと認識している白衣の青年からの注文をにこやかに受ける。

しっかりと食事をとる一方通行アクセラレータに対して、この青年が飲み物、それも炭酸しか頼まないのもまた同じくいつも通り。

たまに新人の店員がしどろもどろに応答してしまうことはあっても、やはり常連としてはこの店の居心地が良いことには変わりなかった。

「杏仁麻婆で懲りなかったのかってことです」

「そんなことで挫けてたら、第一位の名が泣くってモンだろ。おおい店員さん、あんこ入りパスタライス下さあい」

「かしこまりました。こちらはご注文のコーラでございます」

「ありがとುತ್ತてことです」

もはや一方通行の注文について店員も動じることはない。  
アクセラレータ

昨日は確かに存在していた杏仁麻婆はメニューから消去されていた。あれの危険性をチェーン店全てに知らしめるには、一日だけで十分だったようである。

ちなみにメニューはタッチパネル方式の近未来型。リアルタイムで料金や商品が表示される上に、会員などは自動的に価格が修正されるので、セールだの何だのと悩む必要が無い優れものだ。

もっとも様々な実験の恩恵で文字通り、腐るほどの金が通帳に残ってしまっている一方通行や、アクセラレータそもそも炭酸系の飲み物しか頼まない力ガリなどには無用の長物かもしれない。

むしろ白髪の少年にとってしてみれば、面白メニューを口頭で照会してくれる馴染みの店員の方が何割かありがたかったりするのが寂しいところだ。

最後に頼りになるのはやはり人と人との関わりだというのは、真理の一つなのだろう。

「お待たせいたしました、こちら『あんこ入りパスタライス』でございます。ミルクの方はサービスですので、ごゆっくりおくつろぎ下さいませ」

「来た来た来たア、今日も期待してるぜエ！」

「これまた随分なゲテモノってことです。ていうかそろそろデザートとメインディッシュの組み合わせは止めて欲しいってことです」

にこやかに笑う店員が持ってきたのは、大皿に盛られたパスタ。かなり分量がある。例の如く小皿が二つ付いているのは、もはや形式美となった同席者への配慮以外にも本来は二人分という理由があるのかもしれない。

いや、むしろ量としては十分に一人分であったとしても、このキワモノを一人で全て食べようとする客がいないからだろうか。

「あんこは冷てエのか。冷てエモンと熱いモンの組み合わせって、どオしてドイツもコイツも好きなンだろオな？」

「ああ、気になるのはそこなんだ」

「ンだよ、なんか言いたいことでもあンののか？」

「いや別に。ただ、味には言及しないんだなって呆れちゃったってことです」

期待の通り、あるいは危惧した通り、次のメニューもこれまた見た目に厳しい料理だった。

『あんこ入りパスタライス』。これほど分かり易いメニューも無いだろう。とにかく見てそのまま、という代物なのだ。

おそらくは抹茶が練り込んだものであるのだろう。パスタは平べったい麵を使っただけで、熱々。その上に白いクリームがかけられていて、白いゲレンデには真っ黒なあんこが敷かれている。

だが危ぶむ無かれ、パスタの下にはまだボスが潜んでいる。何故かピンク色に着色された得体の知れない、米。それは単体で十分に異色を放つ存在だろうに、さらにおかしなことになっているのだ。

ああ、なんとということだろうか。それ自体は冷たいはずなのに、ほかほかと湯気を上げる生クリームとあんこ。この表現は何度となく使ったが、悪夢以外の何モノでもない。

「それじゃ、いただきまアす！」

「ドキドキ」

ぱくん、もぐ、もぐもぐもぐ。

あんこと生クリームを抹茶パスタに絡めて一口食べた一方通行の反応を見るべく凝視する。

呆れながらも、最近は若干この挑戦と友人の反応を見るのが楽しみになりつつある力ガリであった。

「」

「どうだい？」



「普通に美味エ。なんか表紙抜けだな」

「はあ、なんだ良かったじゃないか。クソ不味いのに当たるよりはマシってことです」

普段と違い、ぼかんと目を見開いてパスタを飲み込む友人に、こちらもきょとんとしたカガリは当然の反応を返してみせる。

どうやら今回は麺の方が小細工をしていたらしく、普段の『メインディッシュ+デザート』というイカレた組み合わせではなかったようだ。

米も決してゲテモノではなく、しっかりと味を計算していちごを使って炊いた餅米は、普通の米よりもこのメニューのバランスを安定させる。

どうやら見たところ麺の味が、上に乗っかっているクリームやらあんこやらと調和しているらしい。それならば確かに、まあ、今までの料理に比べればマシだろう。

「つまんねエ」

「はあ？」

「こんなフツの味を求めてたわけじゃ無エんだ、俺は。そんなモンじゃ俺の好奇心は満たされ無エンだよ」

「散々痛い目に遭ったのに、まだ懲りないのかってことです」

「痛い目に遭うのも、俺の好奇心を刺激すんだ。満たしてるつつ

ても過言じゃ無エ」

「はあ」

とは言っても味は気に入ったらしい。ぶつくさ言いながらも白髪の少年は黙々とパスタを口へ運んでいく。

アクセラレータ  
一方通行はゲテモノ料理、キワモノ料理、イロモノ料理の類が大好物ではあるが、それとは別の話として随分と舌は肥えていた。

「お客様」

「ん？」

黙々とパスタを処理していくアクセラレータ一方通行をぼんやりと眺めながら最後に残った黒い炭酸飲料を飲みきった力ガリの耳に、聞き慣れない声が届いた。

ぐるんと、微妙に人間離れた柔軟加減で首を曲げた彼の目に飛び込んだのは、これまた見慣れない店員の姿。短めに髪の毛を整えた若い女性で、若干不気味な力ガリを丸くした目で驚いた、というか怯えたように見つめている。

「も、申し訳ございませんお客様！ 店内が少々混み合って参りまして、もしよろしければ、相席をお願いしてもよろしいですか？」

びくり、と哀れなぐらい震えた店員が涙声にも近い声が漏れる。  
それを聞いた周りの席の客　　大概が常連であつた　　から  
信じられない物を見るような目が集まつた。

この迷惑こそかけないが扱いづらい常連は触れずにそつとしておくのが最良というのが店側と客側、共通しての認識である。

どうやらこの若い店員、新人のようである。もしかしたら大学生のバイトなのかもしれないが、どちらにしても触れてはいけないものに自ら触れに行くあたり、ただ者ではない。

もっとも、すでに後悔し始めているようなのではあるが。

「　　相席イ？」

「は、はい！　出来ましたらでよろしいんですが、はい、本当に、出来ましたらで　　！」

「おい、相席だつてよ。どオスンよ？」

もはやがくがくと震えつつある店員としては、おそらく無駄に威圧感のある一方通行から「嫌だ」と一言言つて貰えれば、それを幸いと一目散に逃げ出すつもり満々なのだろう。

いくら相手が怒つていない、というか期限を悪くしていない段階にいるとはいえ、正直な話をすれば正体までは知らないだろうとはいえ、この一方通行の前には長いしなくないところだろう。  
アクセラレータ

「　　僕としては新鮮で、それもまた良いんじゃないかと思つてことです。キミはどうだい？」

「俺もまア、たまには悪くねエな。いいぜ、連れて来いよ、その不幸な奴をよオ」

「は、はい！　かしこまりましたあー！」

ギリリと目を光らせた一方通行が意地悪そうに、というよりは凶悪そのものと言いたげな顔で笑う。

何とか外見が中学生程度の体躯と身長だからマシだが、顔だけ見ると犯罪者を通り越してテロリストである。某巨大国アメリカ当たりから悪の枢軸扱いされても否定出来ない。

「　　まア子どもに泣かれンのも慣れた」

「子どもがいるところ出歩いたが最後、何もしてないのに風紀委員アンチスキルや警備員が湧いて出てくるのは不思議なことです」

「あいつら、1人見かけたら10人はいやがるからなア」

ざわりざわりと密かに浮ついていた店内が、今度は怯えるかのようになりに始める。

新入り店員の目論見は見事に失敗し、もはや半泣きに近い有様で彼女は『相席でも良いから。風情あるし』と綺麗な笑顔で言っていた迷惑な客を迎えに行った。

店内の客、全てが彼女に向ける視線はこれ以上ない同情を含んでいるが、同時に他人は他人だ。

出来ることなら一生でも、あんな立場に立たされたくない。皆が皆、そう思っていることだけは間違いないのだろう。

「お客様、こちらでございます。ご迷惑をおかけしておりますが、どうぞごゆくり」

「ああ、ありがとう。ほら黒子アンタも礼言いなさい　　つか、ひつついてないで座れつつうのっ！」

「あああお姉様の愛が痺れるうああああああ？！！」

もはや死んだ目をしていた店員が連れてきたのは、連れだった二人の女学生。

着込んでいるのは清楚なブラウスと上品なサマーセーター。そしてやけに丈の短いスカート。

密かに学園都市の男子学生の間でも人気の名門女子中学校の制服。厳しい学則故にほぼ百パーセント外部に出回ることがないというそれは、そもそも外を出歩く学生すら少ないことから神秘的な雰囲気すら纏っている。

「ごめんなさいね、ご歓談中に邪魔しちゃって」

「待ち人が来たらすぐに退出させて頂きますの。少しの間だけ、失礼いたしますわ」

1人は茶色の真っ直ぐな髪の毛を、肩にかかるぐらいの短さに切りそろえた少女。活発で勝ち気そうながらも、誰はばかることなく美少女と称するだろう中学生ぐらいの少女。

いや、来ている制服が中学生のものなのだから当然に中学生なのだが、おそらく連れよりは先輩なのだろう。

あくまで自然体ながらも、何より印象的なのは瞳。自分自身の道をしっかりと真つ直ぐ歩いているのだと伺わせる真つ直ぐな光を宿らせている。

きっと今まで一度たりとも、自分が歩いてきた道を、これから自分が歩いていく道を疑ったことなどないのだろう。そう思わせる強い力を秘めた瞳であった。

もう片方の少女は、おそらくは後輩。

ツインテール……が、枝分かれしてDNAの螺旋構造のようになった特徴的な髪型をしている。

こちらにも美少女。しかし色香……とはまた違う、具体的なんだか抽象的なんだか分からないが、だいたい斜め四十七。ぐらい違う雰囲気<sup>3</sup>を辺りにまき散らしており、実に不可思議というか、違和感を感じ<sup>3</sup>る。

まあ見たところ間違いなく年下の少女であることには違いない。

これが三十。や四十五。や六十。などでない辺りが、微妙な理由を端的に表しているだろう。とにかく絶妙な違和感があるのだ。

もつとも袖に付けている緑色の腕章は風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>のものだ。能力者を取り締まる立場にいる風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>には腕自慢<sup>レベル</sup>も多く、この少女も制服が表すとおり、最低でも強能力者であることは確実である。

「デメエは      ツ?!」

「……はい？」

その片方、髪の毛が短い方の少女を見た一方通行が目を見開き、<sup>アクセラレータ</sup>

睨み付ける。

信じられないものでも見たかのような、驚愕に満ちた瞳。いや、驚愕とも違う、まるで宿敵と正対したかのような、神経の張り詰めた目であった。

決してそこに怯えはない。学園都市最強の超能力者、一方通行にアクセラレータ怯えるものなど何もない。

だからあるのは、怯えや同様ではなく、緊張。

それも閃光のように、電撃のように疾るわけではなく、彼らしく静かに、氷のように、冷たくピリピリと敵意が走る。

小柄で華奢な少年ながらも、一方通行アクセラレータの持つ威圧感は一級だ。尋常じゃないレベルで目つきの悪い、犯罪者どころかテロリスト一步手前の白髪の少年に睨まれた短髪の少女は、びくりと震えて一步後ずさった。

「……へえ、こんな巡り合わせもあるのかってことです」

「あら、貴方はもしや……?!」

「うん？」

ツインテールのジャッジメント風紀委員が、何かを思い出したかのように白衣の青年、カガリを指さす。

他人事のように一方通行と、睨み付けられてビビる女子中学生をぼんやり眺めていたカガリは、今度は予期していない自分へのアプローチにびくりと体を震わせた。

学園都市序列第一位『アクセラレータ一方通行』。

学園都市序列第三位『レールガン超電磁砲』。

学園都市序列第六位『フレイム・ジン無尽火焰』。

学園都市に五十八人しかない『エレベーター空間移動能力者』の最上位に位置する大能力者<sup>レベル4</sup>。

それこそ濃いも薄いも様々なキャラクターを持った学生達が集まる学園都市の中でも、特に濃い主人公達。

本来ならこうして出会うはずのなかった彼ら、彼女らがどうしてここで集まったのか。

そしてその出会いが、どのようにこれからの物語に関わっていくことになるのか。

当然ながら当事者であるところの彼らにそんなことは分からず、また同じように、未来もさっぱり分からない。

何せ未来なんてものは、能力開発よりもチンプンカンプンなのだ。いつたい誰の言葉だったか、しかしそれは、真実でもあった。



第5話 『長点上機、常盤台、超能力者 + 』（後書き）

プログラミングのテストは完璧だったはず。

電気と物理も何とかなった。しかし回路がなア。

と、電気系学科の苦悩を冬霞は冬霞は打ち明けてみる。結局この界限では共感してくれる人は多いんじゃないかなアって、冬霞は思う訳よ。

第6話 『能力者、四人、レストラン』（前書き）

ついに、ついに夏休みだア！ と、思ったら意外にもスケジュール帳の中が予定でパンパンだぜ。

忙しい休みになりそうです。後期まで 保つかな ？

## 第6話 『能力者、四人、レストラン』

常盤台中学。

学園都市には大小様々な学校が存在する。

それは幼稚園や小学校は当然として、中学校や高校大学、のみならず専門学校や通常の学校という定義に当てはまらないような多種多様な学問を学ぶ施設をも内包していることを指す。

何よりカリキュラム自体が特殊で、国の中にあるはずなのに文部科学省の定めた大学設置基準や義務教育で教える科目などすら軽く無視して遙かに高度な勉強をさせる学園都市。簡単に括れるわけではない。

学生は自分の資質や望む将来に併せて、それこそ無数に存在するカリキュラムや進学先などから好きなものを選んで成長していくことが出来る。

もちろん自分のレベルが釣り合えばの話ではあるが、こと学問をするということを念頭に置く限り、学園都市は最高の場所であることは間違いない。

だが、やはり当然のように外の世界と同じような常識、体制だつて存在する。

ましてや学園都市で習得する技術の代表的なものといえば、世界でもここでのしか実用レベルの研究に成功していない超能力<sup>ESP</sup>。そして能力には当然のように、序列があるのだ。

明確にランク付けがされた序列が明らかになる学園都市では、当然のように厳しく序列によって様々なことが区別されていた。

それが最も顕著に出るのは奨学金だろう。

強度<sup>レベル</sup>や研究などに対する貢献度、あるいは成績などによって、額  
絵性に支給される奨学金は激しい差が生じる。

例えば大能力者<sup>レベル4</sup>などは学生の身分では考えられないぐらい多額の  
支給を受けるが、逆に無能力者<sup>レベル0</sup>は最低限に色をつけた程度の額だ。

もちろん生活必需品の類が相当に安価な学園都市では無能力者<sup>レベル0</sup>で  
もある程度の常識的な節制さえ心がければ十分に有意義な生活が出  
来る。

とはいえやはり奨学金の差はダイレクトに生徒間の格差に影響さ  
れ、向上心にも影響すれば、逆に嫉妬や劣等感を刺激することにも  
通じるのだ。

だが他にも、違いはある。

例えば学力によって入れる学校が違いうように、能力の強度<sup>レベル</sup>によっ  
て入学できる学生を制限する学校だって、あった。

その顕著なものが、常盤台女学園。

学園都市が誇る様々な学校の中でも上位に位置する、正真正銘の  
お嬢様中学校。その学生はすべからず最低でも強能力者<sup>レベル3</sup>というエリ  
ート揃いであり、幻覚な教育と最高レベルの能力開発が受けられる。  
学園都市全体で行われる超大規模な運動会である大覇星祭では長  
点上機学園に後れを取ってはいるが、それでもエリートの集まりに  
して、最強のお嬢様学校の称号は変わらない。

「えーと、私の顔に何か付いてるのかしら？」

「」

「しょ、初対面でいきなり他人様の顔を睨み付けるのは、よくない  
と思うんだけど。いや、そりゃ楽しくお喋りしてるところを邪魔し

ちゃって悪かったとは思っけど」

「別にイ」

「ッ、何が言いたいのよ」

じつと睨みつけたままの目の前の白髪の少年に、常盤台中学の制服を着込んだ短髪の少女は、ぴくりと口の端と眉を歪め、語気を荒げた。

確かに自分は、目の前の少年とは初対面。まさかここまで特徴的な少年を、忘れるなんてことはありえない。

とはいえ白髪の少年は何故か自分に敵意を向けてくる。ここに、何も理由がないとも考えられない。極めて不可解、かつ同時に不快でもある。

「アクセラレータ  
一方通行」

「煩エな、分かってンだよ、そんなことぐらいは。はいはい悪ウございましたね、早く座れよそのツインテ三下もよオ」

「三下?!」

ピキリ、と今度は同じく常盤台の制服を着込んだツインテールの少女が顔をひくつかせる。

三下とは随分な言い方ではないだろうか。自分たちは曲がりなりにも素性はさておき見るからに常盤台の学生であり、最低でも強能力者<sup>レベル3</sup>。間違いもしないエリートであるのだから。

もちろん彼女も三下扱いされたことなど、生まれてこのかた一度たりともありはしない。

いわば青天の霹靂とも言えるわけであるが、どういう言い方をしても失礼であることには違いが無いだろう。

「想像していたのとは随分と違いますのね。しかし確かに私たちはお茶をしに来たのでしたわ。遠慮無く、お邪魔させて頂きましよう、お姉様」

「ビリビリビリ　ハッ、ありがとう黒子、<sup>ほくろ</sup>もう少しくコイツに十万ボルトお見舞いしちゃうところだったわ」

「名前が違いますのよ、お姉様っ?!」

自らのチャームポイントであるツインテールを猫のしっぽのように逆立たせた年下の少女、白井黒子がわめき散らした。

対してお姉様と呼ばれた方の少女は、大きく数回深呼吸をして漸く落ち着き。カガリの隣に座る。

<sup>アクセラレータ</sup>ちようど一方通行とカガリは隣り合わせに座っていたので、どうしても二人のどちらかと少女達がペアにならなければいけないのだ。

「あ、店員さん私にカフェオレを一つ」

「私にはホットティーをお願いいたしますの。お砂糖とミルクもお願いいたしますわ」

「か、かしこまりましたっ!」

額の辺りからビリビリと、軽く強能力者を超える強度の電撃を出し始めた“お姉様”にビリビリながらも新人は注文を受ける。

元々からこの席に着いていた、この店の地雷らしき常連客もそうだけど、新しく連れてきてしまった客もトンデモない連中だ。

というか、どうして自分はこの濃すぎる組み合わせを相席にしまったんだろうか。尋常じゃないレベルで、悔やまれる。

「あ、それと俺にハラオウン抹茶一つ」

「は？」

「ハラオウン抹茶だよ、やってンだろ？」

「あ、はい、かしこまりました！ すぐにお持ちいたしますうううー！！」

ギロリと機嫌悪く睨まれ、可哀想に彼女は逃げるようにその場を立ち去った。

下手すれば、今までの一連のやりとりで十分にトラウマに近いダメージを負ったことは間違いない。というか今夜の内に辞表を提出していてもおかしくないだろう。残念過ぎる。

いや、もう残念というよりは不運を通り越して運命だったとしか言いようがない。運がなかったというよりは、そもそも運命という絶対の巡り合わせが悪かった。そう開き直ってくれるより他にない。

「ハラオウン抹茶って、何？」

「俺も知らねエよ。まア飲んでみりゃ分かるだろ。丁度あんこで喉も渴いてたところだし、丁度良い」

「はあ。なんていうか、独特の趣味持ってるわね、アンタ」

「煩エな、人の趣味にグダグダ口出してンじゃねエ」

「別にそんなつもりは無いけど。ていうか口悪いわね、アンタ」

「煩エな、他人の口にぐだぐだ文句言うンじゃねエ」

「それは理不尽だと思いますけれど?!」

「黙ってる三下。早く座れ」

「三下ア?!」

再度三下呼ばわりされ、黒子は再度髪<sup>アカセラレタ</sup>の毛を逆立たせて怒声を上げるが、当然のように一方通行が気にすることはない。

むしろテンプレ的なリアクションにさっきまでは何とか反応していた目から全く興味が消え失せ、追撃する気すら一緒に消え失せたようだ。

「キミは縄張り荒らされた犬かってことです」

「ンだよ、何か言いたいことでもあンのかよ」



「別に。けど、そこまで威嚇することもないと思うってことです」

六人は何とか座れるだろうボックス席に、二人組が二組。しかも同じペア同士で対面しているのではなく、それぞれ斜めに分かれて座るというあまりにも空気の悪い状況。

それというのも最初にかがりと一方通行が対面で座っていたのが良くないのだが、この空気<sup>レベル</sup>でわざわざ席替えを言い出す度胸があるかという、それは強度<sup>レベル</sup>に関係なく誰もが同じ。

もちろん傍若無人に見えて意外とチキンな一方通行も、胃痛持ちでストレス性な黒子もそう。ついでに同じく超能力者<sup>レベル5</sup>だが常識的な感性を保持している短髪の少女も同じ。

非常に気まずい空気の中、誰から口を開こうか、お互いに機を伺い合っていた。

「えーと、せっかくだし自己紹介ぐらいはしめさんと、お姉様」

「ちょ、黒子アンタ　！」

「え、ええ、せっかく同じ席に居合わせたんですもの。これも何かの巡り合わせ、一時の間だけでも親睦を深めることにももちろんお姉様は異論ありませんわよね？」

黒子、裏切る。

自分から敢えて口を開いたようにも見えるが、実のところ完全にクリアパスだ。一番やばい最初の自己紹介、および今の状況に対する責任を“お姉様”に擦り付けた。

「くっ、裏切ったわね黒子、あんなに一緒だったのに！」

「お、お姉様が私の想いに応えて下さった?！」

「んなわけないだろうがああ！　だから暑いのにひつつくなピカチ  
ユウウ！」

「痺れるううああああ?!!！」

目を輝かせ、軽く飛びついた黒子にこれまた軽い電撃が襲う。

他の客の迷惑にならないギリギリのラインの電撃と叫び声ではあるが、常連である二人が一緒だからか、まだ店員からの注意はない。どちらにしても公衆の面前で能力を頻発するのは非常によろしくないと言えるのであるが、まったくもって気にしてはいなかった。何せ、貞操の危機である。

「仕方がないわね。私の名前は御坂美琴。常盤台中学の二年生よ」

「私は白井黒子。お姉様の後輩で、ジャッジメント風紀委員第一七七支部に所属しておりますの」

渋々ながらもしっかりと自己紹介する二人に、特に美琴の自己紹介に、アクセラレータカガリと一方通行は二人して互いに意味深な目配せを交わす。それを見た二人は怪訝な顔をするが、もちろん初対面の人間の目

線の示す意味など、分かるはずもなかった。

「自己紹介してもらって黙ったままじゃ、ちょっと礼儀に外れるってことです。僕の名前は」

「存じておりますわ。 学園都市序列第六位、『フレイム・ジン無尽火焰』こと、カガリさんですわね？」

「あれ、なんで僕のことを知ってるの？」

「初春から聞きましたの。ほら、先日貴方強盗を退治されたでしょう？ その時に居合わせた風紀委員ですわ」

確かに先日、路地裏で自分に絡んできた発電能力者を撃退した記憶がある。エレクトロハンド

そういえばあの能力者の後をジャッジメントが追いかけてきて。  
。うん、確かに、そいつが強盗で警備員との取り調べや事情聴取が云々という話もあった。アンチスキル

結局あの時は一方通行の機嫌が悪くなりそうだったし、事情聴取も面倒だったからその場の風紀委員 ジャッジメント 確か初春飾利サンにその場を託して逃げたんだっただか。アクセラレータ

「あのと時の風紀委員ジャッジメントって、もしかしてキミの同僚だったりするのかい？」

「はい。あの後も初春は貴方にお礼を言えないものかと悩んでおり

ましたの。ですから書庫バンクで貴方のことを検索して  
「

「成る程ね、それで僕が超能力者レベル5だってことも知ってるってことか。  
納得いったってことです」

ジャッジメント  
風紀委員の持つているセキュリティレベル、閲覧資格はランクC。  
図書館や公衆端末などのランクがDで、教師達がBであることを  
考えると、ある程度は十分に書庫バンクの検索が出来るのだろう。

もちろん超能力者レベル5のリストが見られる程だとは思えないのだ  
が、そこは風紀委員だ。何か特権とかの仕様があるのだろう。

「それじゃあコイツのことも？」

「ええ、そのときに一緒に調べさせて頂きましたわ。 学園都市  
序列第一位、『一方通行』さん」

「ヘエ。まさか俺のデータまで調べられるなんて、そいつ随分  
な特技持つてンじゃねエか」

ギロリ、と一方通行アクセラレータの目が黒子を捉え、さしもの凄腕風紀委員の  
黒子もビクリと震えた。

もちろん仮に初春が違法行為を行っていることを一方通行アクセラレータが知っ  
たとしても、彼に初春をどうこうする権利も、する気もない。

「序列第一位に、第六位。アンタ達が？」

「間違いありませんわ、お姉様。アクセラレータ一方通行さんの方の真偽は証明出来ませんが、カガリさんの方は書庫バンクに顔写真がありましたの」

「へえ、自分以外の超能力者レベル5か。随分と久しぶりに会ったわね。メンタルアウト常盤台の心理操作はいけ好かない女王様だったし」

その情報が真実だと知って、美琴は不適にもニヤリと笑う。

今まで自分が相手にしてきたのは武装無能力者集団の下っ端スキルアウトの下端レベル2や、そのあたりを転がっているエリート崩れの異能力者や低能力者レベル1。

常盤台には大能力者レベル4なども結構な数、揃ってはいるが、誰も彼もおとなしくて力比べをするような性格ではない。

「そういうことなら改めて自己紹介させてもらうわね。」

私は常盤台中学の二年生、学園都市序列第三位『超電磁砲レールガン』の御坂美琴よ」

「アクセラレータ『一方通行』だ。ヨロシク」

「学園都市序列第六位、『無尽火焰フレイム・シン』こと、カガリだ。こっちもよろしくってことです」

テーブルを挟んで三人、奇妙な体勢ながら握手を交わす。

考えるとこの場所には学園都市最強の七人の内、半分近くが集まっているということになる。

超能力者レベル5が三人もいたら、国一つぐらいは簡単に滅ぼせる。1人で一国の軍隊を相手に出来る化け物が三人も揃っているのだ。学園

最大戦力といっても過言ではない。

「お待たせしました、こちらカフェオレとホットティー、ハラオウ  
ン抹茶でございます。

お客様、先ほどは新人がご迷惑をおかけしたようで、大変申し分  
かりません」

「ああいいんだよ別に、気にする程じゃ無エ」

「ありがとうございます。今後とも、当店をどうぞご贖に。こち  
ら割引券でございます、どうぞ次回ご来店の際にお使い下さいませ」

カチャンカチャンと静かに音を立てて三つのコップがテーブルに  
置かれる。

カフェオレとホットティーはごくごく標準的なこの店の人気メニ  
ューで、おやつ時や放課後のティータイムの時間帯にはガンガン売  
れていた。

一方、あんこ入りパスタライスに満足できなかった一方通行が頼  
んだのは、見た目はそれなりに普通の代物だった。アクセラレータ

冷房が効いている店内だから頼める代物は、分厚い茶碗に注がれ  
ており、熱々であることを示すかのように盛大に湯気を立ち上らせ  
ている。

中の液体は緑色。いや、ここは素直に抹茶と云えばいいのではあ  
るまいか。とにかくごくごく普通の抹茶であり、サービスについて  
いる小さめの煎餅とセットで頂くのだろう。アクセラレータ

今までのメニューと違って、あの一方通行が頼む品にしては随分  
と見た目が普通過ぎる。何か、トンデモない味が臭いかをしている

に違いなかった。

「 来た来た、一部で有名なハラオウン抹茶」

「あ、私これ自販機で見たことあるわ」

「へエ、こいつを知ってるなんて見所があるじゃねエか第三位。コイツは元々自販機オリジナルだったのを、この店でレストランで出せるレベルまでクオリティを追求したものらしいんだよ。」

椰子の実サイダーやらスープカレー缶やら、キングランブータンジュースやらと一緒に自販機傑作シリーズなんだ。

もう実機の自販機の方じゃ幻の一品らしいんだが、さて、どんな味がすんのか拝見させてもらうぜエ  
「

先ほどまでの緊張感は何だったのか、一方通行は嬉々として、その細い両手で茶碗を捧げ持つ。  
アクセラレータ

自販機巡りが立ち読みと同じく趣味の一つである美琴は見たことがあるらしいが、それはうらやましいことだ。レストランなど外食の奇天烈メニューばかり追い求めている上に出不精の一方通行は、  
アクセラレータ  
未だかつてコイツに出会ったことがなかったのである。

「そんじゃま、早速。」

ズ、ズズ、ズズズズズ      ズズズズズズズズズ

「

「ドキドキ」

いつも通りドキドキと興味深そうに注視しているカガリの前で、  
アクセラレータ一方通行はゆつくりと抹茶を啜る。

一口、二口、三口。

別にお茶の席ではないので、三口で飲みきらなければならないなんて作法はない。なのに<sup>アクセラレータ</sup>一方通行は何かに魅入られたかのように一息で、長い時間をかけて、抹茶を飲み干した。

「力」

「か？」

「力、力力、力力力力力力力力力力！！」

「え、ええ？！ えええええ？！！」

抹茶を全て飲みきった<sup>アクセラレータ</sup>一方通行が、突然甲高い笑い声を上げ始め、いきなり狂人と化した白髪の少年に、常盤台のお嬢様二人は盛大にビビッて後ずさった。

いつものことだといえはその通りではあるのだが、やはり突然このような態度を取られると恐い。特に、初対面の間柄ならば。

「あ、甘エ！ 地獄のように、天国のように甘エ！ てか純粋な砂糖よりシロップよりも甘エ！！ 甘すぎて頭がガンガンする、過糖<sup>オート</sup>過ぎて脳みそが自動で激しく回転すんぞこりゃあ！ トンデモ無エ甘さだアアアああ！！！」



そのあまりの悶えように、思わずメニューのカロリー表示をチェックした三人は絶句した。

およそ飲み物に、否、1人分の食物として存在してはいけないうな尋常ではないカロリー量。それはどんな運動、勉強、苦難を乗り越えればこのカロリーを消費できるのか想像もつかない糖分の暴力。

味なんて想像できるもんじゃない。下手すれば化学的に合成したありとあらゆる人工甘味料を凌駕するだろう人工的な甘味。

その暴力の前に晒された一方通行に、あんな症状が発症したとしても領けてしまう。アッセレータ

「ねえちょっと、あれって本当に第一位？ いつもあんなカンジなの？」

「信じられないかもしれないけど、正真正銘の真実ってことです。あんな調子で面白メニューを追いつめては失敗する毎日なんだよね」

「第一位ともないますと、個性的ですわね。いえ、あんな様では個性的などという音便な言葉では片付けられない気も致しますが」

それは言わない約束である。

彼のことを知る者は大概が某かの手段で第一位の情報を知って、彼を殺そうと襲いかかって来た者であり、それらは須く返り討ちに遭っていた。

よって彼が第一位であることを知る者は、ごく僅か。暗部の人間などは情報を渡されているかもしれないが、その情報と目の前のユニークな白髪の少年が一致することは生涯無いだろう。

「それで、第一位と第六位ともあるうものが揃ってこんなところで何をしてんのよ？ 長点上機学園の制服着てるみたいだけど、あそこってこの店からは随分と遠くない？」

「ああ、僕も一方通行も学校には通ってないってことです。あつちこつちの研究施設で実験に協力したり、あるいは自分自身に課せられる実験を消化したりの毎日さ」

「くそつたれな実験を、な」

「あら、気がついたようですわね」

「イイ感じに狂ってやがったぜ、この飲み物。これさえあればドンだけ演算しても大丈夫なカロリーがあんな」

「そりゃあ恐ろしいってことです」

あんまりにも甘かったらしく、気を利かせて、というか当然の未来を予想して店員が持ってきた、暖かい“普通のお茶”を煽る。

確かに脳は人体で最もカロリーを消費する部分だ。特に能力者の演算は相当に脳を酷使するから、もしかしたら演算能力を拡大する実験などに効果があるかもしれない。

「今日は実験の途中でコイツに拉致されたから、実は何をするつもりなのか全然分かんないってことです」

「別に何か用事があつたわけでも無エンだよ。ただ、1人は暇

だからな。　　そういうテメエらはどうしたんだよ。常盤台のお嬢様が、こんなところで油売ってちゃまずいんじゃないのか？」

イライラと質問する一方通行に応えて、黒子が口を開く。  
アクセラレータ

上品に紅茶を啜っていた彼女は普段から初春の相手で疲れているからか、二人の超能力者<sup>レベル5</sup>の相手を早々に諦め、カオスな部分は全てお姉様に丸投げしていた。

「ああ、私たちは待ち合わせよ。黒子がどうしても友人に会って欲しいって言うもんだから」

「そう嫌そうな顔をなさらないで欲しいですよ、お姉様。もちろん私とお姉様が普段からファンの人たちの無神経な振る舞いにほとほと呆れているのは存じておりますわ。」

けれど初春は　　まあ、その、優秀な風紀委員<sup>シャッジメント</sup>ですの。なんといいますか、ちよつと色々と問題なところはありますが。

それでも分別を弁えた大人であることは違いありませんわ。それに私、あの子にあの調子でお願い事されると断れませんの。胃が痛くなりますし」

「　　アンタも苦労してるのね」

ゆっくりゆっくり、胃を労るかのようにゆっくり紅茶を啜る黒子に、普段向けているものとは違う同情した視線を美琴は送る。

いつもなら自分のペースで美琴に変態行為を繰り返す黒子であるが、今の彼女は世間の、というよりは個人の荒波に揉まれて随分と疲れて見えた。

「　　おや、噂をすれば影ですよ、お姉様」

「へ？」

と、黒子がゲツと口元を歪め、まるで本当は会いたくないけど、それでもどうしても会わなきゃいけない嫌な上司にでも町中で遭遇してしまったかのような表情で、窓の外を見る。

その表情はあまりに生々しく、美琴もいつものように軽く悪態の一つもついてやろうかという気分すら湧かず、黒子につられて外を見た。

そこにあるのは綺麗に磨き上げられたガラス窓。

大きめに設われ、外の光を十分に店内へと導くガラス窓からは、外からこちらを見つめる二人の女学生の姿を写していた。

1人は背中の中程までのばしたストレートの黒髪と、強気な性格であることを感じさせる自己主張する眉毛が特徴的。

もう1人はクセのあるショートカットの頭の上に、色も種類も鮮やかで様々な花冠を乗せ、片袖に盾の意匠をあしらった緑色の腕章を付けた少女。

ここに登場人物達が出そろい、物語は始まりを告げる。

なんてことのない巡り合わせか、それとも運命のいたずら、あるいは運命そのものか。

その判断が彼らにつくのは、これから彼らが何てことのない日常を通り過ぎ、非日常に、それも突発的に始まって終わるものではなく、彼らの歩く道行きそのものを変えてしまうような、事件。

そんな事件に、巻き込まれてからの話であった。

## 第6話 『能力者、四人、レストラン』（後書き）

次話はいよいよにレールガン第1話！

ここからピッチを上げて、原作に介入していききたいと思います。  
どうぞよろしく！

第7話 『常盤台、長点上機、柵川中学』（前書き）

来週が終われば、楽になれる ！

とりあえず今週は書きためたコイツを投下です。夏休みに入ったらヒマになるなんて幻想でしたね。

バイトに部活にボランティアに、正直息つく暇もありやしねエ 。

## 第7話 『常盤台、長点上機、柵川中学』

第七学区は、航空宇宙産業に関する研究を一手に引き受ける第二学区に匹敵する広さを誇る、学園都市最大級の学区である。

航空宇宙、という非常に大規模な研究をする第二三学区が広大な敷地面積を実験に使用するためのスペースとして確保しているのならば、この第七学区はまさしく学園都市という名前の指し示す通り、学生のために存在しているような学区だ。

その敷地の中は常盤台中学を代表とするお嬢様学校によって作られた閉鎖的空間である『学舎の園』や、他にも各種様々な学校が犇めく。

学生が増えれば、当然のように学生のための施設も増える。

第七学区は巨大なデパートや各種喫茶店、ゲームセンターなどの娯楽施設を多数抱える、学生の為の街であった。

そんな第七学区の中央通り。

先日、かなり大規模な強盗事件があったファーストフード店も程近い。他にも学生が学校の帰りに寄るのに都合の良さそうな喫茶店やら屋台やらが立ち並び、中央の道は多数の緑が植えられ、ベンチや、腰掛けることを想定された頑強で座りやすい造りの花壇が並び、この暑い盛りだというのに、あちらこちらで学生達はクレイプやハンバーガーや飲み物を片手に談笑していた。

結局のところ彼らとしては、そこに腰を落ち着ける場所と馬鹿話が出来る友人達が居れば何も問題ないらしい。いかにも学生らしいと言えようが。



「まさか、ここまで大所帯になるとは思いませんでしたの」

「つうか何で俺達まで連れ出されてんだよ？ 暑イ、怠イ、涼しいところに行きてエ、むしろ涼しいところで行きてエ」

「自墮落にも程があるってことです。まあ、あのままだと結局のところ居づらいことには変わらなかったから、どっちにしる出なきやいけないことになってたとは思っけどね」

よく使用する慣れ親しんだファミリレストランから追い出された一行は、第七学区の中央通りの一角、通行人の迷惑にならない都合の良い場所で車座になって対面していた。

?? 放課後ということもあって、人通りはかなり多い。流石に多数の学校を抱える第七学区は巨大であるが、それでも全ての地域に均等に様々な施設が存在しているわけではない。

?? だからこそ彼ら学生は学園都市にも数少ない娯楽施設が集中している中央エリアに好んで集まり、完全下校時刻までの僅かな時間を有意義に過ごそうとしていた。

?

「あ、あの、その節はありがとうございましたっ！ 改めまして、  
私は風紀委員第一 ジャッジメント

七七支部所属の、初春飾利と申します！」

?

?? 真っ先に興奮した様子で口を開いたのは、頭の上に花飾りを乗

せた少女。

?? 柵川中学校の極めて一般的かつスタンダードなセーラー服を着ており、右の袖には立て続けをあしらった特徴的な緑色の腕章をつけている。

??

「ああ、あの時は後のこと全部任せて逃げちゃって、悪かったってことです。もしかして何か迷惑かけちゃったかな？」

「いえ、それは顔見知りの警備員アンチスキルの人が適当に書類を弄ってくれたんで大丈夫だったんですけど。

?? そんなことより、十分なお礼も出来なくて、申し訳ありませんでした」

「いやいや、それは別にどうでもいいってことです。大したこともしてないしね」

?

?? 綺麗な長い黒髪と語尾が特徴的な顔見知りの警備員アンチスキルは、かなり話分かる人で、しどろもどろに先ほどまでは確かにいた協力者のことを説明する初春に「気にするな」と笑ってみせた。

?? 基本的に法律を遵守する存在である外の世界の警察官とは異なり、こちらは転じて基本的にボランティアである警備員アンチスキルは、そのあたり随分と融通が利く。

?

「それより初春、隣の方は 同じ中学の方とお見受けしますけど、どなたですか？」

?

??カガリと初春に対して三角形の位置に、美琴と並んで立っていた黒子が、半ば置いてけぼりの状況に耐えかねたように口を開いた。??その言葉に釣られるようにして、全員の視線が初春の隣で飄々と笑っていた少女が目をぱちくりさせる。

?

??初春と同じ柵川中学のシンプルなセーラー服を纏い、ツヤのある黒髪を背中の中ほどまで流している。

??側頭部のやや上、アクセントになる位置には白い花弁をあしらった髪飾りが清楚なイメージを添えていた。

??何より、美琴とは違う、意志というよりは意思の強さを表す真っ直ぐな瞳<sup>レベル</sup>。

??超能力者であり、絶対的な実力以外でも本人の資質、あるいは人柄などから滲み出るカリスマのようなものを持った美琴。

??黒髪の彼女の視線に感じるものは美琴のそれとは違い、等身大の人間として共感を覚える類のものだ。

?

「あ、自己紹介遅れてすいません。私、初春の同級生の佐天涙子です。」「

「佐天さん、ね。初めまして、私は初春の同僚で、<sup>ジャッジメント</sup>風紀委員第十七支部に所属しております、白井黒子と申しますの。」

??こちらは私のお姉さまで

「御坂美琴よ。常盤台中学の二年生。まあ一応は黒子<sup>へんたい</sup>の先輩ってことになるわね。でも年上とかは気にしないでくれると嬉しいわ。どうぞよろしくね」

「御坂、美琴?　もしかして常盤台の超電磁砲<sup>レールガン</sup>?」

??

?? 驚いた、というよりは“ やっぱり ”と言いたげな吐息を漏らし、目を見開いて美琴を見た。

?? そこに何か嫌な感情を与えられる響きはないが、だからこそ美琴は困惑する。

?? 自分がそうなりたかったか、そういう扱いを望んでいるか、そういうことには彼女は紛れもない学園都市序列第三位なのだ。

?? 娯楽の少ない学園都市の中で、巷に情報が公開されている超能力者<sup>レベル5</sup>は、例えば――<sup>ひとつはじめ</sup>などの外の世界のアイドル達と同等以上の人氣を誇る。

?? もっとも超能力者<sup>レベル5</sup>の殆どは書庫<sup>バンク</sup>にも顔写真はおるか本名すら載っていないという体だから、実際に巷に名前が知られている超能力者<sup>レベル5</sup>は美琴ぐらいなのだ。

?

「 いやー、まさか本当に超能力者《レベル5》に会えるなんて、流石は初春！ 」

「 だから私、本当だって言ったじゃないですかッ！ それなのに佐天さんが『じゃあこの目で見て確かめるお！』なんて言うから 」

?

?? 泣きべそのような声を上げながら、初春が佐天の胸をポカポカと叩く。

?? 元々この場合は常々黒子がお姉様お姉様と慕う人物が常盤台の超電磁砲<sup>イルガン</sup>だと知った初春が、若干の黒い圧力<sup>プレッシャー</sup>を与えながら黒子に頼んだのであるが。

?? あまりの嬉しさに舞い上がって、下校の途中、佐天に話してしまったのが運の尽き。

「基本的に暇をしているので初春に構うか、ネットサーフィンに勤しむしかない佐天が、そんな好機を見逃すはずがない。」

「学園都市最強の発電能力者、<sup>エレクトロマスター</sup>どんな人かと思ったけど 意外と普通？」

「普通 ？」

「あ、いや、悪い意味じゃないんですよ？ ただちよつとホラ、なんか如何にもってカンジの超能力者<sup>レベル5</sup>を想像しちゃってたから、なんか拍子抜けていいいますか。むしろ安心したっていいいますかねえ初春？」

「あ、は、はいそうですね！ 私も白井さんのお話を聞いていたときの印象とは、ちよつと、その、違う様な。完全無欠のお嬢様を想像してたのは、まあ、事実なんですけど。」

「でも佐天さんの言うとおりです！ 別にだからどうこうってわけじゃなくて、むしろ親しみが湧くぐらいです！」

「？」

「超能力者<sup>レベル5</sup>。強度<sup>レベル</sup>によって厳格な序列がつけられてしまう学園都市において、5と4、5と3、5と2、あるいは5と1か0。その比較のどれにも違いなどない。」

「大能力者<sup>レベル4</sup>であろうと無能力者<sup>レベル0</sup>であろうと、圧倒的な能力を保持する超能力者<sup>レベル5</sup>の前では一樣に等しい存在だ。即ち、無力。」

「だからこそ、彼らは憧れと畏れを一身に集める。まるでアイドルのように、あるいは独裁者のように。」

「そしてアイドルのようにと形容されるからには、当然のように」

ファン達による偶像化という宿命がついてまわるものだ。

??まさか超能力者<sup>レベル5</sup>はトイレに行かないなんて考えている者はいないだろうが、それにしても神格化に近い畏怖を向けられる存在であることには違いない。

??例えば常盤台中学における御坂美琴が、近寄りがたい完全無欠のお嬢様として遠巻きに憧れ、結果として親しく喋る知人が全く存在しない、などという半ばイジメにも近い状況に陥っているように。

??

「はあ、やっぱり私ってそう思われてたわけね。なんていうか、周りの認識と自分自身の認識との間に随分と齟齬があるんじゃないかとは思ってたけど」

「常盤台中学ではお姉様に話しかけることはおろか、近づくことすらファンクラブの間で牽制し合っておりますもの。抜け駆けは村八分ですわ。」

??もつとも最近は会員ナンバー001である“この”私が、お姉様にご迷惑をおかけすることがないように、しっかりと統制しておりますのでご心配無——ごあツ?!

「な、ん、で、一年生のアンタが会員ナンバー001なんてものになれんのよツ!!」

ゴインツ、と鐘を叩くような鈍い音がして、失言をかました黒子が頭を抑えて蹲る。今しがた制裁を加えた拳から煙が上がっているのを見れば分かる通り、お姉様の拳骨は尋常ではなく効く。

??

「おい花瓶」

「だから花瓶じゃありません　　って、

貴方は確か  
「

「<sup>アクセラレータ</sup>一方通行だ。あのツインテのペースでうつかり着いて来ちまったが、俺達は何時になつたらご無沙汰出来ンですかア？

「？？楽しく冷房の効いた快適なファミレスでランチを楽しんでたつてのによオ、追い出されちまって不機嫌MAXなんですけど？ 貴任とつてくれませんか？」

？

「？？見事な拳骨を喰らつて悶絶する黒子を呆然と眺めていた初春は、横あいから聞こえてきた極めて不機嫌そうな声にビクリと身を震わせた。

「？？小動物のように怯えても仕方がないくらいの迫力がそのドスの効いた、だというのに自分と同年代の程度の声には込められていたのである。

？

「つウかよオ、マジで迷惑なんですけど？ 別にテメエらのお仲間でもなんでも無エのに同類扱いで一緒に会計済まされちまってよオ。俺は冷房に当たり足ンなかったつてのに  
「

「まあまあ<sup>アクセラレータ</sup>一方通行、そこまでイライラすることでもないってことです。

「？？どうせこれからのプラスなんて何も考えて無かつたんだろう？ 旅は道連れ世は情けつてことです。こういうのも一興じゃないか」

「またテメエは少しでも楽しそうなモンがあるとホイホイ着いて行きやがつて。  
。

「？？いいか、いつも散々俺に振り回されてるなんて言つてやがるけどよオ、実際振り回してンのはテメエの方なんだからなア？！」

???

「??ダラダラした白衣の胸ぐらを掴み、ブンブンと前後に力の限り振ってみせる。」

「??ベクトル操作などしてはいないから、これは純粹にモヤシレベルの力のしか持たない自分のスペック。だというのに超能力者<sup>レベル5</sup>の第六位である友人は驚く程に軽く、そんじょそこの小学生にも例えられるこの腕力でも簡単に揺さぶられていた。」

「そうは言っても、最初に僕の予定も聞かないで無理矢理連れ出すのは君の方ってことです」

「俺アいいんだよ、どうせ大概ヒマしてンだろオが」

「その珍しくヒマして無い時が今日だったわけだが。というかその理屈は理不尽極まりないってことです」

若干の諦め、というよりはむしろ嬉しそうな響きすら伴った力ガリの言葉が勘に障ったのか、一方通行は友人を揺さぶる手に力を込めた。  
アクセラレータ

アハハハハと一本調子で笑い続ける力ガリの方が、若干、いやかなり身長が高いから、その様は片方が凶悪の権化である一方通行<sup>アクセラレータ</sup>だったとしても、実に滑稽な構図である。

「どっちかっていうと、むしろコッチの方が学園都市第一位かと若干の失望は抱きましたけど」



「正直、それは否定出来ないわね。なんていうか、超能力者<sup>レベル5</sup>っぽくないというか、ホントに第一位なの？ コイツ」

無言で断っていたれば年齢不相応の迫力がある少年も、普通に年上の友人とケンカしている姿を見れば、背伸びして粹がっている子どものようにも見える。

もちろん超能力者<sup>レベル5</sup>という称号、そして学園都市序列第一位という格付けは伊達ではない。

その能力は書庫<sup>バンク</sup>にも載っておらず、運良く対峙して生き残れた者にも、正体がかめめない。だというのに、間違いなく最強。

第三位である超電磁砲<sup>レールガン</sup>、御坂美琴に対して、一位と二位は別格と言われている。その理由は不明だが、どちらにしても圧倒的な実力を備えているであろうことは想像に難くない。

「あん？ 疑ってんなら今ここで気持ちよくブツ殺してやるオカア？」

「ふうん、良いわね、そういう流れ嫌いじゃないわよ。私も一度、自分以外の超能力者<sup>レベル5</sup>と戦ってみたいと思つてところだし」

「ちょ、ちよつと御坂さんも一方通行<sup>アクセラレータ</sup>さんも落ち着いて下さいよっ？！ こんな往来で能力使ったりしちやだめですって！」

眼光鋭く睨み合った二人を見て、初春が慌てて間に割つてはいる。超能力者<sup>レベル5</sup>が具体的にどんなことを出来るのか、というのは知らないが、どちらにしてもこんな往来で学園都市序列第一位と第三位が一触即発の状態で見合つていいわけがない。

「じゃあ僕が立会人を」

「カガリさんも余計に煽らないで下さい！　もう、せっかく御坂さんと遊ぼうと思って白井さんをお願いしたのに、これじゃ台無しですよっ！」

学園都市二百三十万人の中で七人しかいない超能力者<sup>レベル5</sup>。

その中でも特に有名で特に人気の高い、同姓かつ先輩という魅力的なポジションにいる超電磁砲<sup>レールガン</sup>こと御坂美琴はミーハー気味の有為春にとってみれば最高の憧れだった。

「しかしなあ初春飾利サン、いったい遊ぶって言うても何する気なのか分からないってことです。結局こうしてファミレスからは追い出されてきちゃったわけだけど、何かプランでもあるのかい？」

ぱちくりと目を瞬かせた初春が黒子の方を向き、それにつられて1人を除く全員の視線が一カ所に集中した。

確かに、黒子に頼んだのは初春でも、この場をセッティングしたのは黒子の方。もちろん美琴は今日の段取りについて何も聞いていないし、無理矢理連れ出されたカガリと一方通行<sup>アクセラレータ</sup>も同じ。

「も、もちろんプランは出来ておりますのよ！　ちよつと予定とは違いましたが、まずはデパートにでも行きまして、ショッピングを」

「　　ちよつと黒子、このメモ」

「つて、お姉様?!」

おそらくは今日の予定を書き出したメモと思われるものを取り出した黒子の背後に回った美琴が、それを電光石火の速さで取り上げる。

ザッと素早く目を通せば、女の子らしい丸文字で、とても女子中学生とは思えない欲望丸出しの計画が書き込んであった。

曰く、初春をダシにしてお姉様とのスーパーいちゃいちゃタイムとか何とか。媚薬などという言葉を用いている段階で、もはや警察にブチ込んだ方が良くはないかと思わせるだけの変態ぶりである。

「　　却下。却下却下却下あ！　黒子ほくろお！　このアンタの欲望丸出しの計画なんか協力できるわけないでしょうがあっ!!」

「名前が違いますのよお姉さ　　ぴかちゅうつ?!」

手加減抜き、とはいえ人体を殺傷しない程度の本気電撃が黒子を襲う。

天候すら操作できる超能力者レベル5だが、絶妙に調整された電撃は執拗に、強烈に、しかし明確な怒りを持った制裁である。

「　　初春さん、佐天さん、こんな奴のことなんて気にしないで、

ゲーセンでも行かない？ その二人も、良いわよね？」

「つうか俺達ア同行することになってんのか」

「まあ気にする程じゃないってことです。どうせヒマだったし、やること思いつかないなら一緒に遊ぶのもまた一興」

鮮やかな笑顔を浮かべて同意を求めてくる美琴に、一方通行とカガリは顔を見合わせる。アクセラレータ

確かに予定は無かったし、自分たち自身が腐ってしまいそうなくらいにヒマはしている。カガリにしても、今日はもう実験なんて気分でもなかった。

それに別に他人と一緒にいるのがことさら嫌いというわけでもない。アクセラレータ一方通行は一期一会の馬鹿騒ぎはそれなりに好きな方だし、カガリは人との交流を好む。

「まあ色々複雑な事情はあつけどよオ」

「は？」

「いや、別にテメエに話すようなことじゃねエ。気にすんな、第三位」

ただ、目の前で首を傾げる不思議そうな顔を見てみると、若干のしこりを胸に感じるのもまた事実。

まさかこの少女は、自分たちのことを知らないのだろうか？ あの凄惨な毎夜の出来事を、血煙香る実験を。

この太陽のような少女は、知らないのだろうか。学園都市に息づく闇を、自分たちが塗れている闇を。同じ超能力者<sup>レベル5</sup>という位階にしながら。

「いいぜ、別に、ヒマだし付き合ってやんよ」

「あら、本当に良いの？ 別に無理してまで来て貰おうとは思ってなかったけど」

「ちょうどゲーセンでも行こうと思ってたところなんだ。結局のところ同じ場所に行くことになったろオが。だったら別に、一緒でも問題無エ」

見極める必要がある。

ここで出会ったのが仮に偶然であったとしても、その出会いが導く結果すらも偶然とは思えない。そこには某かの必然があっても不思議じゃないだろう。

となると自分たちに出来ることは、ここでの出会いが何を生むのか、それを考えることだ。それを考えなければ、致命的な不幸を、悲劇を生みかねない。

ならば、見極める必要があるのだ。彼女の人柄を、彼女の能力を、彼女の実力を。

見ているだけでイライラする顔も。感情をめまぐるしく変えるが故に、押し込めていた感情を刺激するその顔も。

何を思っているのかを、見極める必要があるのだ。

「おい、花瓶に没個性」

「また花瓶って言ったあ?!」

「ぼ、没個性　!」

ギロリと柵川中学の二人に睨み付けるような視線を送った一方通行<sup>イタ</sup>が口を開く。

相も変わらず他人につける渾名が酷い。当然二人もいきなりの暴言に、むしろ呆然と目を見開いた。

「はじめまして、学園都市序列第一位『一方通行』<sup>アクセラレータ</sup>だ。よろしくウ」

「は、はあ、初春飾利です、どうぞよろしく?」

「佐天涙子よ。ていうか没個性って何ですか没個性って!」

日だまりの中ですら、暗がりを探して息を潜める。

そんな悪党な生き方をする必要もないぐらい強すぎる、学園都市<sup>アウトロー</sup>の超能力者<sup>レベル5</sup>。

しかしそれは、能力での話。

その精神は、心は、未だに成長途中の少年のものだ。いくら彼が強くて、無敵でも、それは 変わらない。

そしてそれは学園都市の全ての学生についても、言えること。彼らは全てが不完全であり、成長途上なのだ。

結局のところ、だから、学園都市で起こることは全て、学生達の物語。

すなわち不完全で成長途上な心と心のぶつかり合い。だからこそ彼らはもがき、あがき続ける。

もちろんこれから楽しくゲーセン巡りに洒落込もうとしている彼女たちにそんな自覚はなかるうが。

その彼女たちを一步、二歩、下がって見守る超能力者<sup>レベル5</sup>の第六位。彼の瞳が妙に優しく笑っていたのを見ることが出来たのなら、もしかしたら、自分たちの立ち位置というものにも勘づくことが出来たかもしれない。

しかしそれも当然、仮定の話であるのだ。

第7話 『常盤台、長点上機、柵川中学』（後書き）

黒子 胃痛持ち

美琴 無自覚ドS

なんかね、さらに色々とおまけ属性が付いてきそつな今日この頃。



第8話 『少年少女、放課後、クレープ屋』（前書き）

投稿が暫く空いてしまつて申し訳ありませんでした！  
作者近況につきましては活動報告をご参照下さい。ホント、夏休み  
は死ぬほど忙しかったぜエ。

## 第8話 『少女、放課後、クレープ屋』

広い広い学園都市の中でも、格段に広い第七学区。その中央広場には当然のように学生たちが多く集まっている。

中央広場と言っても、言葉から想像するような開た空間があるわけではない。強いて今、言葉による説明を試みるならば、広い遊歩道の両側に車道が据えられた、暗渠のような公園と表現するべきだろうか。

実際に一般的な暗渠といえば車道一車線分ぐらいが精々なのだろうが、ここは元々からしてこういう作りである。

故に学生たちが限られた放課後を謳歌する公園は、広々としていて快適だった。

「いやあ遊んだ遊んだ！ 久しぶりに遊び尽くしたねー、初春！」

「そうですね、佐天さん。最近<sup>ジャッジメント</sup>は風紀委員の活動と勉強で忙しすぎてゆっくり遊ぶ時間もとれませんでしたし、満喫しました」

そんな夕方近く、というには若干早いおやつ時の時間帯。思い思いに寛ぐ学生たちの中に、些か異質な集団が散らばっていた。子ども連れと思しき、大人である。

学園都市には二百三十万人以上の住人が居住しているが、その八割以上が学生。

いくら教師や研究員、各種施設の職員なども存在しているとは言っても、二百三十万人中の八割には束になっても敵わない。特に第七学区は学生街ということもあり、纏まった数の大人の姿は目立つ。近くにはバスガイドらしき制服をまとった女性の姿もあることから、おそらくは学園都市のガイドツアーであることは予想できるが、それでも物珍しく、それなりに学生たちの視線は集まっていた。

「確かに、今日はこれでもかというぐらいに遊び尽くしましたわね。私ゲーセンなんて初めてでしたわ、お姉様」

「の割にはシューティングとかイイ線いつてたじゃない。やつぱりテレポーター空間移動能力者って空間把握能力が高いから、ガンシューティングとかレーシングゲームとか得意なのかもね。

それに引き換えアンタ達、言った割にはそこまで強くないし」

「あん？」

「こちとら毎日毎日ゲーセン通いしてんだよ、なんて大口叩いいて、私と格ゲーで五戦中二勝二敗一引き分けなんて、随分と残念な戦績じゃない？」

「うつせエな、今日は寝起きだから全力出すのが怠かったんだよ。本気出せばテメエなんてイチコロだ第三位。手加減されたことも分かんねえのか、三下が」

「まあ経験値が高くて強いとは限らないってことです」

だがその中でも更に異質な集団がいた。

間違いなく学生であり、第七学区の中央通りを歩いていても年齢的には一切違和感はないだろう。

しかし彼ら、彼女らの風貌と雰囲気は、それなりに超常現象に付いての親しみがある学園都市の学生たちでも、思わず二度見してしまう特異さが存在していた。

まず常識の範疇から目立つのは、常盤台中学の制服を着込んだ二人の美少女。

そも美少女という段階で人類の半分の熱烈な視線を獲得したことは保証されるものであるが、こと学園都市の中においては常盤台中学の制服というものにも大きな意味が存在している。

誰もが憧れる、強能力者<sup>レベル3</sup>以上の能力者でなければ入学を許されないお嬢様学校。その押しも押されぬ名門校は女子校ばかりで構成された『学び舎の園』という自治区に近い空間の中にあり、全寮制ということもあって、このような広場へは滅多に出てこない。

もちろん『学び舎の園』の外にも寮はあるのだが、純粹培養お嬢様の多い常盤台中学の生徒は、登下校の途中に寄り道をするという発想がそもそもない者が多かった。

言わば学園都市的な希少種。お目にかかればご利益があるかもしれない類の存在だ。

さて、その集団の中にはもう二人組の少女達がいた。

こちら常盤台の二人には若干派手さという点でこそ見劣りするが、実際には負けず劣らずの美少女である。

シンプルな明るい紺色の襟と鮮やかな赤いタイのセーラー服は、第七学区に存在する柵川中学の夏服。

特に背の低くショートカットの方の少女は頭に色とりどりの花々

をお花畑のように乗せており、それが童顔な彼女には非常に似合っており、魅力的であった。

背中の中ほどまで綺麗な黒髪を伸ばした少女も、白い花弁をあしらったシンプルな髪飾りをしており、清潔で清涼なイメージを自らに添えている。これもまた、魅力的だ。

だが、どちらかといえば、やはり人目を引いたのは彼女達に同行している二人組の男だろう。

片方は目つきの悪い少年だ。だいたい中学校一年生か二年生ぐらいの年頃で、ブランド物の黒いシャツと、これまたブランド物のスリムなデザインのジーンズをシンプルながら見事に着こなしている。日本人的な顔つきをしているのに髪の毛は新雪よりも真っ白で、その凶悪な光を宿した瞳は鮮血のよおうに紅い。

何より今し方、人を殺してきましたよとも言いたげなピリピリとした空気を辺りに放っており、見ているだけでも圧迫感がある。それが同行者達に向けられていないというのが、もはや奇跡なのだろう。少しでも武芸を嗜んでいたり、多少の修羅場を経験したことがある人間ならば、彼に人殺しの匂いを感じることが出来たはずだ。

もう一人は連れの少年よりも少しばかり年上の青年だ。高校生にも大学生にも見える長身で、短めの髪の毛を無造作にオールバックに纏めている。

着込んでいるのは、このクソ暑い初夏の日中うだというのに長袖の白衣。しかも裾はダラダラと脛の辺りまであるコートに近いものだ。

顔立ちは精悍で、ハンサム。優しげな微笑みを浮かべてはいるが、その目をよく見れば、実は何も映していない空虚なもののが分かるだろう。

初夏という季節に全く不釣り合いな格好と特異な存在感に思わず視線が行くが、実際に目にしてみれば驚くほどに存在感が薄い。フワフワと雲か霧のようだ。まるで学園都市の超科学によって現実世界に投影された、立体映像であるかのように。

「しかし、思う存分遊んだら少し小腹が空いちゃったわね。どこかで軽くオヤツでも食べようか？」

「賛成です！ 私、最近@ちゃんできちんと話題になってるクレイプ屋知ってるんですよ！ すぐ傍なんで案内しますよ、こっちです！」

やや浮かれ気味の佐天が楽しそうに先行する。普段からネットサーフィンを趣味として愛好している彼女は学園都市の様々な噂や伝聞形式の情報について非常に詳しい。

もともと信憑性という点では若干の不安要素があるわけだが、彼女ほどにもなるとガセネタであっても楽しんでしまう豪胆さを併せ持っていた。

勿論クレイプ屋に関してはネットの口コミではあるが、それなり以上に信頼性のあるサイトから仕入れた情報である。個々人によって好みも変わろうが、試してみる価値はあるだろう。

「佐天さん、随分とご機嫌ですね」

「一方通行からマルヲカートで三勝もぎ取ったからね。      っとに、  
アクセラレータ

誰が没個性だったの誰が！」

どうやら先ほどの暴言をかなり気にしていたようである。  
アクセラレータ

一方通行に没個性呼ばわりされた佐天は、常々自分の個性はともかくキャラクターが弱いことを気にしていた佐天は、ゲーセンに入るや否や一方通行のプレイスタイルをじっと観察していた。  
アクセラレータ

そして彼が苦手になっているゲーム、そしてそのゲームプレイの癖を観察し、分析の結果として見事に勝利をもぎ取ったのだ。しかも、三回も。

「けっ、あんなの偶然に決まってんだろオが、調子に乗りやがって」  
「

「へっへーん、『勝負つてのはなア、その時点での実力がモノを言うんだよ。コンディションとか相性とか場所の不利とか、グダグダ言う奴は負け犬だぜ』なんて大口叩いてたくせに、よく言うよ！」

「クソ、このアマ絶対いつか殺してやらア」

「学園都市序列第一位ともあろうものが、無能力者相手に本気出さんですか？」  
レベル0

そこは空気読むでしょjk」

ギリギリと一方通行アクセラレータの口の中から破壊的な音が聞こえる。佐天の軽口には非常に苛々するが、確かに無能力者相手に、それも特段自分に敵対しているとかいうわけでもなく、ましてや先ほどまで一緒にいた相手に能力をふるうのはカッコわるい。

自分に向かってくる者にはどんな仕打ちをしたところで心が痛むことなどないが、それ以外の弱者相手に暴力を振るうのは品性が下がる気がする。

何しろそれは、自分が最強であることの証明にはならないのだから。

「ふむ、君が言いくるめられてるなんて初めて見るってことです」

「煩エな！」

「君がそれにキレないのも、珍しい。なんか随分と丸くなったってことです、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行？」

「」

逆らう奴は、問答無用で全殺し。

全ての人間が自分に恐怖していればいい。全ての人間が自分を忌避していればいい。全ての人間が、自分に触れなければいい。

自分はただの恐怖でありたい。自分はただの暴力でありたい。自分はただの脅威であればいい。

それが自分、学園都市序列“第一位”、<sup>アクセラレータ</sup>一方通行。

「まあ、この面子だからね。色々と思うところもあるのも分かるってことです。君らしくは、ないけどね。僕としては君が楽しければそれでいい」



「別に、そんなこたア無エよ。俺アいつでも変わンねエ、一方アクセラレータ通行だ」

「そうかい。それならそれで僕は別に構わないってことです。もと僕が君にどうこう言う権利なんて無いからね」

すぐ近くにあるはずのクレープ屋が、やけに遠くに思える。

常盤台と柵川組の四人は、背後から漂ってくる不穏な気配に思わず無言。楽しいはずの道中が、突然おかしいな空気に包まれた。当然ダラダラ冷や汗を流している佐天の責任では絶対じゃないのだが。

「あ、ああっそろそろ近くですよクレープ屋！ ていうかアレですアレ！」

「ほ、本当だ！ うわぁー綺麗な屋台ですね佐天さん！」

ついに空気に耐えられなくなり、佐天は慌てて目の前のクレープ屋に走り出した。

「ごちゃごちゃした装飾が流行る中で、必要最低限のセンス有る外觀はクレープの味そのものに自信があるのだという無言のメッセーヂを発信しており、分かる人には分かる玄人向けな店である。」

もちろん女の子向けということもあり外装は全体的にファンシーな色を用いているが、それでもシンプルなことには変わりない。

ともすれば男性でも違和感なく来店することが出来るだろう。もちろん外見と服装による個人差と、注文の内容による差もあるだろうが。

「さあて、何にしようかなー！ イチゴクリームは鉄板だけど、バナナと小豆も捨てがたいし。ちょっと今月のお小遣いピンチだけど、奮発してデラックス三種盛りとかも」

「すいませェん店員サン、この『ホイップクリームとお好み三種の豆クレープ』を一つ。小豆と納豆とチリビーンズで」

「　　ってちよつと待ったあああ！！！」

クレープ屋の大きめな看板を眺めながらメニューを悩んでいた佐天が、隣で何の躊躇いもなくスラスラと注文をする一方通行に待ったをかける。

自分だつてこの店はネットの口コミで漸く知つて、今日が初めての来店だというのに。どうしてこの少年はまるで知っていたかのよう  
にメニューを選べたのだろうか。

しかも、こんなマニアック、というか誰も選ばないだろうチョイスを。

「あん？ そんなの知ってたからに決まっ  
てンじゃねエか」

「どこで？！　どうやって？！」

こともなげに言い放つ一方通行を問い詰める。  
アクセラレータ

自慢じゃないが自分はかなりの情報通であるのだ。ネット媒体にこそ限られるが、親友の初春のようにハッキング技術こそ持ち合わせていないが、それでもそれなりにネットの世界のことは通じてい

るのだ。

だというのにこの男、自分が巡回している板の片隅にあった情報を何故知っているというのか。

「よく行くサ店の兄ちゃんかなア、俺がそういう料理とか好きなの知っててよオ。オススメだってんで、この店教えてくれたんだ」

「あの人は他にもいくつか紹介してくれてたね。やっぱり最後に頼りになるのは人伝ての情報ってことです」

「ま、俺アそういうメニューばかりの店ってのは逆に風情が無くて嫌エなんだけだよ。

このメニュー、豆の種類が好みで選べっから、逆に簡単にや気づけねエ組み合わせるのが気に入ったぜ」

「こちらホイップクリームとお好み三週の豆クレープ、小豆と納豆とチリビーンズですねー。お待たせしましたー！」

自慢げに話す<sup>アクセラレータ</sup>一方通行のの前に、注文した品が差し出される

それはおよそ、佐天にとってクレープという定義に当てはめることが出来るギリギリのラインというものを、そりゃあもうブツちぎりで、一切の良心の呵責なく斜め上どころか次元すら異なる世界線へと

向かって吹っ飛んでいく代物であった。

クレープ生地はごく普通の、スタンダードなものだ。昨今では生地に色々と混ぜ物をする風潮もある中で、しっかりと基本を守っているのは好感が持てる。

クレープのベースはホイップクリームだ。厳選された素材から作られたそれは舌に優しく触れるまろやかな食感を食べる者に与え、ふわりと崩れるクレープ生地と共にこの店のランクというものを悟らせるだろう。

だが、トッピングがいけなかった。純然たる事故、というよりは人災と言うべきだろうか。ここまで酷い組み合わせを、佐天は未だかつて見たことはおろか、聞き及んだことすらない。

一番最初に目に付くのは、小豆。薄い黄色のクレープ生地と、白いホイップクリームの中で一際が目立つ。

どうして餡子というのは乳製品との相性がよいのだろうか、よく一緒に使われる。だからこそホイップクリームに小豆という組み合わせはむしろ定番のものであり、今更騒ぎ立てる代物ではない。

しかし次が不味かった。小豆の隣に見え隠れするのは茶色く、ねばねばと白い糸を纏った日本人の朝ご飯のお供。即ち、納豆である。甘納豆、なんて食品も存在するが、基本的にこれは甘味と合わせる食料ではない。そもそも日本人の中でも強烈な臭気から苦手とする者も多いというのに、何故よりによって小豆とホイップクリームに合わせようと思ったのか。

注文主、否、もはや店主の正気すら疑う。これは魔の組み合わせと言わざるをえない。

しかし最も恐ろしいのは、それらではないのだ。

その二つの豆の隙間からさらに強烈に個性を主張する刺客。茶色というよりはまさしく小豆色をした、スパイシーで濃い臭いを放つ物体。

そう、つまり、これこそチリビーンズである。

タコスなどに使われるスパイシーな味と食べ応えが持ち味であるこ食べ物は、確かにクレープ生地と合わないこともないだろう。

小豆と納豆の隙間から見える千切りキャベツと白髪ネギは、おそらくこの組み合わせに対して店員がチョイスしたトッピングなのだろう。何とか全体の味の調和がとれるようにと工夫が見られるが正直どうなんだろうか。

「それ、おいしいの？」

「分かンねエから、食うンだよ」

「それ、食べれるの？」

「食べられるか、じゃねエ。食べるンだよ」

店員からクレープ（謎）を受け取った一方通行が、その物体をしげしげと眺める。

見るからに毒々しい色合いと、ここまで近くに来れば明確に嗅ぎ分けることができる強烈な臭い。そもそも臭気が強い食材であるチリビーンズ、納豆、ネギ、甘ったるいホイップクリームとこっさり入ったカスタードなどが組み合わせられているのだから当然とも言えるのだが、それにしても酷い。

あまりの力オスに、思わず意識が遠くなる。とりあえず近寄るなと言いたくなるが、この店に寄ろうと言いだしたのが自分である手前、さすがに逃げるわけにもいかなかった。

「そんじゃまア、いただきますまアす」

「ドキドキ」



突如奇声を上げて悶え苦しみ始めた一方通行に、旧知の仲であり  
普段の奇行を

よく知る力ガリ以外の全員が驚愕の声を発する。

一応しつかりと立ってはいるのだが、一方通行の両足と上半身は  
ガクガクと震え、痙攣一步手前だ。

こと“食べ物”を口にして、やっていい反応ではない。風紀委員  
である初春などは心配を通り越し、半恐慌状態で慌てふためきなが  
ら救急車を呼ぼうと携帯電話相手に悪戦苦闘している。

「こ、こ、ここここ、こつてりとしながらまるやかな小倉の甘みを  
中和するあつさりした味つけのホイップクリームとのベストマッチ  
！そしてそこに去来する粘着質ながらも丁寧な豆の味と芳香！  
チリビーンズのスパイシーな辛味がその調和に力オスを添えてやが  
る。」

何より異なつた三種類の豆の異なつた食感がたまんなく違和感を  
醸し出してンゼエ！こいつはパネエ、マジでイかれてやがる！  
どうしたらこんな組み合わせが選択肢に上がるようなメニューを平  
気な顔して出してられンダア？！」

## 総括

どうやら人災レベルとしか思えないこの混沌とした食べ物に、一  
方通行は随分と高評価を下したようである。

「要するに、おいしかったってわけ？　その存在そのものが信じられないクレープ」

「いや、不味イ。とんでもなく不味イ。けどその中にも極めて特異な調和が存在しやがんだ。

こオいう料理はよオ、美味くつても意味が無エんだ。かと言って不味けりやいいってもんでもねエ。

その組み合わせは無エだろ？！って中に、考え出した奴の個性とか、思わず納得しちまうような部分があつてこそなんだよ。

その点コイツはパーフェクトだ、堪ンねエ！　店といいメニューの裏側をつくようなやり方といい、一流だぜ。いいセンスしてやがる」

「あつそ。もう、よくわかんないから言及しないわ」

「テメエみたいな三下にや分かんねエだろオな、この興奮はよ。まだまだ成つてねエぜ第三位」

「それに関しては真剣に余計なお世話よ、ホント、マジで」

凶悪な顔つきを歪めたドヤ顔でさっぱり共感出来ない、というよりは理解できない持論を滔々と述べる一方通行に、美琴は心底疲れた様子で反応する。

自分の感性とあいられない存在はことさら相手するのが疲れるというものだ。基本的に話が一方通行になるのだから。

「ていうか黒子、あんたダイエットしてたんじゃないの？　豆乳ホイップクリームとバナナなんて甘ったるいもの食べて大丈夫？」



「あまりよろしくはないですの。ですがお姉様、私最近ちょっと胃の調子が悪くて。お腹に優しくてストレス解消になる甘いものでも食べなければやってられませんわ」

「アンタも苦労してんのね」

「そう思って頂けるのでしたら、もう少し黒子を労わって貰えますと嬉しいですよ。ぐ、具体的には、そう、身体的スキんシップとかピカチユウツ?!」

「調子にのんなっ!」

クレープ屋の前で騒ぐ六人組はこれでもかという程に目立っていた。既に何人もの学生が、珍しい常盤台の制服に目を付けて写メっていたりしている。

そもそも五人組という人数の段階である程度目立ってしまう上に、一人一人のキャラクターが外見を含めて非常に濃いことから、人目を引くのも当然だろう。

もちろん件の五人は今更そんなものを気にするようなタマじゃない。悠々自適に、クレープ屋の前での馬鹿騒ぎを楽しんでいる。

もちろん店の前で営業妨害一歩手前の馬鹿騒ぎをされるクレープ屋の方はいえ、たまったものではないだろうが。

「つかよオ、花瓶にツインテ」

「人を大雑把に属性で括るのは止めて頂けません?!」

「私は花瓶なんかじゃありませんっ！」

好きで頼んだものではあるが、やはりその圧な臭気に耐えられず盛大に噎せていた一方通行が初春と黒子に問いかける。

トンデモない渾名をつけられた二人は懸命に抗議をするが、そもそもこの男、しっかりと本名で呼ぶ他人なんて片手の指で数えるくらいしか存在しないので、まったく気にした様子もなかった。

「風紀委員ジャッジメントってのは随分と暇人なんだなア？ 支部の人員が二人もこんなところでサボってて大丈夫なのかよ？」

「アンチスキル 本来、風紀委員ジャッジメントの活動は校内の治安維持が主です。近年では警備員の手が足りないので校外でも活動しておりますが、基本的には越権行為ですわ」

「ですから校外の見回りとかは手が空いている風紀委員や研修中の新人とかで自主的にやってるんですよ。ジャッジメント

拘束権こそありますが、それも現行犯とか指名手配犯とか相手に限りますし、実は普通の学生とあんまり変わらなかったりします」

「まあボランティアに過ぎませんから。もちろん仕事はしっかりとやっておりますわよ？」

「ジャッジメント とはいえ毎日毎日風紀委員として活動しては体が保ちませんの。今日は自己申告の非番ですわ」

豆乳で作られた体に優しいホイップクリームのまろやかな甘みを味わいながら、澄ました顔で黒子は言う。

ジャッジメント 給料や報酬の出ない風紀委員は、自らの正義感を糧にして職務に

励むより他ない。ならば自己管理は普通に仕事として治安維持を行っている市政の警察などよりしっかりとやらなければならなかった。疲労や無気力を言い訳に仕事をサボることがないように、かといって体を壊すこともないように、学業の妨げにならないように、風<sup>ジャッジメント</sup>紀委員の仕事が必要以上の負担にならないように。

であるから休暇や非番は基本的に自己申告であるし、その日の見回りのシフトなんてものも、研修などの例外を除き基本的に組まれている。

その日いる人員で回す。もちろん助っ人などを非番の人間に“お願い”<sup>ジャッジメント</sup>することぐらいはするが、その姿勢がないものにはそもそも風紀委員など務まらないのだ。

「もちろん非番の最中だろうと風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>としての自覚はしっかりと保ち、一般学生の模範となるべく行動するのは当然のことですわ。そうですね、初春？」

「え？ ええ当然じゃないですか白井さん！ こうやってぼーっとしているように見えて、その実しっかりと周りにおかしなことがないか確認してるんですから！」

例えば  
「

本人の言葉とは真逆に、目の前のクレープを食べることに集中しているようにしか見えなかった初春が、黒子の言葉にキョロキョロと慌てて辺りを見回す。

口の端っこに拭い損ねたクリームがついてしまっているのはご愛嬌だろう。その姿はどちらかといえば風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>というよりは、リスやウサギといった小動物だ。

「あ、ほら見て下さいあの銀行！」

「あアン？」

キヨロキヨロと辺りを忙しく見回した初春は、大通りに建っている何の変哲もない銀行を指さした。

外見も名前も別に不思議な点などない。学園都市の中でも幾つかの支店を持つ持つ大きな銀行だ。

「あの銀行が、どうしたんだよ」

「もう、すっかりと見て下さいよ！ ほら、こんな昼間なのにシャッターを閉じてるなんておかしいと思いませんか」

瞬間、轟音。

夜間の重機による強盗すらも防ぐ分厚いシャッターが、内側から大爆発を起こして拉げ、吹き飛ぶ。

大質量による攻撃もしつかりとシャッターダウンするはずだというのに、恐ろしく違和感のある光景であった。

「　　つて、ええええええ？！」

「おのれ何事、私とお姉様との蜜月をお！！ 初春！ 惚けてない  
アンチスキル  
で警備員に連絡を！」

「ふえええ？！！」

明らかな異常に、黒子は風紀委員<sup>シャツジメント</sup>として自分の頭を切り換え、手にしていたクレープを一気に口の中へと放り込む。

確かに非番ではあるが、目の前で異常が起こっているのに見過ごすわけにはいかない。厳密な職務時間の設定が無いというのは、すなわち何時いかなる時であろうと職務中ということでもあるのだ。

「黒子！」

馬鹿騒ぎをする他のメンツを尻目に既に自分の分のクレープを食べ終えていた美琴が叫ぶ。

今の爆発、例えば爆発物だとしたら自分も相手も危険なものであるし、仮に超能力であつたとしたら強能力者<sup>レベル3</sup>は優に超えるだろう。

「お姉様はそこでおとなしくして下さいませ！ 毎回毎回申し上げておりますが、超能力者<sup>レベル5</sup>であろうと一般生徒は一般生徒ですの。治安維持は我々風紀委員<sup>シャツジメント</sup>と警備員<sup>アンチスキル</sup>にお任せを」

二の腕につけた風紀委員<sup>シャツジメント</sup>の腕章を握りしめ、若干のホイップクリームがついた口元を威勢良く拭うと駆け出した。

「  
なによ偉そうに」

「まあまあ、彼女の言うことも一理あるってことです。一般人がむやみやたらに能力をふるうと、それこそ自分が風紀委員にとつ捕ま  
りかねない」

能力の乱用は禁じられているが、もちろん学園都市の学生がそんなことをするわけがない。俗に不良と呼ばれる人種にしてもそうだが、真面目に能力向上のために努力している学生にしても、ただ学校のカリキュラムを黙々とこなすだけで能力が上がるなど考えるはずがなかった。

それは風紀委員として活動している学生としても同じであるため、ことさら強く言えない部分はある。黒子とてあまりにも便利すぎる能力を持った空間移動能力者であるから、なおさら乱用の傾向は強い。

しかし、それも対人となると話は変わる。ただでさえ強度によつてはつきりと威力が変わる超能力を高位能力者が低位能力者相手に行き使うことは、プロボクサーが場末の不良相手に本気の殴り合いをすることと同義だ。

「そりや言いたいことは分かるけど、一応は超能力者の私があやつて能力が必要な場面で蔑ろにされるってのは　って、ちよつと待ちなさいよ第一位」

「あん？　用も無く話しかけンな第三位。俺アこれからお楽しみなんだからよオ」

「お楽しみ、じゃないわよ！　今さっき止められたばっかなのに、どうして何の躊躇もしないで向こう行こうとしてんのアンタは？！

馬鹿なの？　死ぬの？」

「はッ、そんなの決まってンじゃねエか。お祭りだつてンなら、飛び入り参加も歓迎だろオ？ 便乗しねエのは損つてもンだ。違エか？」

「大間違いよッ！ さっき黒子が言つてたでしようが。一般生徒が無暗やたらに能力を使つたら懲罰モノよ？ ちよつと癪だけど、こジャッジメントは風紀委員であるあの子に任せて」

「懲罰ウ？ 笑わせンな、一体どのどいつに俺が罰せられるつてンだよ？」

焦つたような美琴の言葉を、一方通行は嘲笑う。アクセラレータ

そこにあるのは絶対の自信。学園都市第一位として、否、ベクトルアクセラレータの支配者である一方通行としての絶対の自信。

強者にのみ許される傲慢と驕りは、決して馬鹿にされる対象、愚とされる対象ではない。むしろそれは、その者の実力を悟らせる場合すらありえる。

ましてや彼ならば、それも当然と頷けることだろう。

「俺アクセラレータ一方通行だぜ？ 誰も俺を止めらんねエ。俺ア俺のやりたようにやるさ、好きなことを、好きなだけな」

「それに振り回されるこつちの方の事情も考えて欲しいってことです」

「煩エな！ オラ行くぞ、久々の鬱憤晴らした。」

「ちょ、ちよつと待ちなさいよアンタ達！ 何のこと話してんの？！」

おもむろにシャッターが爆破された銀行の方へと歩き出した一方アクセラレータ通行と力ガリに、ペースを乱されっぱなしの美琴は驚きの声を上げた。

今、自分が言ったことを忘れたのかコイツらは。ジャッジメント風紀委員のお世話になるって話したはず、っていうかソレを私に諭したのはアンタ達だろうが。

「うーん、でもキミと僕たちとは立場が違うだろう？ 悪いんだけど、僕は基本的に楽しそうながあつたらすぐ首を突っ込むのが信条ってことです」

「それに振り回されるこっちの事情も考えて欲しいってことでエス」  
「別に僕はキミに付き合っただけだし、言っていないはずなんだけどな」

「チツ、そオいう細けエことばかり言いやがって、面倒臭エ」

美琴の言葉など意に介さず、二人は悠々と歩を進める。  
誰も彼らに指図することなんて出来ない。何故なら

「なアに、テメエが気にすることなんて無エよ、第三位。俺たちは“最強”で」



「絶対無敵」ってことです」

あまりに自信満々に言い放つ二人に、美琴は言葉を失くす。

別に二人の身が危険だから止めたわけではない。二人共に自分と同じ超能力者<sup>レベル5</sup>であり、なおかつ片方は学園都市序列第一位、もう片方にしても第六位である。

この二人に勝てる者など、否、まともに勝負が出来る可能性のある能力者でだろうと両手の指で数えられるぐらいしか存在しないのではなからうか。

勿論その中には自分も数えられているだろうし、そもそも自分に勝てる人間を考えたところで、やはり同じくらいの数しか想像出来ない。

先ほどもちらと言及したが、驕りでも何でもなく、真実として超<sup>ベル5</sup>能力者はそれだけの実力を持っている。

だから美琴が言葉を失くしたのは、単に彼らの自然な態度に拠るものだった。

彼らは、自分達が能力を振るうことを、ごくごく当然のものとして捉えている。

自分達の能力を、暴力を正当化出来ている。道端に屯っている不良たちの振るう安っぽい暴力などではない、本当の暴力を自分のものだと正当化出来ているのだ。

それがどれほどまでに異質なことか。どれほどまでに鮮烈なことか。どれほどまでに懂れることか。

勿論、決して善いことではないだろう。むしろ悪い、とことんまでに凶悪だ。しかし美琴は懂れるとまではいかずとも、その仕草、在り方に目を奪われてしまった。

あるいはそれは、例えば学校で何の問題もなく生活していた優等生が、放課後の河原で殴り合いをしていた不良たちの生き生きとした姿に惚れるようなものだったのかもしれない。

言うならば隣の芝生、あるいは他人の持つ花、そのような類の憧れに類する感情だったのかもしれない。

だが確かに彼らは美琴とは違う在り方をしている人種で、故に止められなかったのも事実。

そして自分と違う在り方をする人間との出会いとは、往々にして自らの変化をも指し示すものである。

学園都市序列第一位『アクセラレータ一方通行』。  
学園都市序列第六位『フレイム・シン無尽火焰』。

彼らとの出会いが生み出す大きな波乱と、物語の変化。  
それらはすぐそこに、迫っていたのであった。

第8話 『少女少女、放課後、クレープ屋』（後書き）

今回はちょっとゲテモノ料理に凝りすぎて長くなってしまいましたね。次回はさらっと銀行強盗を退治して、展開を早いペースで進めていきたいと思います。

また、そろそろ人物紹介とゲテモノ料理まとめをやるうかと。何か要望などありましたら、感想欄で構いませんのでお寄せください。それでは次回も早めにお届けできるよう頑張っていきたいと思います。応援、よろしくお願い致します！

第9話 『強盗、少年、天衣無縫』（前書き）

強盗犯三人相手の十数分ぐらいの戦闘のはずが、なんでも一万三千文字ぐらいに。

ちよつとばつかし調子に乗り過ぎちゃいました。とりあえず次回も早めに、じゃんじゃん原作進めていきますね。

第9話 『強盗、少年、天衣無縫』

「おい急げ！ 早いとこ退散しねえと風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>か警備員<sup>アンチスキル</sup>が来るぞ！」

長閑な初夏の放課後。学園都市でも最大級の敷地面積を誇る第七学区の公園通りで、いつも通りの午後の風景を脅かす事件が発生していた。

普段ならば学生たちに向けて預金の引き出しやローンの取引などをしている大手の某銀行が、今日に限って完全に営業を停止している。

それどころか閉店を表す降りたシャッターは中心から大きく外側に向けてひしゃげ、爆発したかのような焦げ跡と、今もなお僅かながらも火が点いた破片が撒き散らされたままだ。

「へっへっへ、まさかここまで簡単にいくとはなあ。お前の能力のおかげだぜ」

「無駄口叩くな、時間は無えぞ！ 今ここで風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>やら警備員<sup>アンチスキル</sup>やらに見つかったら終わりだぜ？！」

「大丈夫ですよ、車は用意してあるし、乗り捨てちまえ後は簡単に見つかりやしません。とにかく早くずらからねえとお縄で」

「お待ちなさい、その三人！」

銀行から出てきた三人が、口々に勝手なことを言う。この暑い盛りに揃って黒い革ジャンを着込み、口元をスカーフで隠している。

両手に持ったバッグにはパンパンに札束が詰め込まれており、風体と状況から見て、明らかに銀行強盗そのものであった。

口元が隠されているためにしっかりと風貌を確かめることはできないが、大柄な男が混じっている割に全体的に若く見える。もっとも、学園都市は八割近くが学生であるから、仮に銀行強盗だとしても犯人が学生であるのは不思議ではないのだが。

「ジャッジメント風紀委員ですの！ 器物損壊および強盗の現行犯で拘束します！」

多少強引な方法ではあるが、とりあえず何とか強盗を終えて逃走を図る三人の前に、一人の少女が現れた。

レベル3 強能力者以上の高位能力者しかない名門校である常盤台中学の制服を纏い、栗色の髪の毛を波打った特徴的なツインテールに結び、小柄ながら袖につけた風紀委員の腕章を誇示して精一杯に威圧している。

もちろん常盤台の制服を着ている以上は、彼女もまた強能力者以上の高位能力者であることは間違いないのだが、いかんせん中学生しかも下手すれば小学校から上がったばかりと見える少女では迫力はない。

それは銀行強盗の三人組にしても同じであった。いくら風紀委員の腕章があっても、ここまで小さな女の子が相手に恐ろしいなんてことはなからう。



「<sup>ジャッジメント</sup>ではないのだから、風紀委員もやりやすいのだ。

「舐められたものですわね。相手の能力も強度も把握しない内によくもそんな大口を叩けたものですの」

「ハッ、舐めてんのはどっちだ？ こっちは三人、お嬢ちゃんは一  
人で三対一。勝ち目なんて」

「なら三対三の互角<sup>イヴン</sup>ってことです」

「調子乗ってンじゃねエぞ、三下が」

「は？」

女子中学生相手に大人げなく凄む強盗三人の前に、二人の男が現れた。

背の高い、生氣のない灰色の瞳を持った白衣の青年と、険しいをはるかに超えてもはや凶悪な目つきをした白髪の少年。

どちらもこの場所にはあまりに不釣り合いであり、あまりにも異質。あるいは唐突な出現に、強盗は三人とも先ほどの黒子同様、ポカンと口を開いて立ち尽くした。

「な、何をしに来ましたの二人とも？！ 治安維持は私たち<sup>ジャッジメン</sup>風紀委員の仕事ですよ？！」

「煩エなア、俺達は俺達のケンカをしに来たただけだ。引ッ込ンでな、ツインテ」



「ま、また人を属性で大雑把に括って！　どんなに強度<sup>レベル</sup>が高くて  
も一般生徒が無闇やたらに能力を振るうのは立派な学則違反ですの  
よ?!」

ジャッジメント

風紀委員として、そのような無法は許す訳にはいきませんの。こ  
こは大人しく退いて下さいませ！」

少なくとも窮地に陥ったお姫様<sup>ヒロイン</sup>を助け出しに颯爽と登場とした勇  
者<sup>ロー</sup>様には見えない。

むしろ印象としては、火事場泥棒に近かった。片や暑い日中に白  
衣の変態。片や人殺しの目つきをした小柄の少年である。

「だから煩エつつつてンだろオが。他人のケンカに首突っ込んでン  
じゃねエよ、お節介女」

「　いつの間にか私が邪魔者<sup>レベル5</sup>みたいになってますの。トンデモな  
いお方ですわ、この超能力者」

常識的に考えて正当化されるべきは風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>としての職務をしつ  
かりとこなしている自分のはずなのに、何故かこっちの方が首を突  
っ込んでいるかのように言われている。

もしかして超能力者<sup>レベル5</sup>の人達は自分達普通の人間とは感性が違うん  
だろうか。

なんというか若干、敬愛するお姉さまの感性というものも不安に  
なって来た。それだけでも十分損害賠償に値する。

「つつうわけで、有り難くも俺達が相手してやんよ。泣いて喜べ、三下共」

「まあ確実に涙を流す羽目にはなるだろうってことです。喜びの涙とは、限らないだろうけどね」

ずずい、と二人が前に出る。自信満々なその態度に、強盗達は揃って顔を見合わせた。

正直、この二人組をどう評価すればいいのか分からない。判断に苦しむ。

どこからどう見てもカタギの人間には見えず、だからこそ実力を図りかねる。少なくとも女の子が可哀想だから、カッコつけたいから、という人種からは外れるだろう。

だが同時に、外見から判断できる要素も多い。

白衣の青年の方は上背こそあるが、ひよろひよろとしていて力など無さそうだし、少年の方はといえば下手すれば女子よりも非力ではなかるうか。

もちろん学園都市で若者といえば、当然のように能力開発は受けているだろう。しかし、その大多数は無能力者<sup>レベル0</sup>や弱能力者<sup>レベル1</sup>が占める。油断して潰されてしまうのは本末転倒だが、慎重に行動し過ぎても損をする。勘違いされやすいが、学園都市では強能力者<sup>レベル3</sup>の段階で十分以上にエリート。大学受験にたとえるならば、なれば外の世界における上位国立大学合格者ぐらいのランクなのだ。

「おう小僧共。もしヒーロー気取りなら痛い目見るからやめときな。そう簡単に漫画みたいにくわけじゃねえんだぞ?」

「そつだそつだ、痛い思いはしたくねえだろ？ おとなしくお家に帰って晩飯食つたら寝ちまいな！」

「三下共が、好き勝手言ってくれンじゃねエか」

「自分の実力と相手の実力、見誤るようだと長生きできないってことです」

「んだとテメエら？！ 舐めてやがんのかっ！」

「舐めてンのはどっちだよ、クソ共。俺を誰だと思つてンだ？ テメエら落ちこぼれ風情が適う相手じゃねエんだよ。さっさとケツ振つて逃げ出しな、負け犬野郎が」

「ミシリ、と強盗三人組のこめかみの血管が悲鳴を上げる。

レベル0無能力者やら能力者やらが混じつた三人組であるが、腕っ節にはそれなり以上の自信がある。そうでなければ風紀委員ジャッジメントやら警備員アンチスキルやらと鉢合わせする可能性が高い銀行強盗なんてするつもりはない。いくら能力者である可能性が高いとはいえ、クソガキにここまで馬鹿にされちゃ黙っていられない。プライドだって、それなりにある。

「こつちが下手に出てやつてるからつて調子に乗りやがつて！ お望み通り痛い目に遭わせてやるよ、このクソガキがあああ！！」

遂に耐えられなくなったのか、三人組の中で最も大柄な男が一方アクセラレータ通行に向かって走り出す。

優に身長百八十センチを超え、体重百キロに達するだろうという巨体。対して中学生ぐらいの体格しか持たない一方通行。アクセラレータそして意外にも俊敏な巨男は既にそのハンマーのような右腕を白髪少年へ降り下ろそうとしている。

「あ、危ないっ!!」

あまりにも惨い結末を想像し、庇うには一步出遅れた黒子が悲鳴を上げた。

学園都市序列第一位という彼の位階は知っている。だが、常識的に考えて目の前の光景は十分悲鳴をあげるに値するだろう。

咄嗟に動くとするも、間に合わない。テレポート空間移動を行うには両者の距離が近すぎる。

刹那の内の判断を行う間に、虚しくも大男の拳は一方通行へと振り下ろされ

「ああ、そういう手で来ますか。それじゃつまらないな、一瞬ってことです」

ゴシヤツ、という肉と骨が砕ける音と、無音の驚愕。

たったの二人を除いた誰もが予想した、限りなく百パーセントに近い想像は、覆されたがためにその者達に思考の空白を強制する。

「が、が、がああああ?! 俺の、俺の腕が あ ?!」

能力の発動を許さない奇襲と速攻。

相手が能力者で、なおかつ能力が判明していない状況ならば決して悪手ではない。むしろセオリー通りだろう。

しかし今回ばかりは、相手が悪かった。

「て、てめえ一体なにしゃがった　　ッ?!」

「あン? 別になンもしてねエよ。テメエが勝手にぶん殴って来て、勝手に怪我しやがっただけじゃねエか。みつともねエなア、他人様に責任押し付けようなんて」

何をしたというのだろうか、黒子は目を見開いていた。

何をしたようにも見えない。一方通行の言うとおり、ただ勝手に

アクセラレータ

大男が彼に殴りかかり、ただ勝手に同じぐらいの勢いで弾かれた。

だがしかし、同時にその様はあまりにも不自然。あまりに理解できない痛みに捲った袖から見える大男の右腕は、過度の負荷をかけられたかのようにひしゃげてしまっている。

「なんだなンだよなンですかア? 大口叩いた割に無能力者とか、  
一体なンの冗談だよ?」

つまんねエ、そんなンじゃ全然楽しめねエぞ三下ア! こいつア  
とんだハズレくじだぜ、失望だ」

「ぐ　　う　　?!」

「おらどうしたよ、それで終わりか? そんな調子じゃアッー!と

いう間に殺しちまうぞ木偶の坊がア！」

「　　な、舐めやがって、この野郎おお！！！！」

衝撃か何かで肩まで外れてしまっているのだろうか、完全に動かないらしい右腕をぶら下げ、大男は一方通行に飛びかかる。  
アクセラレータ

何故かは分からないが、殴ってしまえば自分が怪我をする。ならば相手は棒みたいな少年、残っている左手でもひっ掴んでアスファルトに向かって投げ殺してやればいい。

「　　く、くそ！　くそ！　くそ！　　な、なんだコイツ、触れねえ？！」

「おいおい、そりゃ悪手だろ三下。まア知らねエなら無理はねエけどよオ、俺に触れる奴なんてこの世に一人いるかどうか」

「ぎ、ぎやあああ？！！」

掴もうと必死に手を動かす大男の左手を、一方通行が右手で掴み返す。  
アクセラレータ

たったそれだけで、さして力を込めていないだろう真っ白な右手に、大男は万力で締め付けられたような悲鳴を上げた。

「　　ちっ、失敗したな、ハズレだコイツ。せめて景気良く　　吹っ飛びなア！！」

「ぎゃああああ？！！！」

痛みに耐えかねて前屈みになった大男の腹目掛けて膝蹴りを一発。続けて一步離れ、豪快にくるりと後ろ回し蹴り。

たったそれだけで、一体どういう力が働いたのだろうか。軽く倍あるいは三倍ほども体重差があるだろう大男は、まるで弾丸のように吹き飛ばされて銀行の壁面に突き刺さった。

「こ、この野郎？！」

「おっと、君の相手は僕ってことです」

短く針金のような髪の毛を立たせた男が仇を討とうと一步踏み出す、その前に力ガリが立ちふさがる。

ゆらりと体重を感じさせない動きをする白衣の男は、一方通行アクセラレータ以上に得体が知れない。

だが仲間の一人をやられてしまった今、男にも退くという選択肢は存在しなかった。

「へっ、あの野郎もお前もどんな能力持ってるか知らねえが、俺だってなあ　！」

突き出した右掌に、集まる炎。いや、それは自然界に発生する炎ではなく、明らかな敵意を含んだ、人の生み出す焰だ。

その高温は能力者である男にこそ熱く感じることはないが、物理

法則に従って生まれた弱い上昇気流は男の髪の毛を僅かに揺らす。

「発火能力者<sup>4</sup>。その焰の威力から見て強能力者<sup>レベル3</sup>か、あるいは大能力者<sup>レベル</sup>か」

「悪いが容赦はしねえ、仲間を傷つけられたからな。レアかミディアムかウエルダンか、焼き加減ぐらいは選ばせてやるぜ？」

「強盗犯が一丁前によく吠える。ふむ、僕は料理のことはよくわかんないから、シェフのお勧めでよろしくってことです」

「そうかよ。じゃあウエルダンで決定だッ！！」

アクセラレータ

一方通行を前に敗北した大男の二の舞を警戒しているのだろう。

男はその場からさらに大きく一歩飛び退ると、右掌に生み出した焰を突っ立ったままのカガリへと投げつけた。

質量が固体に比べて圧倒的に小さい焰の玉は、大リーガーの投げるボール並の速さでカガリに迫る。

「ハッ、なんだアイツもハズレじゃねエか」

男の掌から放れた火球は見る見るうちに大きくなり、ビーチバレーなどにつかうかなり大きなボールよりも大きくなって、カガリの顔面に着弾した。

着弾と同時に解け、弾ける。顔面だけではなく上半身全体を多い尽くす業火。とても人間に耐えられるものではない。



先ほどと同じく黒子は口の中で悲鳴を押し殺すが、直後、一方通行<sup>イタ</sup>の不釣り合いなぐらいにのんびりとした声が辺りに響いた。

「何ボーっとしてやがんだよ、悪趣味だなテメエは」

「必要以上に痛ぶるキミ程じゃないってことです」

ありえない。

胸どころか腰から上を眩しいくらいの焔に包まれながらも平然と喋り始める力ガリに、黒子は目を見開いた。  
そしてそれは強盗犯の男も、また同じく。

「う、嘘だ、なんで生きてられる　?!」

「生憎と僕も発火能力者<sup>バイロキネシスト</sup>でね。焔の類は効かないんだ。ご愁傷様  
てことです」

「不可能だ！　そりや電撃<sup>エレクトロハンド</sup>使いにスタンガンが効かないとかは聞いたことがあるが、発火能力者が火傷しねえなんて幻想<sup>ファンタジー</sup>だ！」

火傷や、温度による細胞の死。  
基本的に電撃<sup>エレクトロハンド</sup>使いや水流操作能力者<sup>ハイドロハンド</sup>、発火能力者や空力<sup>バイロキネシスト</sup>使いなどは念動力者の亜流である。

特に発火能力者は原則として空気分子の動きを制御することを基盤に、発火現象を起こしていると考えられていた。

空気分子に影響を及ぼし、発火させる。そこには『炎を自在に操

作する』というニュアンスは含まれないし、当然ながら人体の構造上、火傷や火ぶくれなどの直接的に炎から受けるダメージならともかく、酸素が無くても生きられるなんてトンデモな副作用は備わっていない。

「まあ、小細工してるからね。勿論どうやってるかまで、詳しく教える義理はないってことです」

「く、くそっ!!」

上半身を包んでいた炎を振り払い、現れたのは完全に無傷な姿。白衣すら、焦げていない。

強能力者<sup>レベル3</sup>は、大能力者<sup>レベル4</sup>は決して生半可な存在ではない。その自分の能力が、全く効いていない。これがどれだけ絶望的なことが。

（服も焦げてない？ 私だってさすがにスタンガン押しつけられたら熱で軽い火傷ぐらいはするわよ？）

乱入した二人が押しも押されぬ超能力者<sup>レベル5</sup>であることを知る美琴は、その戦闘 というにはあまりにも可哀想なリンチの様子を少し遠くからクレープ片手に観戦していた。

二人がどんな能力者だ、というのは流石に情報を持っていなかったが、それにしても超能力者<sup>レベル5</sup>である。

超能力者<sup>レベル5</sup>とは、他の強度とは隔絶した存在なのだ。大能力者<sup>レベル4</sup>と強能力者<sup>レベル3</sup>とを比べるのは話が違うん。

その学園都市の頂点たる超能力者<sup>レベル5</sup>が、何の間違いであつても負け

るなんてことにはならないだろう。そういった確信があった。

（にしてもアレは非常識よね。一方通行の能力もわけが分からなかったけど、

こっちも同じくらいトンデモよ。

ホントに発火能力者なのかしら？ どっちかっていうと念動力者サイコキネシストって言われた方がまだ納得できるっての）

先程も述べたが、仮に発火能力者パイロキネシストが焰によってダメージを追わない特質を獲得していたとしても、まさか酸素が無くても活動できるなんて化け物ではないだろう。

しかしさっきのカガリは、上半身を完全に焰に包まれてしまっていた。それこそ呼吸に必要な大気どころか、肺の中の空気すら燃やし尽くされてしまうほどの。

そんな状態では呼吸なんて出来ない。ならば何かしらの方法で焰を防いでいたということになる。

（念動力者サイコキネシストなら、防壁みたいなものを作って防ぐこともできるわよね。空力使いエアロハンドも空気の流れて焰を自分まで届かせないぐらいはやるだろうし。

もしかして焰の上昇気流で同じことをした？ いや無いわ、だとしたらああやって焰に包まれるんじゃないやなくて、消し飛んだり不自然に流れたりしているはず。

だとしたら一体どうやって？）

思考に耽る間にも戦闘は続いている。否、先に感じた通り、もは

やそれは戦闘と称するものではなかった。

強盗犯の男は自分が攻撃に晒されないように、格闘技でよく見る小刻みなステップを刻みながら、最初に放ったような火球を大小緩急つけて放っている。

が、それも最初と同じく無意味。ただボーッと突っ立っているに過ぎない力ガリは全ての火球に直撃しているが、まるで僅かの熱すら感じないともいうのか、平然と直立したままだ。

「くそ、くそつ、くそおつ！　なんで効かねえんだよおつ？！」

「残念だけど相手が悪かったってことです。こと、その手の攻撃が効いた試しがないんだ、僕は。」

キミが相手にしているのは学園都市最強の発火能力者だよ？　それに、それでも絶対無敵の看板は降ろしたことが無いんでね。そろそろ飽きたし、お終いにしようか」

「　　ひっ？！」

今まで動きがなかった力ガリが、ゆらりと一歩前に出る。

自分の攻撃が一切効かなかった得体の知れない能力者。そいつが始めて攻撃体勢に移る。自分に危害を加えようとする。それがどれだけ、恐ろしいことか。

男はそれに、死のイメージすら抱いただろう。最初の威勢はどこへいったやら、無様に背を向けると、何時の間にかいなくなっていたもう一人の仲間を気にすることすらなく、がむしゃらに逃走を開始した。

「逃げるのかい？　せめて最後の抵抗ぐらいは期待してたってことです」

「うわあああつ?!！」

その次の瞬間、目の前に現れる白衣の男。

黒子は我が目を疑った。瞬きの瞬間、刹那の間に力ガリは数メートルとはいえ移動の軌跡も見せず動いてみせたのだ。

もちろん空間移動特有の空気を裂く音はしなかった。だというのは、空間移動テレポートとしか思えない瞬間移動。困惑するに足る現象である。

「キミの焰はインパクトに欠けるってことです。パイロキネシスト発火能力者なら、このぐらいはやらなきゃ　ねッ！」

「　　ッ?!」

閃光、そして轟音。

その後によつと、それらは力ガリが翳した両掌から生み出された焰が生み出したものだを知る。

男が放った火球などとは話にならない、轟火。掌というわずかに十センチ四方強×2から放たれたものとは思えない、焰の津波。

至近距離から放たれたそれは発火能力者パイロキネシストの男の全身を直撃。まるで本物の津波に巻き込まれたかのように、悲鳴すら飲み込んで打ち据える。

「立派な公開処刑ですの」

驚くべき事に、男は一切の火傷を負うことなく、しかし火焰の津波に押し流され、強かに全身を近くビルの壁へと打ち付けて見事に気絶していた。

打ち身や脳震盪はあるだろうが、命にまで別状はあるまい。制圧方法としては乱暴だが、理にはなっている。

「一体どいう手品よ、火傷もしないなんて常識の範疇外じゃない」

「それを教える義務はないってことです、御坂美琴さん。キミも超能力者なら自分で頭使って考えて欲しいな」

「もちろん、そのつもりではあるけどね」

離れて観戦していた身事が、ゆっくりとクレープを食べ終えて近づいてきた。

後詰めをする気すらなかったらしい。万が一にすら備えないとは、大分良い、もとい太い神経をしている。

「おう、もう一人はどうしたよツインテ。ありやデメエの獲物だぜ？」

「はっ！　そういえば　？！」

果然と戦闘を観察していた黒子が、一方通行の言葉にハッと気を  
取り直して辺りを見回す。

突っかかってきた二人組ばかり目立っていたが、そういえば確かに強盗犯は三人組であった。

「黒子！ あそこ！」

「あれは 佐天さん？！」

美琴が指差した先に、全員の視線が向かう。

そこには逃がした最後の一人の強盗犯と、その男に腕を掴まれた小学校低学年以下と見える子どもが一人。そして、その子どもをしっかりと抱きしめて、引き剥がそうとしている佐天がいた。

おそらくは人質にでも取ろうとしたのだろうか、その光景に瞬間、黒子と美琴の頭が沸騰する。

「いい加減離せよクソガキ！」

「離すわけないでしょjk！ 子ども人質にするなんて、脳天お花畑か、この腐れDQNッ！」

乾坤一擲、渾身の力と体重で子どもを男から引き剥がした。

「早く逃げて！ さあ！」

すぐさまその子の背中を転ばせてしまいうくらい強く押し、走らせる。

佐天の必死な瞳に、恐怖を力に変えて子どもはすぐさま近くに停まっていたバスの方へと駆け出した。

そちらの方にはバスガイドらしき制服を着た女性の姿が見える。どうやらバスツアーに参加していた子どもらしい。

「て、てめえよくも　！　こうなったらお前を人質にして逃げ切つてやらあ！」

「佐天さん、危ないっ！」

顔を庇うように上げた佐天の腕に手をのばす。

その様子を見て、美琴が叫び、すぐさま黒子が空間移動のための演算を高速で開始した。テレポート

「甘　い！」

が、予想もつかないことに、最初に動いたのは危機に陥っていたはずの佐天だった。

掴まれた右腕を支点に、肘を大きく上に掲げて体を入れ替え、空いている左手で男の手の甲を掴む。

降ろした右肘はちょうど相手の腕の内側だ。器用にそれをつかつ



て、男の腕をまるでアルファベットのSの字のように曲げてやると、そのまま手首をロック、自分の体を沈みこませるようにしながら左足に体重を移動、相手を引きずりこんだ。

「ぎ、ぎいやあああ？！！」

「「「「 ツ？！」「」「」

瞬間、走る激痛。

見事に手首の急所を極められ、男はみっともなく悲鳴を上げると堪らず自然に膝をつく。

すかさず佐天は露になった後頭部、頸椎めがけて左拳で、ハンマーのような拳鎚打ちを見舞い、綺麗に男の意識をはるか彼方へと飛ばした。

「あ、終わっちゃってましたか。よりによって佐天さんに手を出すなんて、不幸な犯人さんですねー」

「おお初春、これって正当防衛よね？ ちょっと加減効かなかったから不安なんだけど」

「問題ないですよ、むしろ協力ありがとうございました」

「え？ え？ どういうこと？」

アンチスキル  
漸く警備員に連絡がついたらしい初春が、ひょっこりと安全な場

所から姿を現した。

さも当たり前のように佐天の鮮やかな手並みを受け止めているが、やっとこさ追いついた美琴や黒子は困惑しっ放しである。

「ああ、私ちよつと健康のために少林寺拳法習ってるんですよ。子どものころから、ずっと。」

やっぱり家に籠ってパソコンばっか眺めてると不健康ですし。初春もやればいいのにつて、いっつも言ってるんですけどねー」

「私は佐天さんと違って似非インドア派じゃないんです。物理的な暴力よりも精神的な暴力の方が好きですし」

「やだなー、暴力じゃないよ。あくまで護身術だつてば、護身術」

「『知ってる初春？ 少林寺拳法つてね、金的、目打ちアリなんだよ。へっへっへ』とか言ってる人の言葉なんて信用できません」

軽くパフォーマンスとしてシャドーボクシングのようなことをしてみせる佐天の拳からは、ヒュンヒュンと鋭く空気を斬り裂く音がする。

とてもじゃないが数年程度の修行で身に付くスピードではない。

下手すりゃ十年近い修行をしているのではあるまいか。

あんまりにもあんまりな決着に、急いで駆け付けた二人は肩を落として溜息をついた。

「結局私の取り分、というか出番は無しですの　　ってハッ！　あのお二方たはいずこへ?!」

「あ、そういえば。さっきまでは確かに一緒にいたような」

「アンチスキル警備員の先生に、また上手いこと処理してもらっただけですかねえ」

「そんな都合の良いことが、何度も通用するもんですか！  
あ、胃が、胃が痛い」

実は件の二人、アクセラレータ一方通行の方は彼ご自慢のベクトル操作で、カガリの方はその不思議な能力で一気に飛び上がり、はるか上空、ビルの上へと逃げていた。

一瞬のうちに数十メートル上空へと移動されては、流石に黒子とて追いきれない。そもそもそんなところへ逃げているなんて思わないだろう。

ちなみにさして高くないビルだったから、屋上から道路は丸見えである。

よって怒りのあまり地団駄を踏む黒子の様子はしっかりと二人に見られており、良い笑いモノにされていたわけであるが。

それを考えると今回の最大の被害者は、  
めちやくちやに施設を破壊されてしまった銀行でもなく、過剰防衛に晒された強盗達でもなく、当然のように好き勝手暴れた超能力者<sup>5</sup>二人でもなく、

ここまで現場をしつちやかめつちやかにかき回され、ついでに後始末までやらされることになった、

敏腕風紀委員、ジャッジメント白井黒子なのかもしれない。

第9話 『強盗、少年、天衣無縫』（後書き）

佐天さん 少林寺拳法有段者。

ちなみに小生も少林寺拳法を嗜んでおりますが、あれは良い武術だと思います。

当初は初春のポジションだったのですが（武道系女子）、彼女は完全にPC無双してもらうことに。

自重？ そんなもの、忘れちゃったよ（汗）。

第10話 『第三位、第六位、超能力者』（前書き）

少し少なめ、九千文字ぐらいでお届けです。

格下ばかりの戦いだったので、この辺りでガチバトルをと思ひまして。

ていうか倫敦の方も更新しなきゃなァ。

あ、麻帆良在住も、あと十文字槍とかもありましたっけ。あはははははは。

え、天地逆転？ なんですかそれは（汗）

## 第10話 『第三位、第六位、超能力者』

外の世界に比べ、科学技術が数十年の規模で進化している隔絶された世界、学園都市。

街は各種モノレールで繋がれており、最先端の科学技術がこちらでふんだんに使われ、学生たちの生活を豊かなものになっている。

例えば最も顕著にそのイメージを得ることが出来るのは、街中のいたるところを巡回しているドラム缶のような何かだろう。

これは未来に憧れる者ならば一度は夢見るだろう、掃除用自走ロボット。ある程度までのゴミならば吸引圧縮し、道端に学生が捨てた空き缶のような固いものであると綺麗に食べてしまう最先端の機械だ。

似たような形のロボットは装備を換えて警備用のそれ、防犯用のそれとして銀行やビルなどに備えつけられており、この型のものにも生徒たちの喫煙を警告したり、不審者のIDを確認したりするAIは備わっている。

もつともこれらにも当然のことながら限界はあった。

大通りなどは比較的綺麗に保たれている方だが、ゴミが多くなる学生たちの溜まり場などは流石にロボットでも見回り切れずに風紀ジャック委員達が自主的に掃除したりしているし、路地裏などはそもそもからして巡回経路から外れている。

簡易ながら警備用ロボットとしての機能も併せ持っているコレらが周り切れない場所。

則ち其処は、ある程度の無法地帯だ。

ジャッジメント

アンチスキル

風紀委員や警備員が見回りこそすれ、やはり彼らも決して数が多  
いわけではないから手が足りない。

ジャッジメント

特にある程度の能力者を抱えた風紀委員などは学生たちの集まり  
だ。完全下校時間を超えると、当然のこととして彼らは活動出来な  
くなる。

アンチスキル

そういつた時間には警備員やロボット達も集中的に路地裏を見回  
り出すが、やはり穴は簡単に生じるわけであり、そこにはみ出しも  
の達は好んで集まった。

「　　って、そんな説明したら僕がまるで不良みたいに聞こえる  
　　ってことです」

第七学区の表通りから少し外れた裏通り。その更に路地裏に、一  
人の男の影があった。

初夏とはいえ暑い盛り。だというのに脛まである丈の長い白衣を  
羽織り、短い黒髪を無造作に後ろに撫でつけた青年。

身長は高い。百八十ぐらいだろうか。ハンサムで精悍な顔立ちを  
しているが、灰色の瞳は驚くほど生氣に欠けていた。

「　　あれ、一方通行？」  
アクセラレータ

人気のない路地裏に、乾いた声が響く。当然のように反応は無く、  
青年は困った様に頭を掻いた。



「おかしいな、どこではぐれたっけ？ まったく、僕の知らない内にフラフラ歩いて行っちゃうのは勘弁して欲しいってことです」

青年 カガリは呆れたように溜息をついたが、その実本当に起こったのは彼が口にしたのとは全くの逆。

前を歩く一方通行の後を素直に付いて歩けば良いものを、何を思ったのか虚空を眺めながら考え事をしていた彼が、フラフラと路地裏に入ってしまったのだ。

彼は自分が友人の保護者代理のような気分にいるが、それも定義づけられた精神面での話。

実際の生活では世間知らずなのはカガリの方であり、意外に気を遣う性格である学園都市第一位は大きな友人のために何度も溜息を吐いていた。

ちなみに可哀想に、今も彼はカガリの姿を探して道路脇の店などを猛然と走り回っている。ご愁傷様である。

「あと一軒だけ珍品巡りがしたいっていうから付き合おうと思ったのに、これじゃ意味がないってことです。ふわぁ、眠い」

すでに日が落ちて久しく、街灯はおるかビルの明かりすら入らない路地裏に吹き込んだビル風で、白衣の裾が翻る。

完全下校時刻には微妙に時間はあるが、こんな時間に路地裏を歩くような学生はいない。基本的には大通りを歩くように推奨されているし、彼らも路地裏には口クでもない連中ばかりいることを知っている。

特にこの街では素手に見える学生が、拳銃などより遙かに恐ろしい能力ぶきを持っていることなどザラだ。大部分が無能力者レベル0か低能力者レベル1

の普通の学生たちは、だからこそ余計な危険に首を突っ込もうとはしない。

もちろんこういう場所にたまっている危険な不良達、あるいは武装無能力者集団と呼ばれる連中にも高位能力者など殆ど存在しないだろう。そもそも高位能力者なんてエリートが、こんな路地裏にドロップアウトするのも考えられないことだ。

だが異能力者<sup>レベル2</sup>ぐらいまでの能力者では、喧嘩慣れた不良達にはとても敵わないだろう。戦闘訓練をしていれば話は別だろうが、普通に能力開発を受ける上で、戦闘能力は付随してついてくるものであつて、決して鍛えるものではなかった。

「 帰っちゃおうかね。あまり長く起きてられないし、明日は実験もあるってことです」

盛大な欠伸をしながら、カガリは伸びをして辺りを見回す。

そろそろ学生向けの店は殆どが閉店する。完全帰宅時刻が近いのでゲームセンターなども一部を除きしまつてしまつから、不良のよきな学生でなければ、つまらないので素直に帰つてしまふ。

面白い物、楽しいこと、珍しいものを見て回ることに、余計ないざこざに首を突っ込むことが存在意義といつても過言ではないカガリにとって、夜は一方通行の“実験”<sup>アクセラレータ</sup>の立ち会いをするぐらいしかやることがない。

ましてや彼は体質として長く起きていることが出来なかった。夜は寝る、まるでお子様だが仕方がないのである。

「あー、眠い。眠い眠い眠い眠い眠

」

「 何とうしようもないこと呟いてんのよ、アンタは」

人気がないはずの路地裏に澆刺とした少女の声が響く。

ゆらゆらと不審者の如く揺れていた力ガリが振り向くと、そこには名門として有名な常盤台中学の制服を着込んだ少女の姿。

茶色の髪を肩ぐらいまでのショートカットにし、強気な目には自信と信念が現れている。両手を腰に当てて堂々と仁王立ちしているのは、背伸びしているようにも見えて不思議と年相応であった。

「 ああ、御坂美琴サンか。こんなところで、こんな時間に何をしてるんだい？ 常盤台のお嬢様が素行不良はどうかと思うつてことです」

「 何よ今の溜めは？ ていうかすぐくどうでもよさそうな顔してるわね。なんか言うこと無いの？ 学園都市に七人<sup>5</sup>しかいない超能力<sup>レベル</sup>者が偶然にも出会ったつていうのに」

「 別に、いつも一方通行と一緒にいるから、特に感慨深いものはな  
アクセラレータいつてことです。ていうか自画自賛？ ちょっと恥ずかしいつてことです」

「 やっかましいー!!」

常盤台中学 に限らず、基本的に学園都市の中学高校などは全寮制なのであるが、その中でも常盤台はお嬢様学校として知られるだけあって非常に寮則が厳しい。

特に門限は、ヤバイ。美琴の住んでいる寮は鬼のような寮監が厳しく監督しているため、一分一秒たりとも遅刻は許されない。遅刻したものは、なんかよくわかんない武術の餌食にされる。

まあ五分前とかにしっかりと帰ってくればいいのだが、やはり学生は時間ぎりぎりまで遊びたがるものだ。

多かれ少なかれ、ある程度の学生が毎年必ず痛い目に遭っている。

「で、アンタはこんなところで何してんの？」

「それは最初に僕がした質問なんだけど　まあいいか。僕はいつも通り、一方通行とゲーセン、珍味巡りをしてたってことです」

「ゲーセン、珍味巡り？　アンタ学校はどうしたのよ？　その制服、長点上機学園でしょ？」

常盤台中学に並ぶ、学園都市の名門学校。長点上機学園。

生徒全員が強能力者<sup>レベル3</sup>以上などということはなく、一芸があるのならは無能力者<sup>レベル0</sup>でも入学できる。

学園都市の全ての学校が競い合う超大規模な運動会、大覇星祭では年齢の差もあり、常盤台中学をも破っていた。

力ガリと一方通行<sup>アクセラレータ</sup>、少なくとも超能力者<sup>レベル5</sup>を二人も有している辺り、名門校の名に恥じぬ顔ぶれである。

「ああ、僕も一方通行<sup>アクセラレータ</sup>も籍だけ置いててね。学校に通っているわけじゃないってことです」

「はあ？！　じゃあアンタ達、毎日遊び暮らしてるっていつの？！」

「別に遊んばつかじゃないってことです。僕も一方通行も研究所に所属してるからね、そっちの方の実験があるから、意外に忙しいよ？」  
まあそれでも、遊んでるのは否定できないってことです」

「呆れた。いくら義務教育は卒業したっていつても、それじゃとても“学生”なんかじゃないじゃないの」

「余計なお世話ってことです」

軽く溜息をついてみせる美琴に、カガリは唇の端を歪めて笑ってみせる。

虚無的な瞳には、いつの間にか妹を見守る兄のような、ともすればお節介ながらも優しい光が宿っていた。

「一方通行はさ、学園都市第一位だ。顔写真こそ出回ってないけど、目立つ容姿をしているからね。色々と、いざこざに巻き込まれるのも多いってことです」

「？」

「そんな彼が、のんびり学生生活なんて出来ると思うかい？ キミは運良く光の中で育つことが出来たけど、きっと彼は小さい頃から苦労しっぱなしだったってことです。」

気づいた時には、あんな歪んだ性格になっちゃったんじゃないかな。

力を持つって、それだけで色々なリスクを負うってことです。大なり小なり、キミにも理解できないかい？」

「別に、ことさら非難したいわけじゃないわよ、そのぐらい、言われりゃ分かるわ、私だって」

「よくできましたってことです。キミはやっぱり、賢いね」

「ッ！ 軽々しく女の子の頭触んなっ！！」

まるで父親か兄が、娘か妹にやるように頭を撫でられる。

自分に兄はいないけれど、もしいたらこんな感じだったのだろうか。触れた掌から髪の毛越しにも優しい気持ち伝わってきて、思わず強く力ガリの腕を跳ね除けてしまう。

振り払った腕は、大人のそれにしては、やけに軽かった。まるで、空気のように。

「やれやれ、お兄ちゃんは悲しいってことです」

「確信犯か！ 感電死させられたいの？！ この変態！」

「あっはっは、キミじゃ僕は殺せないと思うけど。ところで最初の質問に戻るけど、どうしてこんな時間にこんなところにいるんだい？ 常盤台中学の寮の門限は厳しいはずってことです」

ビリビリビリと軽く体の表面に電気を纏わせて威嚇していた美琴は、力ガリのその言葉にハッと当初の目的を思い出した。

寮の門限破りは厳罰。そして同室の黒子に不在を誤魔化してもらうのも、それなり以上のリスクを伴う。

見つかった場合は連帯責任というのと、成功したあとの自分の貞操的な意味でも。

「そうよ、そうだったわ、ずっとアンタを探してたの？」

「は？」

「ちょっとツラ貸しなさいよ。人が来なくて広いところ、行くわよ」

だらしなく緩められたネクタイを美琴が掴み、締めあげる。脅しているかのような構図なのだが、美琴の方が遥かに身長で劣っているからか、迫力はない。

その表情は勝気で、楽しそう。ともすれば悪戯つ子な彼女が彼氏に何かを要求しているような、あるいは妹が兄に何かを怒っているかのような、そんな微笑ましさがある。

「昨日の一件、一部始終見せて貰ったけどね」

「はあ」

「悔しいけど皆目見当っつかなかったのよ、アンタの能力」

「へえ」

「炎で人間吹っ飛ばして火傷一つさせないわ、炎に包まれても平然と呼吸してみせるわ、空間移動<sup>テレポート</sup>じみたことまでしてみせるわ、拳げ句の果てには電撃も効かないんですって？ 初春さんから聞いたわ

よ」

パイロキネシスト  
発火能力者の強盗犯が放った、高位能力者相当の炎。

それを受けて火傷しないならまだしも、顔を完全に覆われてしまえば呼吸ができないはずなのに、カガリは平然とお喋りしてみせた。

それだけではない。強盗犯が逃げ出そうと背中を見せた瞬間には、反対側へと回り込んだアノ能力。パイロキネシスト 順当に考えれば空間移動以外にはありえないが、この男は間違いなく発火能力者のはずである。

まるで噂に聞く理論上のみ存在する多重能力者。デュアルスキル あるいはこの超能力者の第六位、パイロキネシスト 発火能力者であると同時に、サイコキネシスト 空間移動能力者、そして念動力者でもあるんじゃないだろうか。

そうでもない、あの現象の理由が説明できないのだから。

「でね、いくら私でも傍目に見てるだけじゃ分からないって思ったのよね。やっぱり実際に相手してみて体で感じると分かることってあるじゃない？」

それに思えば、レベル5 超能力者相手に戦ったことないのよね、私。経験のないことって、やっぱり早いうちに経験しとかないと後になってやっとなればよかったって後悔することもあるし」

「要するに、僕と腕試しがしたいってことかい？」

かくん、と首を傾けて問うたカガリの言葉に、我が意を得たりとばかりに楽しそうな笑みを美琴は浮かべた。

バトルマニア、と言われるのは心外だが、やはり超能力者までの道を着実に上り詰めて行き、達してしまった自分である。今更かも



しれないが、自分の力を試したい、思う存分に力を振りたいという思いは常に胸中を渦巻いている。

何せ超能力者<sup>レベル5</sup>なのだ。天候さえ左右するこの力、燻らせておくのは非常に勿体無い。

よく格闘技などがある程度身に付けた人間が、自分の力を試したがるといふ事例が存在する。

それは非常に不安定なもので、当然のように危険につながる。何せ事故や不確定な事柄というのはいつ何時でも起こりえるし、上には上がいるのだから。

それに比べ、美琴の持つ衝動はどちらかといえばスポーツマンのそれに近かった。

どこまでも正道に基づいた、彼女の思うとおりの言葉を使えば、腕試し。

戦闘ではある。超能力者<sup>レベル5</sup>は一人で軍隊を相手に出来る能力を持っているのだ。当然、そこには死すら可能性として存在しているだろう。

だが美琴は稀有にも、それら全てを了解した上でなお、スポーツにも似た清々しいスタンスで力比べを欲していた。

闇に堕ちてしまった者たちにとって、それがどれほどまでに眩しいことだろう。カガリは昨日、  
アクセラレータ

一方通行が始終ごく僅かながらも居心地悪そうにしていた理由を今になって悟った。

「見かけによらず、随分と好戦的<sup>レベル5</sup>なことです。まさか超能力者同士で戦って、今まで通りにいかないことぐらい分かってるよね？」

「もちろん知ってるわ。超能力者<sup>レベル5</sup>の序列が実力によるものじゃなくて、研究の有用性が影響しているってこともね。

だから私が第三位でアンタが第六位だからって、油断する気は一切ないわ。それに、まだアンタの能力の正体も分かってないってのに、油断なんてするもんですか」

「ふむ、参ったね、どうやら退く気はないみたいってことです」

困った顔をしてみせるカガリに、美琴はぶんぶん縦に首を振る。元々、気になった相手に対してしつこいまでも干渉しようとする性格だ。基本的に場の雰囲気にながれがちなかガリでは彼女を振り切るなど出来ないだろう。

「はあ、僕もう眠いんだけどな？」

「もう少し我慢しなさいよ、大人でしょ？ それとも目が覚めるぐらい強烈な電撃流してほしいのかしら」

「これだからバトルマニアは。仕方ないな、ちよつと行つたところに河川敷がある。そこで腕試し、やろつてことです」

学園都市の能力者は、強能力者からエリートだ。<sup>レベル3</sup>

大能力者で既に軍隊において戦略的な運用が出来るレベルなのだ。<sup>レベル4</sup>  
これが何を表すのかよく分からないかもしれないが、要するに戦闘機や戦車、あるいは戦艦などの兵器が持つ役割を、たった一人の人間が持っているということなのだ。

戦車や戦闘機、戦艦同士のぶつかり合いに、公園程度の戦場では役者不足だ。

ましてや超能力者<sup>レベル5</sup>は、単独で軍隊と戦うことが出来る。言うなれば、戦闘機を束にした一部隊、そしてそれをさらに束にした軍隊に相当するということである。

公園どころか、草原でも十分かどうか。超能力者<sup>レベル5</sup>同士**のぶつかり合い**とは、則ち国同士の戦争なのだから。

「　　なんか視線を感じるわね」

「そりゃ名門で知られる常盤台中学のお嬢様が、こんな時間に堂々と繁華街を出歩いてたら注目もされるってことです、  
警備員<sup>アンチスキル</sup>に見つからなきゃいいんだけどな」

家路を急ぐ学生達が疎らに通り過ぎていく。

学生寮が乱立している地域とは真逆の方向へ歩く二人は確かに目立つ。常盤台中学の制服単品ならともかく、白衣の不審者と一緒にいると違和感MAXである。

「ほら、ついたよ。ここなら多少暴れても、加減さえしてれば問題はないだろうってことです」

「　　確かに、この時間なら人通りもなさそうね。思う存分やれそうだね、楽しみね」

暫く歩いて辿り着いた、河川敷。

さすがに完全下校時刻を過ぎてしまったので、周りには人気がない。そもそも夜にこんなところに来る連中は大概がリア充であるか

ら、容赦しないで戦うことが出来るだろう。

「私から仕掛けておいて何だけど、覚悟は出来てるわよね？ そりや当然加減はするけど、うっかりってこともあるし、熱くなったら加減忘れちゃうかもしれないし」

「今更だね、最初にそう言っただけ頼むのが普通じゃないかってことです。

ま×その辺りを気にすることはないよ。自信過剰に聞こえるかもしれないけど、君じゃ僕に傷一つだって付けられないだろうってことです」

「へえ、言ってくれるじゃない。上等だわ」

ビリビリビリ、と美琴の全身から電撃が溢れ出る。

弱能力者<sup>レベル1</sup>から着実に着実に強度<sup>レベル4</sup>を上げていった彼女は、下地がしつかりと出来ている分だけ、大能力者<sup>レベル4</sup>とは出力が違う。

溢れ出る電撃はすでに半径二メートル近い空間を完全に制圧しており、装備を調べていない人間では踏み入る事すら出来ないだろう。

「さっきは序列なんかで油断しないって言ったけど、分かってるわよね？ それでも私が第三位でアンタは第六位なのよ？」

「もちろんしつかり理解してるってことです。僕の研究成果の殆どは君から生み出された研究成果と酷似している。そういう意味では君と僕とは似たような境遇に置かれているのかもしれないね」

「え？」

「まあ君が普通に正道を歩いていくなら関係のない話ってことです。気にすることじゃない、君は光の中に居る方が似合っている。」

でもね、目的にもよるけど基本的に戦闘<sup>アクセラレータ</sup>ってことになったら、僕は『絶対無敵』だよ。この看板は一方通行が相手でも降ろしたことはないってことです」

不穏な言葉に一瞬気を取られた美琴の目の前、約十メートル弱の間合いを取った力ガリが能力を解放する。

美琴の電撃が鮮烈ならば、力ガリの炎は豪快。足下から、全身から吹き出した劫火は彼の周囲数メートルの範囲を瞬く間に焼き尽くし、生えていた芝生を灰へと変えた。

学園都市最強の発火能力者の称号は伊達じゃない。その火力は美琴と同様に、戦車や戦闘機に匹敵する。<sup>バイロキネシスト</sup>

<sup>バイロキネシスト</sup>応用性が低いと言われる発火能力者だが、能力者の数は多いため理論として高いレベルで確立されており、なおかつ高位能力者になると火力は恐ろしい程に高い。

拳大の火球が炸裂するだけで、大きなトラックや下手な小屋など吹き飛んでしまう。なにしろこの能力は他の能力者と違ってどこまでも、とことん攻撃的なのだ。

そういつた攻撃的な能力者たちの頂点に、目の前の男は立っている。<sup>エレクトロハンド</sup>電撃使いの頂点に立つ自分と同じように、<sup>バイロキネシスト</sup>発火能力者の頂点として。

「我が身の心配をしなきゃいけないのは私の方だって言いたいのかしら？」

「さあ？ それは是非、自分の身で確かめてみて欲しいってことです」

上等！

格下相手の小競り合いなんかより、負けるかもしれない勝負の方が全然楽しいに決まっている。

自分はまだまだ頂点なんてつまらない場所にきてしまったわけではない、まだまだ乗り越えなきゃいけない壁は、乗り越えたい壁はたくさんある。そんな気分になさせてくれる腕試しは大好物だ。

「大きな口叩いたんだから、吠えヅラかかないでよねっ！」

「それは僕のセリフってことです！」

瞬間、辺りに炎と電撃が振りまかれる。

河川敷の全てを覆うかという破壊の奔流。これが本当にたった二人の人間から生み出されたものかと疑う学生は、学園都市にはいないだろう。

もしこれを引き起こした者がどちらも、学園都市の何百万人の頂点に君臨する、超能力者<sup>レベル5</sup>なのだと知ったのならば。

第10話 『第三位、第六位、超能力者』（後書き）

次回、ついに激突、超能力者！

そして本来ならぶつかり合うはずだった原作主人公は  
どうぞ応援、よろしくお願いします！

？！

第11話 『焔、電撃、交叉衝突』（前書き）

やっと描写できたまともなレベル5の戦闘です。例のごとく予定をはるかにオーバー、一万三千文字ぐらいですか。

化学とか物理の知識に欠けるので、ちよつといろいろと試行錯誤してますが、不明な点などありましたらご連絡ください。



## 第11話 『焔、電撃、交叉衝突』

第七学区を走る大きな川。地図には名前があるだろうが、この川をジョギングや部活動の練習などで使う学生たちは、ただ「川」とだけ呼んでいる。

朝や昼間にはジョギングをする大人や部活動の外練の場として使う学生たち、あるいは放課後に緑が恋しくなつてフラリとやって来る人達で賑わう河川敷も、完全下校時刻を過ぎた今となつては人気も無い。

ごく稀にませたカップルなどが夜のデートに洒落こもうと訪れることもあるが、今日は普通に平日であるからか、魚が跳ねる水音とビル風しか聞こえなかった。

そんな静かな河川敷に、今夜に限って不穏な気配が漂っている。いつも通りのはずのビル風も、何故かごうごうと不気味に鳴り響いている気がしてしまう。ビル風の音と相まって、川の流れも普段よりも速く感じてしまうことだろう。

河川敷の下、川岸の開けた空間。芝生と砂利石が混在する地面の上に立つ二人の学生。彼らから、その不穏な気配は放たれていた。

「はあああああ!!!」

片方の人影、名門で知られる常盤台中学の制服を着込んだ少女か

ら、突如何条もの電撃が迸った。

細かく枝分かれた電撃は、一筋一筋がヒグマをも昏倒させる圧倒的な電気力と電圧を持っている。護身用、あるいは疚しい目的でしょうとするスタンガンなど比では無い威力のソレが、飛び道具として放たれた。

「おっと、先制攻撃とはやる気満々ってことです」

「どうせ超能力者ならこの程度は簡単にあしらえるでしょ？ 現にホラ、普通に立ってるじゃないの。」

最初の一発なんて小手調べよ、小手調べ。手加減してあげたんだから感謝しなさい」

「よく言うよ。確かに威力は精々が強能力者相当だったけど、速さは本気だったってことです」

放たれた先に立っていたのは、白衣の男性。百八十センチぐらいの長身で痩せ型、精悍な顔立ちをしているが、電撃使いの少女とは反対に瞳に力はない。

その彼は瞬間的にこちらに迫って来る電撃をしつかりと目視すると、ゆらりゆらりと不気味にも見える足取りで、しっかりと電撃の全てを躲してみせる。

「冗談じゃないわ、そこら辺の大能力者と私と一緒にしないで欲しいわね。」

小手調べって言ったはずよ？ まだまだ強力になるし、まだまだ

速くなるに決まってんじゃないのっ！」

「おおっ?!」

常盤台中学の制服を着込んだ電撃使い<sup>エレクトロマスター</sup>、御坂美琴の全身から、更に強力な電撃が迸る。

鮮烈、なんてものじゃない。このレベルの電撃になると近くにいてだけで生命の危機を感じる程のものだ。とてもじゃないが怖くてこの場に居られないだろう。一目散に逃げ出しても誰も責めはしない。

大能力者以上になると、天候すら操作することが出来る<sup>レベル4</sup>。ハイドロマスター<sup>エアロマスター</sup>、水流操作や空力使いならば膨大な質量の水分や風を操ることで嵐を巻き起こし、電撃使い<sup>エレクトロマスター</sup>ならば大規模な雷を生じさせることすら可能だ。

その能力に誘われたのか、いつの間にか空は曇り、ゴロゴロと雷の音すら聞こえる。

雷撃ではなく、電撃であつたのは白衣の男　カガリには幸いだつたろう。稲妻の疾る速度はともじゃないが常識内の人間では反応できる速度じゃない。

とはいえそれはあくまで比較して比べたらの話である。携帯電話のスイッチをONにして、起動するまでにどれほどのタイムラグがあることだろうか。

美琴の放つ電撃は拳銃弾にも匹敵する速度で、カガリを着実に追いつめる。

「ちよろちよろと鬱陶しい、避けんな！」

「いやいや普通は避けるだろうってことです。ていうかキミは普段からこんなトンデモない電気力でケンカしてんのかい?!」

しかし力ガリは驚くことに、ふわりふわりとまるで体重などないかのような軽快なステップで、全ての電撃を躲けてみせている。まるで宙に浮いたティッシュを殴ろうとするかのように、掴み所がなく、当てることが出来ない。まるで魔法のようだった。

一見すると不可思議な光景だが、タネはある。

ある程度以上の出力の電撃を放てば、多少は空気に誘電して拡散してしまうことも多い。故に派手で恐ろしげに見えるが、実際に自分へと向かって来る電撃はそこまで多くなかったりするのだ。

よって力ガリは冷静に、自分に向かって来る電撃のみを判別してスレスレの位置で避けていた。それこそ身体をかするぐらいの距離で。

「超能力者<sup>レベル5</sup>が相手なら加減も“気持ち”で大丈夫でしょ！ 大人しく痺れときな　さいッ！」

電撃、炸裂。

相手が上手に避けるならば、絶対に避けられない攻撃をすればいい。正解は避けるだけの隙間すらない、物量による面制圧攻撃だ。美琴の全身から、自分の目の前いっぱい範囲を灼き尽くすかのような勢いで放たれた電撃は、避ける場所も逃げる隙もなく、津波のような勢いで一瞬にして力ガリを飲み込んだ。

「さあて、普通ならコレで一発病院送りいってとこなんだけど。まあ、そこまで甘くはないわよね　？」

十分に必殺と称されるだろう豪快な一撃を放ち、なお美琴は油断しない。

あまりの威力に爆発すらしてしまった地面が巻き起こした砂煙の向こう、そこからの攻撃を警戒している。

普通に考えれば、起きて来るはずなどない。下手すれば病院どころか棺桶送りの威力の電撃をお見舞いした。けれど、油断してはいけない。

どうしても不可解な光景が、頭から離れないのだ。炎に包まれても平然としている力ガリが、空間移動テレポートしてみせた力ガリが、質量すら持っているのかとも思ってしまう炎の奔流を生み出した力ガリが。

「やれやれ、本当に容赦しないねキミは」

果たして巻上がる粉塵の中から聞こえた声に、美琴の警戒と予想は報われる。

これで終わり、では物足りなかった、これで終わり、ではなくてよかったと、美琴は自分でも不思議ながら安堵の溜息をついた。

「このぐらいでヤラレちゃうなら。それはそれで期待はずれよね。まさか超能力者レベル5の質がそんなものだなんて思いたくないんだけど」

「ふむ、それは保証してあげるってことです。確かに超能力者<sup>レベル5</sup>は化け物であるべきだ。学園都市の頂点に君臨するたった七人なんだから、ね」

ぶわり、と熱せられた大気が生み出す上昇気流によって粉塵が吹き飛ばされる。

美琴の予想通り、そこには焼け焦げ一つも負っていない力ガリの姿があった。

ちよつと派手にやりすぎたか？ 粉塵が巻き上がってしまったおかげで、自分の電撃を防いでくれる瞬間を確認出来なかったのは痛い。

バイロキネシスト  
発火能力者の焰を防いでいた時には何の能力を使っている兆候も読み取れなかったけど、あれは同系統の能力者が相手だったからかもしれないのだ。

相手の能力の系統によって対処方法が違うのか、それとも普遍的に万能に対処出来る方法なのか、どちらにしてもこの第六位は、何かしらの手段によってこちらの攻撃を無効果出来るらしい。

「しかしどうするんだい、御坂美琴サン？ 老婆心ながら忠告しておくと、少なくともそういうやりかたでは僕に勝つことはおるか、ダメージすら与えられないってことです」

「ご注進どうも、痛みいるわ。けどね、私ってば先ずはありとあらゆる方法を試してみないと 気が済まないのよねっ！」

「ッ?!」

再び電撃、今度は威力と手数よりも速度を重視した一条の太い稲妻がボーッと突っ立ったままの力ガリへと疾る。

その攻撃を感じてから、脳へと伝わり、それが更に『避ける』という指令になって身体へ届く、その瞬きよりも短い時間すら許さぬ速攻。

その太い稲妻がもたらす衝撃は乱暴ながらも圧倒的な磁力と電力の複合により力場を発生させ、地面をも揺らす。

力ガリに能力の演算すらさせないつもりの攻撃が、違うことなく白衣を貫いた。

「なるほど、これでも全然効かない、か」

「いやいや、今のは死ぬよ御坂美琴サン。普通の人間なら確実に死んでるよ、立派な殺人未遂ってことです」

「死んでないんだからいいじゃない。ていうかどんな化け物よアンタ、今の喰らって小揺るぎもしないなんて」

もはや呆れ混じりの溜息しか出てこない。予想通りではあるのだが、またしても力ガリは無傷だった。

「念動力で絶縁したり、空気の壁とかで遮断してるの？ いや、でも装甲とか防壁の類じゃないわね。だとしたら電撃が弾かれるところが見えるはずだもの。」

能力を無効果してるの？ いくら超能力者レベル5っていつても、そんなこと出来る規格外な人間がアイツ以外にいるはずが。ていうかコイツは発火能力者だし」

威力の大小はさておいて取り合えず電撃を防ぐことが出来る能力者ならば、美琴にもいくらか心当たりがないこともない。

例えば同じ電撃使いならば、まあ多少は電撃に対する抵抗力もあるだろう。勿論最強の電撃使いである美琴の電撃を完全に防げるとは思えないが、一番確実だ。

他にも高位の念動力者や空力使いなどもまた、念動力や真空状態などを利用して絶縁状態を作り上げることも出来るだろう。

ちよつと現実的ではないが、水流操作でも電気を通さない純水を生成出来るのならば、考えられないこともない。

だが目の前の男は、発火能力者なのだ。学園都市に数多い能力者の中でも最も応用性が無いと言われる、発火能力者なのだ。

熱を通して空気の流れを操り、絶縁した？ いや、今の攻撃は確実に身体を貫いていた。絶縁状態を作り上げる能力ならば、電流は周囲に誘電して拡散する様が観測できるはずである。

いや、そのようなことは些事に過ぎない。何せ今、自分の電撃を受けた瞬間の力ガリは、『能力を発動しているようには見えなかった』のだから。

「そろそろ僕のターンかな？ 待ちに回ってあげるのも鬱憤が溜まるってことです」

「余裕見せてくれるじゃない、そっちの攻撃だって当たりやしないわよ」

「言ってくれるね。確かに発火能力者は応用性に乏しいけれど、そ



れでも火力は全能力者中でトップなんだけどな。痛い目みるよってことです」

「吠えてなさいよ、こちら最強の電撃使いよ。エレクトロマスタービビッてなんかいられますかつての！」

「威勢だけは一人前ってことです。それじゃ、行かせてもらうよ！」

カガリの両手に、現れる焰。ゆらゆらと大気を焦がすそれはガスバーナーなんて真っ青になるぐらいの高温で、すでに赤色を通り越して仄かに青い。

たったそれだけで、その焰の持つ威力が軽く大能力者レベル4であることは明々白々。

純粹に戦闘においての攻撃力のみを比較した場合、実は超能力者レベル5と大能力者の間にそこまでの差は無い。だからこそ美琴は驚きはなかったし、同じ理由で油断もしていなかった。

「後味が悪いから、せいぜい焦げないように逃げ回って欲しいってことです！」

轟、と空気を焼き尽くす音を伴って焰が迸る。

まるで龍か大蛇がこちらを狙って飛びかかってくるかのような錯覚を受ける、焰の帯。

電流と同じく質量らしい質量を持たない気体のようなものであるが故に、その焰は恐ろしい速度で美琴へと迫る。

「そうこなくっちゃ　ね！」

手を突き出し、能力を行使する。

サイコキネシスト　エアロハンド　ハイドロハンド  
念動力者や空力使い、あるいは水流操作などであるならば障壁や装甲のようなものを直接作り出すことが出来るだろう。

ロハンド　水流を使って焰を消したり、突風で消し飛ばしたり。けれど電撃エレクト使いが操り電撃はカガリが操る焰と同じく、個体や液体、また直接に物質へ干渉できる代物ではない。

エレクトロハンド  
普通の電撃使いならば、逃げ回るしか方法はないだろう。な

にせ電撃では焰を防ぐことなど出来ない。

レベル5  
だが超能力者の第三位、最強の電撃使いである自分なら？

ああ認めよう、確かにカガリの焰は大したものだ。その威力、自分と同じく最強の発火能力者の名に相応しい。

レベル5  
だけど自分だって超能力者、それも位階は目の前に立つ白衣の男よりも上なのだ。その能力の本分を出力なんて簡単な尺度で測られちゃ困る。

ただ身体能力が高いだけじゃ、オリンピックに出て金メダルを取れるような一流のアスリートには成れないのだ。

「はあああああ！」

パーソナルリアリティ  
意識を集中、自分だけの現実を展開し、能力を行使する。

今度発動するのは今までのような電撃ではない。狙うのは力ガリではなく、自分の周りの砂利石で出来た地面。

更に言うならば、その砂利石の奥にいくらでも眠っている、本来ならば全く使用用途の無い、存在すら意識しない砂鉄。それに干渉し、自分の力とする！

「そお　りゃあっ！！」

美琴の能力に操られ、大地から黒い砂のようなものが大量に湧いて出てくる。

それらはしっかりと空中を動き、途中で大量の小石と一緒に巻き込み、さながら津波のように、あるいは盾のように美琴の前に展開し、カガリが放った焰の帯を頼もしくも受け止めた。

「　砂鉄を操り、小石で防壁を作るとは。随分と多芸なんだなっ  
てことです」

「高位の電撃エレクトロハンド使いつて、磁力マグネティック使っても兼ねるからね。一応は最強の電撃エレクトロハンド使いつて触れ込みだし、この程度なら手品の領域よ」

「石の類は電気を通さないけど、同時に優秀な耐熱性を持っている。それを砂鉄で間接的に操るとは、よく考えたつてことです。」

手加減したとはいえ、今のを真っ向から受け止められるとはね

「

電撃ではどうしても焰を防ぐことが出来ない。どちらも確たる物質干渉力を持たない存在だ。片や気体の一種で、片や分類が難しい電子の世界のマテリアルである。

となると、ここからの攻防はお互いに底の見せ合い。単純に戦い方、というよりは、能力の多様性の勝負になってくるだろう。

（ イケる、と思うわよね、普通なら。相手は全能力者の中でも一番融通が利かない発火能力者だし）  
バイロキネシスト

だが自分が相手にしているのは普通の発火能力者ではないのだ、と美琴は眉間の皺を深くした。

同系統の能力である焰を寄せ付けないのはおろか、電撃も完全に防いでみせる。なおかつ『絶対無敵』の看板が本当だと仮定するならば、きつとあらゆる能力に対して同じように無効果の手段を持ち合わせているのだろう。

おそらくは今となっても全く正体の分からない、学園都市序列第一位の持つ最強の能力ですら。

自分の能力が本当に通用するのだろうか？

もしかしたら何をやっても意味がないかもしれない。

けど、負ける気もしない。

「 ま、取り合えず全部試してみるしかないわよね」

気づいたことが、一つある。

実際に小石混じりの砂鉄で力ガリの焰を受け止めてみて分かったのだが、あの焰は見た目の派手さの割には威力がそれ程でもない。

もちろん鉄なんて簡単に溶けてしまいうぐらいの温度はある。実際、防御に使った砂鉄は軒並み溶けて、蒸発してしまっているのだから。小石を混ぜなかったら簡単に自分もミディアムに焼かれてしまったことだろう。

しかしそれでもなお、その威力は超能力者<sup>レベル5</sup>としては物足りなかった。おそらく目の前に立つ白衣の男の出力は、大能力者<sup>レベル4</sup>とそう大して変わるまい。

だが、それはそこまで特別なことでもないだろう。

自分は最強の電撃使い<sup>エレクトロハンド</sup>として圧倒的な出力を持つてはいる。けれど自分の真価は、先程力ガリにも啖呵を切ったように、決して膨大な出力というわけではないのだ。

電磁波を用いたレーザー、ハッキング、磁力を用いて間接的に念<sup>サイ</sup>動力者<sup>コネシスト</sup>のモノマネすら出来て、建物の壁に鉄骨が入っていれば壁を歩くなんてことだって可能だ。

それは出力系が暴走しただけの大能力者<sup>レベル4</sup>にはとてもじゃないが不可能な、手数<sup>レバ</sup>の多さ。戦闘能力にも自信はあるが、それはこの手数の多さ、応用性の高さにも由来する。

だから恐らくは、この男の真価も隠し持っている奥の手の数。正体不明の防御力や、空間移動<sup>テレポート</sup>。それは出力ではなく、能力の使い方に違いがあるのだろう。

ならば自分がすることは、一つずつ可能な手を試して行く詰め暮のような戦い方だ。

「今更だけど、アンタと腕試し出来て本当によかったわ。ここまでワクワクするの、久しぶりよ」

「そりゃ良かったってことです。こっちは結構、肝が冷えてるんだ

けどね」

「嘘つくのも大概にしないでよ。ヘラヘラ笑って、そんな態度で信じられるわけじゃない」

「ふむ、どうだろうね。まあ絶対無敵は伊達じゃないってことです。試したいなら色々試してごらん？ 試すだけなら、君が疲れるだけだからね」

美琴と同じく、カガリも今の状況を楽しんでいるのだろう。にやりと笑ってみせ、威圧感がひた増した。

「けどね、いつまでも僕が受け身にいるとは思わないで欲しいってことです。余裕綽々の態度もいいけど、たまにはカッコイイところも見せないとさ、“あの子たち”も残念がるからね」

大気が揺らぎ、カガリの周囲にいくつもの火球が浮かび上がる。その数は十や二十を優に超え、三十にも届きそうだ。

三十、と聞くと大したことのない量に聞こえるかもしれないが、トンデモない！ 一つ一つが野球ボールより少し大きいぐらいのサイズとはいえ、それが三十、カガリの周囲に浮かんでいるのをしっかりと想像してみたい。

ドッジボールとは話が違う。要するに、三十の大砲がこちらに向けられているのだ。とてもじゃないが普通の人間ならば避ける気する無くしてしまうことだろう。

「さあ、踊れ」

一斉砲火、三十の砲口が遠慮呵責無しに美琴を狙い、その威力を解き放つ。

速度はてんでバラバラ、美琴の退路を無くそうとするかのように次々と地面に着脱し、焦土に変える。飛び散った小石、砂利が熱せられて肌に熱い。

しかし美琴はその尽くを砂利混じりの砂鉄の奔流を操って、叩き落していった。

「レディにダンスを強要するなんて、紳士のやることじゃないわよっ！」

「キミからそんな言葉が出てくるとは、驚きつてことです」

「やつかましい！」

ガラリ、と受けに回っていた美琴の瞳が光った。

いくら小石の類が優秀な断熱材だとしても、そこら辺の何の変哲もない小石では限界もあるのだ。既に操る砂鉄の一部は溶け、美琴の制御を離れてしまっている。

いや、別に溶けてしまったから操れないというわけではない。しかし磁力は大質量の物体に対しての干渉力に劣る。特に細かい制御を液体に対して行うのは、流石の美琴でも骨が折れた。

「調子に乗るんじゃ 無いわよっ！！」

ちょうど三十の火球が尽きた瞬間。

今まで大蛇もかくやと動き回って美琴を守っていた黒ずんだ帯が、今度は力ガリへ牙を剥いた。

熱せられた小石による質量攻撃。そしてそれを散弾、あるいは爆撃として解放した後の砂鉄はとても周期を計れない程に細かく振動し、触れるモノ皆等しく斬り裂く魔剣と化す。

上から降り注ぐ小石と砂利の散弾、爆撃。そしてその後ろから迫る砂鉄の超振動カッター。

電撃や火焰とは異なる、質量による攻撃。美琴は勝利を確信し

「よく考えたね。エレクトロハンド電撃使いであるキミに、ここまでの質量攻撃が出来るとは思わなかったってことです」

巻き上がった粉塵の中から現れたのは、相も変わらず無傷の力ガリ。

裾の長い白衣は粉塵に塗れたはずなのに、純白のまま。たった今アイロンをかけたばかりのようにパリッとしている。当然、体の方に怪我を負っているようにも見えず、消耗しているようにも見えない

「化け物」

だが、美琴は見た。



よしんば自分の、今の攻撃が効かなかったとしても、今度こそ能力を使って防御をするところを見ようと、粉塵の中を電磁波まで使ってしっかりと“見て”、“視て”いた。

第一弾の、小石と砂利の絨毯爆撃。第二弾の、砂鉄による超振動カッター。

そのどちらもが、まるで『そこに何もなにかのように』、カガリの体をすり抜けた。

「　　どういうことよ、一体何をやったら個体をすり抜けるなんてことが出来るの？」

「それを言ったら僕が負けちゃうってことです。それなりに危うい能力なんだよ、僕の『無尽火焰<sup>フレイム・ジン</sup>』はさ。

絶対無敵だけど、意外に脆くてね。秘密を知られたら、お終いつてことです」

「じゃあお終いになっちゃえばいいのよ、そんな軟弱な能力」

「あつはつは！　でもその軟弱な能力に、みんな手も足も出ないってことです。それぐらいじゃなきや超能力者<sup>レベル5</sup>は務まらないけどね」

熱で空気を操り、塵気楼を作り出しているのか？　順当に考えればそれが一番可能性が高く、実現性もある。

つまりは照準を乱させて、自分の遙か前や明後日の方向に攻撃を着弾させるのだ。しかもそれを相手からは自分の攻撃が当たってい

るのに平然としている、無敵の化け物であるかのように見せる。それはそこまで難しいことではないだろう。

だが、美琴は電磁波を使って周囲を索敵していた。

確かに力ガリの周囲は高温状態になっていて、しっかりと一挙一投足を把握する、なんてトンデモな真似は出来なかった。しかしまあ、もともとそこまでの演算はちよつと厳しいものがある。

そして上手く言葉には出来ないけれど、そこに確かに在ることだけは分かる。電磁波が蜃気楼に跳ね返されることはない。

例えば今こうして見えている背丈や体格が誇張されたもので、それを利用してギリギリを躲しているなんてことがあったとしても、とにかくそこに力ガリは居るのだ。

「さて、万策尽きたかな、御坂美琴サン？　だとしたら」

ぞくり、と悪寒が背筋に疾る。

決して戦闘者ではない美琴でも感じた嫌な予感。エレクトロハンド電撃使いとして生体電流などの作用が齎す第六感の研究にも一家言ある美琴は自身の感覚を咄嗟に信じ

「もう眠いし、さっくりと終わらせちゃうぞってことです」

「くっ?！」

しゃにむに前方へと身を投げ出し、一回転して立ち上がる。

ちようど綺麗に後方を向いた視界には、一瞬にして空間移動し、テレポート

美琴の背後をとっていた力ガリの姿があった。

「この非常識能力者」

「まあいい加減非常識なのは認めざるをえないってことです。で、どうするんだい？ まだ手があるんだったら付き合っけど、正直本当に眠いから早く帰ってしまいたいってことです」

「眠い眠いって、子供かアンタは！」

「あながち間違ってないけど、これは純然たる体質、僕にはどうしようもない衝動ってことです」

ふわぁ、と大袈裟な欠伸をしてみせる力ガリに、一瞬で顔面が朱に染まる。

別に恥ずかしかったとか、屈辱だとか、まかり間違っても恋に落ちたなんてものでもない。

それは純然たる、怒りによるものだった。

「嘗めてくれんじゃない」

「ん？」

スカートのポケットに、いつも数枚入れている“武器”を取り出す。

それは銀色に光る、一枚のコインだった。安っぽい装飾が施され

た、ばちばちの程よい重みがあるゲームセンターのコイン。別に集めても景品が貰えたりはしない、純粹に遊びを楽しむための擬似貨幣。

しかしそれは、最強の電撃使いである美琴の手に渡れば、彼女の代名詞ともいえる、彼女最強の攻撃の砲弾と化す。

「正直、加減してたわ」

「？」

「アンの能力があんまりにもワケわかんないから、先ずはそれをどうにか暴いてやろうと思って色々と試したわけだけど、それってお遊びみたいなものよね？」

マグネティックマスター

磁力使いとしての能力を解放し、真っ直ぐに磁力の路を作る。これは砲身だ。地球上のありとあらゆる兵器でも最高速と呼ばれる兵器の、砲身代わり。

本来ならば強力な電磁石と強力な電力、そしてそれなり以上に巨大かつ洗練された機材が必要なその兵器を、たった個人が再現できるという異常。

おかしいことだろうか？ 否、この学園ならばちつともおかしいことではない。なにせ彼女達は学園都市が誇る超能力者。単独で軍隊をも相手出来る存在なのだから。

「やっぱり全力でぶつからなきゃ、意味ないわよね。超能力者同士レベル5なんだから、遠慮することなんてないわよね」

「それはちょっと、遠慮して欲しいかなと思うってことです」

「やかましい」

無表情で砲弾<sup>コイン</sup>を構える美琴の声色に、怖気を感じた力ガリが思わず一歩後ずさった。

彼とて当然、超能力者<sup>レベル5</sup>の第三位の代名詞とまでなっている必殺技のことぐらい知っている。そしてそれがおそらく、自分に対しては全く効果を表さないだろうという確信もある。

だけどそれとこれとは別問題だ。だって人間は　その定義が自分に当てはまるかは甚だ疑問だが　は生命に危機を覚えるから、ソレに対して恐怖を抱くわけじゃない。

例え自分の方が強大だったとしても、怖いものは怖いのだ。

「私、間違ってたわ。ごめんなさいね、アンタを侮ってた。侮辱してたわ。」

でもそれもさっきまで。　こっからは、本気出させて貰うわよっ！」

「一生手加減してくれても、僕としては構わなかったんだけど　うおっ?!」

能力によって作られたレールが、砲弾発射のための電力を供給されて唸る。

磁界と電界と力。フレミングの法則を用いた電磁界は辺りに余波として力場を撒き散らし、突風という結果を引き起こした。

「真つ向勝負よ、第六位！ 受けてみなさい、これが私の全力全開」

「ストオオオオッブ！！」

注ぎ込まれた膨大な電力が砲弾を飛ばす準備を全て整え、今にも発射される状態の能力が、何者かの一声によって止められた。

完全に予想していなかった、第三者の存在。電磁波による索敵もカガリに集中していた美琴では気づけず、完全な不意打ちである。

「誰だい、君は？ 楽しく戦ってる最中に割り込んでくるなんて、随分と風情がないと思うってことです。消し炭にしちゃうぞ、少年？」

そこに立っていたのは、見るからに平凡な少年だった。

カガリのような不気味さ、虚無さもない。美琴のように清冽な個性があるわけでもない。そんじょそこらを歩いていそうな、特に際立ったところのない男子高校生。

雰囲気もそうだが、容姿もまたさしたる特徴を上げられなかった、強いて特徴を上げるとすれば、ツンツンとウ二のように立った髪の毛ぐらいだろうか。

白いワイシャツと黒いスラックスは、校章すらついていないが学校指定のものなのだろう。ちょっと離れたところには、慌てて飛び込んだ時に放り出したのかシンプルな学生鞆が投げ捨てられていた。

「ん？ どうしたんだい御坂美琴さん？」

目の前に立つ美琴がフルフルと震えているのを見て、カガリが不審そうに疑問の声を発する。

手にしていたコインこそ取り落としていないものの動揺は激しい。カガリもそうだが、彼女も頭の中は疑問符で溢れかえっているのだろう。

というか、どちらかというと、これは動揺、疑問というよりも

「ッ！ なんでアンタが、こんなところにいんのよ?!」

叫びと同時に、砲口が新たな闖入者の方向を向く。

もしやこの二人は知り合いなのだろうか、とカガリはかくんと首を傾げる。

「はあ、そりゃ見回りぐらいしてるに決まってるだろうがビリビリ。こんな時間にこんな場所でドンパチやりやがって、文句言いたいのはこっちなんですけどね？」

大きくため息をつく、美琴の追及に闖入者の少年はごそごそとポケットを探り、取り出したモノをおもむろに右の袖へと巻く。

緑の生地、白い帯と盾の意匠。特に昼間は町中であちらこちら、校内のあちらこちらを見回る便りになる学園都市の治安維持組織。

「風紀委員だ。お前ら派手に暴れすぎですよ、そのぐらいにしとけ」  
ジャッジメント

「完全下校時刻を過ぎたんだから勤務時間外ってことです」

「まあ迷惑行為を取り締まるぐらいなら、いいだろ。上条さんの安全のためにも」

頼りになるはずの風紀委員の腕章をつけた少年は、一転頼りなさに肩を落とす。  
ジャッジメント

いまだ正体の知れない闖入者の介入を受け、カガリと美琴、二人の超能力者の腕試しは、終わるのではなく更なる力オスな方向へと加速していくのであったが、それはまた、次のお話である。



番外話 『第一位、風紀委員、幻想殺し』（前書き）

大変お待たせいたしました！

今回は番外話として、一通さんと上条さんのお話をお届け致します。  
いやはや、それにしても秋アニメは魅せてくれるぜ。F a t e  
/ Z e r oのおかげで執筆意欲が湧くこと湧くことw w w

## 番外話 『第一位、風紀委員、幻想殺し』

学園都市は、外の世界と比べて遙かに勝るオーバーテクノロジーを持つ。

数十年単位で進んだ科学は学園都市に住まう全ての住人達に恩恵を授け、しかしそれでも彼らの生活字体はそこまで変わっては居ない。

もちろんそれも、よくよく考えてみれば当然のことだろう。

人間、数十年の間に大きく暮らしが変わることはあったとしても、その根本的な在り方が劇的に変わるなんてことはない。あるいは、日本の科学というのも頭打ちになっていたのだという可能性もある。

例えば2010年代を思い返してみても、数十年前との違いはネット環境や急速に発展した携帯電話の普及によって大きく変化を認識することが出来るが、その実システムとしてはすでにある程度完成されてしまったものであり、あまりにも便利に過ぎたそれは学園都市でも殆ど変わらずに運用されていた。

そして学生達の生活も、また同じ。

基本的に彼らの生活は、朝起きて学校に行き、帰って予習と復習をするというサイクルに固定されてしかるべきだ。

当然ながらそんな生活を想定されている以上、彼らの娯楽というものも今までの学生達と大して変わりはない。ゲームやネット環境が整備されているからインドア派の学生も多いが、外にあるゲームセンターやカラオケなどにも出入りする。

とはいっても完全下校時間までの営業だから、ささやかなものだ。

それに勉強も能力開発もあるのだから、そうそう遊んではかりもられない。

学園都市の学生達は、意外に勤勉で努力家なのだ。

「  
」

ちょうど放課後の時間帯、夕暮れにすらまだ早い。

学校によってはまだ授業があるところもあるだろうが、一部の学校はカリキュラムの関係で午前授業だったりするから、繁華街にもぼちぼち学生の姿が見えた。

「  
」

学園都市でも最大級の敷地面積を誇る第七学区は、各種学校とそこに通う生徒達が住む寮。そして娯楽施設や商店街などを完備している。

その中でもカラオケほど滞在時間が長くならず、かつ使う気が起きなければ全く金を使わなくても良い娯楽施設としてゲームセンターは特に人気であった。

まがりなりにも科学の進んだ都市、外の世界に比べてゲームの種類は非常に多い。特に一般的に知られているゲーム会社のゲームもそうであるが、一部に据えられている学園都市の学生たちが作ったゲームもかなりの人気を誇る。

なにせホログラム映像なども高水準のものが普通に出回っている

流石に完全な商品化までは達していないが 学園都市だ。  
それこそ外の世界ではとても体験できないようなゲームも数多く揃えられていた。

「  
」

しかし、いくら最先端の科学技術を駆使しているからといっても、ゲームの良さは決して技術力のみで左右されない。そのゲームが“面白い”というのは、当然のことだが他にも様々な要素に左右される。

特に学園都市ほど最先端の技術を用いていないというのに、大手のゲームメーカーはそういったノウハウを大量に所持している。もちろん学園都市内部のゲームも面白いかと言われれば面白いが、やっぱり一歩劣ってしまう。

そして何より、ゲーム愛好家の中にはレトロゲームマニアと呼ばれる連中もいて、それこそ下手すれば自分が生まれる前に現役であったようなゲームを好んでプレイするのは、決して稀なタイプではない。

勿論その傾向を学園都市のゲームセンターとて把握しており、当たり前のようにハイテクな街のハイテクなゲーセンには、十数年前に流行した、いわゆる格闘ゲームの原型を未だに踏襲する古いタイプのゲーム機も備え付けられていた。

「  
おい」

「  
」

「おい、聞いてますかー？」

「」

「聞いてんのかって言うてるんですけどー？ 聞かないふりか？  
それとも集中してんのか？」

そんな懐かしい系のゲーム、略して懐ゲーのコーナーに、1人の少年が座っていた。

染めた訳でも、年を経たわけでもない見事な白髪。そして今さっき人を殺して来ましたよとも言いたげな凶悪な赤い瞳。全体的に不機嫌そうな気配を辺りに振りまき、年頃はおそらく中学生ぐらい。あまりにも不穏な気配から、それなりに人が多いゲーセンの中でも彼の両隣の筐体には人影が見られなかった。誰もが彼に怖じ気づき、避けているのだ。

そんな彼の背後に、彼を恐れぬ一人の勇者が現れた。

特徴的なツンツン頭はウニかハリネズミか、白い無地のワイシャツと黒いスラックスは、女子の制服にばかり気を遣う学園都市の高校にはありがちな夏服で、どこでも見ることが出来るスタンダードなものだ。

顔つきも平凡で、どちらかといえば冴えない印象を受ける。別に道で肩が触れあったとしても軽く会釈をして何も気にせず通り過ぎてしまうような、そんな只の男子高校生である。

強いて特別な点を挙げるとすれば、袖に緑色の、盾の意匠が施された腕章を付けていることだろうか。

学園都市の治安維持組織の一つである風紀委員。ジャケットある意味では周

りに迷惑をかけていないこともない白髪の少年に注意をするという  
か、事情を聞くぐらいならば仕事の一環だろうが、勇者であること  
には違いない。

「おいアンタ。ゲームが楽しいのは分かるけどさ、いい加減に  
返事ぐらいしろよな」

「  
ッ?!」

遂に痺れを切らしたのか、ツンツン頭の風紀委員は白髪の少年の  
肩を軽く叩き、呆れた声で注意を促す。

それは別にイラついていたりとか、相手をどうにかしてやろうとか、  
そういった悪意を持った叩き方ではなかった。

例えるならば、電車が終点に着いたというのに眠りこけている乗  
客を駅員が起こすよりも、さらに気を遣った叩き方。流石に叩かれ  
て痛いなんてことはないが、背後の人物に気づくには十分な圧力。

不良ならば、そのぐらいの叩き方でも喧嘩を売ったかもしれない。  
ヤのつく自由業の方々でもちよつと嘗められていると思うけどかも  
しれない。

しかし白髪の少年が振り返った顔に浮かべた感情は、怒りでも苛  
立ちでもなく、驚愕。

この世でありえるはずがない、それこそ何の兆候もなく周りのあ  
りとあらゆるものが爆発したり、地球が真っ二つになったりするよ  
うなレベルの出来事。

触れられた肩を確かめ、自らの手をしげしげと眺め、次いで目の  
前でポカンと目をぱちくりさせているツンツン頭の風紀委員を睨み

つける。

正しく仰天動地。彼以外の者がこれほどの驚きに遭遇したならば、おそらくもんどり打って座っている椅子から転げ落ちてしまうだろう程の。

「　　テメエ、何しやがった？」

「は？」

「だから、テメエ何しやがったって聞いてンだよ、三下ア」

いつもの若干甲高い声からとは異なる、押し殺した低い声。そこには抑制された驚愕と、警戒が含まれている。

体は十分過ぎるぐらいに警戒を表し、すぐさま飛び退さる、あるいは迎撃が出来るように臨戦態勢。頭脳は相手の一挙一投足を見逃すことのないように、次の策を練ることが出来るように、未だ且つて無かつたぐらいに明晰に。

まるで戦時下にいるかのような最大警戒態勢。レッドアラートツンツン頭の風紀委員は、その猛獣を思わせる気配に思わず一歩後ずさった。ジャッ

「何したって　別に、何もしてないぞ？　そりゃ肩は叩いたけど、もしかしてアレ痛かったのか？」

「そオいうワケじゃねエ。なんで俺に触れたのかって聞いてンだよ」

「　　あのなあ、お前ずつとこの筐体で遊んでるだろ？　連コインはマナー違反だぞ。他に遊びたそうにしてる子どもとかいるだろ？」

もういい年なんだから、ある程度遊んだら周りに譲るのが氣遣い  
つてもんだと上条さんは思っんですがね」

「あッ？」

白髪の少年の詰問に、ツンツン頭の風紀委員 ジャッジメント 上条当麻は困惑  
しながらも返答した。

確かに風紀委員は多少悪ぶった学生からは厄介者として嫌われて  
はいるが、警戒されるというのは微妙に普段の反応とは違う。

しかも白髪の少年は、紛うことなき臨戦態勢なのである。ここま  
で露骨な警戒を示されたことは、当麻としても覚えがない。

「ふざけてンのか、テメエ？ 俺アなんでテメエが俺に触れたのか  
って聞いてンだぞ？」

「だから、お前が連コインで周りに迷惑をかけてっからだろーが！」

「そうじゃねエつつつてンだろオが三下ア！ 俺に、  
どうやって、触ったのかって、聞いてンだつつつてンだろオがア  
ッ?!」

「うおおっ?!」

白髪の少年は能力を解放、その右手を力任せに当麻へと振るう。  
彼の能力によって、貧弱に見える女子よりも細い右腕は破城槌も  
かくやという威力を発揮する。人間など木っ端微塵だ。



「おいおいどオいうことなんだよこりやアよオ」

だがしかし、振り下ろした手はいとも容易く当麻の手によって受け止められる。

信じられるだろうか、ベクトルを操作する学園都市第一位の大きく振りかぶった一撃を、軽く差し出した右掌だけで受け止めた上条ジャッジメント

当麻という風紀委員の存在を。

それこそ天地神明が全く信用ならない事態。それこそ自分の頭の中で行われた計算、 $1 + 1$ が2ではなく、他のトンデモない数に変化してしまったかのような、常識を土台からひっくり返す出来事。

絶対に通用するはずのことが、通用しない。周りにとってみれば普通に不可解なだけの出来事が、彼にとってみればどれほど、正気を疑うまでに異常なことだったか。少なくとも目の前でポカンとしているツンツン頭の風紀委員には分かるまい。

「この一方通行様の能力が効かねエなんて  
。 テメエ一体なんの  
能力者だ？」

白髪の少年、学園都市に七人しかいない超能力者の第一位である  
レベル5  
 アクセラレータ  
 一方通行は驚愕を通り越して呆れた笑いを浮かべると、挑戦的にそ  
 う言った。

自分の能力が効かないなど、正しく彼にとってみれば、どんな冗談かという出来事である。

確かに今の拳は、単純にベクトルを操ることで“威力を飛躍的に上昇させただけ”の拳だ。

人間だろうが片手で造作もなく吹っ飛ばし、コンクリートの壁だろうが呆気なく粉碎するだけの威力を持つてはいるが、あれだけならば例えば念動力者の張るバリアーや、皮膚などを硬質化させる能力者などがいれば防げないことはない、かもしれない。

もちろんベクトルを操ることによって生まれる威力は生半可な能力者では対抗することが出来ないものである。それは間違いないのだが、理論の段階で話をすれば不可能ではないことだ。

「ああ、もしかして今、能力使ってたのか？」

「煩エな、喧嘩売ってんのかテメエ」

「わ、悪い。別に嘗めてるわけでも怒らせたいわけでもないんだぜ？　ただちよつとほら、俺の能力じゃ打ち消したかどうかなんて分かりやすいエフェクトがないと判断できないからさ」

ため息をついて頭を掻く当麻の様子からは、別段おかしいところは見えない。とてもじゃないが一方通行という能力者に挑む態度ではなかった。

一方通行は、ただ純粋な驚異であるべきなのだ。驚異の前にいる人間が取るべき態度は、すなわち恐怖のみ。

ならば目の前の風紀委員は一体どうして、どうして自然体で立っていられるのだろうか。

恐怖を感じない程の実力者か。本人も言っていたが、そもそも風紀委員だというなら何かしらの能力者であることは間違いない。当然のように危険な仕事であるから、風紀委員に無能力者はいないのだ。

「テメエの能力？ オイオイ冗談は程々にしとけよ三下ア。俺の能力を打ち消せるなんてトンデモな能力、見たことも聞いたこともねエぞ？」

「まあ確かに、学園都市の方でも解析出来てないらしいからな、俺の幻想殺しは」

イマジンブレイカー  
「幻想殺しだア？」

「ああ。俺の右手で触れれば、どんな能力でも例外なく消し飛んじまうんだ。それこそ神様の奇跡だって、殺せるかもしれないな」

「右手？」

スツと視線を当麻が掲げた右手へと移す。成る程、そう言われてみれば自分の肩に触れたのも、毒手を受け止めたのも、あの何の変哲もない右手だった。

別段、変わったところなどない。光り輝いているわけでもなければ、変色しているわけでも変形しているわけでもない。

どこの男子高校生でも持っていそうな、右手だ。

「どんな能力も、ねエ？」

「まあ流石に全部試したわけじゃないけどな。学生の数だけ能力はあるし、上条さんが見たことない能力だってたくさんあるでしょうからねー」

「実戦経験豊富ってことですか。ハイハイ格好いいですねエ」

「そういう言われ方すると、非常に他意を感じるわけですが」

ありとあらゆる能力を打ち消す能力。イマジンブレイカー 幻想殺し。

その看板には全く嘘偽りない。事実、当麻が風紀委員として活動

する中でどれほど世話になったか分からないのだから。

パイロキネシスト 発火能力者の炎も、エアロハンド 空力使いが起こすカマイタチも、ハイドロハンド 水流操作が  
エレクトロハンド 操る水弾も、電撃使いが発する電撃も。

全て例外なく、当麻の右手の前には無力だった。どんな能力者も自分の能力には自信を持つているもので、その能力が通用しなかった瞬間に必ず囚われる一瞬の驚愕を利用し、当麻はいつも暴れる学生たちを押さえ込んできた。

だがアクセラレータ一方通行は、確かに打ち消されたと思しき自分の能力を感じても、当麻に対して懐疑的だった。軽口を叩き嘲笑うような笑みを浮かべながらも、その警戒は些かたりとも緩んではない。

能力者は自分だけの現実に即した能力を振るうものだ。そこには確かに超常現象を能力として操る理不尽が存在しているが、やはり物理の壁は重々しく立ち塞がっている。

どんなに理不尽で、ファンタジー幻想に見える能力でも、そこには確固たる法則が存在するものだ。決して理不尽に、万能に、意味も分からず行使される力ではない。

圧倒的な地力の差、実力の差によって理不尽が生じることはあっても、それを“理解できない”ことはないのだ。ましてや学園都市最高の頭脳を持つ、アクセラレータ一方通行その人にとってみれば。

「はあ、とりあえず他のゲームに移れよ。お前なんか気配が怖いし、

周りの小学生とか怯えてるんだよ。なんつーか、存在が迷惑？ いや、まあそこまでじゃないけどさ」

「おいテメエ殺されてエのか？」

「ミシリ、と一方通行のカメラミが軋む。特に嫌味などが入っているようには思えないのだが、それにしても失礼過ぎる。ましてや自分は学園都市第一位、一方通行なのだ。」

「こんなに失礼な奴は今すぐに愉快的オブジェに変えてしまいたいものだが、確かに辺りを見回せば、本気で殺しにかかるには不似合いな場所であつた。」

自分の筐体の周りにプレイヤーの姿は無く、かなり離れて遠巻きに他の学生がチラチラとこちらを横目で確認しながらゲームをしていた。何人かは、既に荷物をまとめてそそくさとこの場を離れようとすらしている。

自分は確かに純粋な脅威でありたかつた。純粋な恐怖そのものでありたかつた。けれど、別に年端もいらない小学生を怯えさせて満足するような人間であるつもりもない。

「というか、どっちかっていうと情けない部類に入るだろう。人は人、自分は自分と分けて考えるにも限界はある。」一方通行はその辺り、意外に気を使える大人であつた。

「チツ、表に出る三下」

「お、おう」

ゲーセンの中、全ての人間の視線を浴びながら二人は出口へと向

かった。別に逃げ去るようにならず、威圧しながらでもなく、努力して自然体を装って。

途中で筐体の裏にいる幾人かが小さく拍手をしていて、一方通行アクセラレータはそいつらの

顔をしっかりと記憶した。いつかそれらしい因縁つけて懲らしめてやろうと思つて。

「ふう、全く巡回始めてすぐこれだよ。ホント不幸だ、事件に出くわす確率おかしすぎるんだろ。つかどうして上条さんはいつのまにやら風紀委員なんてやることになつてるのやら」  
ジャッジメント

ゲーセンから出た瞬間、当麻は人目も憚らず盛大な溜息をつき、掌で顔を覆うと空を仰ぐ。

なんというか、紆余曲折あつて風紀委員として過ごすことになつてはいるが、それにしても自分が事件に遭う確率は高すぎるだろう。なにしろ外を巡回していれば、必ず事件に遭うのだ。というか、巡回してなくて、非番の時だって必ず何かしらの面倒事には直面することになる。正直、いつもの口癖の信憑性すら揺らぐ。自分が不幸なのではなく、不幸が自分なのではないかと。

「おいコラ三下、何勝手にどっか消えようとしてやがんですかア？」

「ぐえ」

そのまま溜息混じりにその場からそそくさと立ち去ろうとした当麻の襟を、一方通行アクセラレータがしっかりと掴む。

男子高校生とは思えない華奢な体と低い身長アクセラレータの一方通行ではまともジャッジメに考えて当麻を止めることは出来ないはず。なにせ当麻は風紀委員セントとしてそれなり以上の戦闘訓練と鍛錬を受けているし、そもそもまともな男子高校生のガタイを持っている。

「へエ、右手以外だと能力を無効化出来ねエのか。ホント訳分かんねエ奴だな、テメエは」

「上条さんはこれから風紀委員のお仕事があるんですけど？！ ていうか公務執行妨害的な法律に抵触してるんじゃないかな、これ！」  
ジャッジメント

「いイぜ、なんでもテメエの思う通りに行くってんなら、まずはその幻想をブチ殺す」

「なんかデジャブ？！ ていうか痛いんですけど？！ 襟アクセラレに引っ張られて首しまってる！ 首首首首ビビビビ ！」

当麻が襟アクセラレを引き戻そうとする力のベクトルすら操作して、一方通行はズルズルと当麻を引きずっていく。当然のことだが、自分の全く知らない、正体不明の能力者を前にして学園都市第一位が黙っているはずがない。

その向かう先は、人気のない路地裏。基本的に学園都市の学生達は目的地に一直線で、必然的に、特に昼間は殆ど人気がない空間である。（そもそも寄り道なんてものは時間に余裕が出来て“しまう”大人になってからするものなのだバーカバールカ）

「おらよ、ありがたくも離してやったぞ三下。泣いて感謝しやがれ」

「痛え?! もうちょっと優しい離し方だと嬉しいんですけどねえ?!」

一方通行に投げ出され、見事に尻餅をついた当麻は恨みがましげな目で白髪の少年を見つめた。

それなりに鍛えてるとはいえ、流石に尻までは鍛えていない。そもそもいくら寛容な当麻でも、ここまで体格差のある少年に良い様に弄ばれるのは、それなり以上にプライドに障る。

もちろん相手が学園都市序列第一位という化け物であることを知れば、そんな些細なプライドなんて大抵の人間は吹き飛んでしまうことだろうが、当然、当麻はそんなことを知りはない。

あと地面、埃っぽい。ていうか汚い。標準的な男子高校生なら制服は毎日洗ったりしないから替えなんてないのに、あんまりだ。

「てゆうかさ、マジで仕事あるから勘弁してくれねーかな? そりゃイライラすんのは分かるけど、連コインしてたお前が悪いんだぞ?」

「そんなつまんねエことで怒るかよ。嘗めてやがンのか三下」

「いや、明らかに機嫌悪くしてんだろ。顔怖いんだよ、顔が」

「ホントに愉快的なオブジェにされてエラしいなア。これア素だよ、素。顔怖いとか余計なお世話なんですよ!」

コンプレックスの一つを刺激されて、一方通行の眉間に刻まれた



皺がまた一つ増える。

あ、いや、確かに脅威でありたいとは思ったが、別にそこら辺の子どもに泣かれるのは望んでいたことじゃないのだ。

拳句の果てには騒ぎを聞きつけて既に顔なじみになってしまったガミガミ喧しいメガネで巨乳の風紀委員まで現れるは、現れたが最後、学生なんだから学校に行くべきだと見当違いも甚だしいお説教をされるわ。

どこかに隠れても必ず見つけ出されるのは、あのアマ、透視能力者か何かなのだろうか？

「チツ、おイテメエ、三下」

「だから三下じゃねえって　なんだよ白髪灼眼」

「メタっぽい渾名はヤメロ。　名前、聞いてやるよ。言いな」

この場に彼の親友である力ガリがいたならば、目を丸くして驚き、続いて空を見上げて天気確かめたことであろう。あるいは人工衛星の一つでも降ってくることを恐れ、周りの人間に避難を促したかもしれない。

基本的に他者に無関心、というより関わりを断ちたがる一方通行が、自分から誰かの名前を聞きに行くなど、正しく青天の霹靂と呼んでも何の不足もない事態なのだ。彼が普段会話するのは力ガリと一部の研究者達、あるいは妹達シスターズに対しての一方的な演説じみたお喋り程度なのだから。

「ジャッジメント　風紀委員171支部所属、上条当麻だ。能力はさつきも話し

「イマジンプレイヤー幻想殺し」。強度は強能力者<sup>レベル3</sup>」

「強能力者<sup>レベル3</sup>イ？！　おいおいどオいう冗談ですかア？　この俺の能力を打ち消しといて、ただの強能力者<sup>レベル3</sup>とか笑いすぎて腹筋崩壊しまうぜゴラア！」

強能力者<sup>レベル3</sup>。

学園都市序列第一位であり、押しも押されぬ超能力者<sup>レベル5</sup>である一方、ラレタ通行では全くその辺りの実感が湧かないことであるが、強能力者<sup>レベル3</sup>といえは十分に胸を張って自身の能力を自慢出来る程のものである。なにせ強能力者<sup>レベル3</sup>もあれば、サイコキネシスト念動力者なら人間ぐらいの大きさのものを持ち上げ、バイロキネシスト発火能力者ならば学校のゴミ捨て場にある焼却炉顔負けの炎を発する。

能力者<sup>4</sup>としては十分にエリート。ここから研鑽を積みめば、大能力者<sup>レベル</sup>だって夢ではない。

「しょうがねーだろ、右手だけでしか能力を無効果できないんだから。上条さんとしては強能力者<sup>レベル3</sup>になれたことだって驚きですよ。つい最近まで普通の身体検査<sup>システムスキャン</sup>じゃずっと無能力者<sup>レベル0</sup>の判定だったんだからな」

「無能力者<sup>レベル0</sup>？　俺の能力を打ち消せる奴が無能力者<sup>レベル0</sup>？　そりゃ腹筋崩壊通り越して悪夢だぜオイ」

「まあ路地裏で喧嘩に巻き込まれてた時に風紀委員の女の子に会ってさ。進められるまま精密な身体検査<sup>システムスキャン</sup>受けて、それでも結果が出なかったから実際に能力者用意して実験して。なんつうか、ありやモルモットの気分だったな」

「そいつア御愁傷サマ」

現在進行形で被験者<sup>モルモット</sup>をやっている一方通行は、無感動に言葉を紡いだ。

だが確かに、目の前のツンツン頭の能力が『異能を打ち消す』というものならば、身体検査<sup>システムスキャン</sup>に不具合が出てもおかしくはない。

何せ普通の身体検査<sup>システムスキャン</sup>では結果を見て強度や能力の種類<sup>レベル</sup>を決定する。コイツのように極めて特殊な能力が相手では、いくらプロフェッショナルとはいえ普通の高校の教師では荷が重いことだろう。

もつとも、それが『超能力である』以上は、専門の研究機関が行う精密なスキャンで結果が出ないなど、どう考えてもおかしいことであるのだが。

「まあおかげで奨学金も増えて上条さんとしては万々歳なんですけど、無理やり風紀委員<sup>ジャッジメント</sup>までやらされることになるとはなあ。実験に協力するのはまあ、お金もらえるからいいんだけど」

「小せエなア」

「バイトもしていない普通の学生にとっては、お金は死活問題なんだよ！ お前みたいな奴には分かって、そういうばどうしてこんなところまで連れて来たんだ？ ていうか上条さんはお前の名前、聞いてないんですけど？」

おや、と当麻が気づき当然の疑問を口にする。

確かに自分は強引に釣れられ もとい連れられて来てしまった

が、いくら注意されたとはいえ風紀委員相手に癪に障ったというだけで喧嘩を売られるとは思えない。

もちろん今まで風紀委員としてそれなり以上の場数を積んで来てはいるが、なんというか、こういう手合いを相手にするのは初めての気がする。

「あア、そオだったな。ついうっかり本題の方を忘れちまってたぜ。悪イ悪イ、待たせたなア」

瞬間、突風。

ビルの隙間にある路地裏は元々ビル風が激しいが、その風は一方通行が、タン、と小気味いい音を立てて軽く振り下ろした足から発生していた。

「俺アよオ、今まで何でも自分の思うとおりにしてきたつもりだったんだ。まア思うとおりつつても、何も考えなくてボーっと突っ立ってても別に不自由ねエだけの“力”があつたわけだよ」

何でも“反射”してしまえばいい。

攻撃も敵意も、好意も。人と人との関わりも、思念すら自分は反射出来る。操作出来る。

今までそのやりかたで通用しなかったのは一人だけ。だが、それはソイツ自身の中で完結する力だったから、そこまで自分は気にしなかった。

例えば全力で殴ってソレが壊れなかったとしたら、自分の込めた力よりソレが硬かった、頑丈だったというだけの話。そこに自分が

主体になる問題は存在しない。

「なんつうか、つまんねエよなア。そりややることは結構あるけどよオ、やりてエことだつてあるけどよオ、結局それも作業ゲーみてエなモンだから、そこまで熱くなねエわけよ」

「何言つてんだ、お前？」

「いいから聞けよ三下。今、すつげエ気分がいいんだ、久しぶりにワクワクしてきやがる」

シスターズ

妹達との戦闘も、襲いかかってくる馬鹿共との戦闘も、どれも適当に遊ぶことはあつても熱くなることはなかった。

だからゲームは楽しい。自分の指先を、タイミングを、効率よく使つてクリアしていくのはベクトル操作とは別の問題で、そこでは敢えて反則的に優秀な自分の演算能力を行使しないで楽しめる。パズルゲームの類は別だが、格闘ゲーやレースゲーム、シューティングは負けても楽しい。

だが戦闘は別だ。つまらない、とんでもなくつまらない。自分の能力を適当に現状維持しているだけで終わってしまう。自分に干渉出来る奴なんて存在しない。それこそ、絶対無敵の第六位であろうと。<sup>アクセラレータ</sup>一方通行はいずれ自分が、彼を殺せるようになってしまつたろう確信があつた。

「だつてのによオ、クク、だつてのによオ、なんだよ『<sup>イマジンブレイカー</sup>幻想殺し』つてのは？ クク、クククク、ヒヤッヒヤッヒヤッヒヤッ！」

笑いが、止まらない。嗤いではなく、久々の笑いだ。  
知りたい、試したい、未知の存在への興味が尽きない。

ああなんてこった、こんなに面白いことが転がってるなんて、やっぱり面倒くさがらずに外に出てみるものだ。

カガリに会う以前の自分なら、こうして人目の多いところまでわざわざ用事もなく出てフラつくようなことはしなかっただろう。今日は一緒にいない友人が頭をよぎり、理解していながらも頭を振って脳の片隅へとやっってしまう。なんというか、認めてしまうのは癪だった。

「おいおい勘弁してくれよ、またこういうパターンですか？」

「ああそだよ三下。分かってんなら話は早いぜ、諦めて俺の実験に付き合いな」

ベクトルを操作、砂塵を巻き上げて路地裏の出口を覆う。

別に壁にこそならないだろうが、人目を避けることは出来る。今はこの楽しみを邪魔してもらいたくなかった。

「さア、構えな三下。安心しろよ、殺すつもりはねエ。ただ全力で俺の実験に協力してくれりゃいい。あアでも、あんまり期待外れだと勢い余って殺しちまうかもなア？」

「

」

一度巻き上げた風のベクトルを操作して、自分の周りをくくると回らせる。

特に意味はないが、一方通行はこういった意味のない示威行為が嫌いではなかった。台詞回しや大袈裟な動きなど戦闘に雰囲気を求めるところがあり、それは十分に弱点と言えるだろう。

もともと学園都市序列第一位である彼にとってみれば、それは自分の実力に裏付けされた十分すぎるほど十分な余裕なのだろうが。

「しょうがねーな」

「あん？」

笑い続ける一方通行を前に、呆れたような顔をしていた当麻が少しの間だけ俯き、顔を上げる。

その顔を見た一方通行は、少しだけ面食らった。今まで、自分と対峙した者には見ることの出来なかった表情だった。

「風紀委員としてはよくないのかもしれないが、喧嘩ってんなら相手になる。ていうか自信满满すぎて上条さん恥ずかしくなっちゃいますよ、ホント。何が殺しちまうかもしれないねー、だ。殺すだの殺さないだのバカバかしいぜ」

当麻は、笑っていた。それも嘲笑うわけでもなく、自らの上位を確信した笑いでもなく、ただ純粹に、不敵に笑ってみせていた。

誰でも一方通行と戦う者は、自らの勝利を確信してニヤニヤしたり、或いはこちらを馬鹿にした笑みを浮かべているものだったが、

その誰とも違う、不思議な表情だった。

「        テメエ、ホントわかんねエ奴だな」

「あ？」

「普通はよオ、俺みてエな奴に喧嘩売られたら逃げたり命乞いしたりするもんだろオが。右手だけなんだろ？    能力を無効果出来んのは。だったら俺に、身体の何所か触られただけでアウトだろオが。ヒーロー気取ってンですかア？」

嘗められている、のだろうか。

学園都市序列第一位と名乗ってこそいないが、ある程度場数を踏んだ者なら対峙している相手がヤバイかヤバくないかぐらいは判別出来て然るべきだろう。

「まあお前が殺し合いしたいっていうなら話は別だけどさ、たかが喧嘩だろ？    そのぐらいだったら毎日みたいに大立ち回りやってるから、今更身構えろって言われましてもね        。

もちろん上条さんとしては喧嘩しないで済むならそれに越したことはないわけですが、どうよ？」

「ふ    ざ    け    ん    な」

「ですよー」



じり、と当麻が戦闘体制を取る。狭い路地裏、正直この逃げ場の  
ない戦場で一方通行に勝つことは不可能だ。  
アクセラレータ

だが一方通行の能力を知らない当麻は愚直に右手を握りしめる。  
すべての幻想をぶち殺す、彼が持つ唯一の異能を。

「ていうかお前さ、自信満々すぎるだろ。自分が負けねーとも思  
ってるんですか？」

「当たり前だろオが。俺ア学園都市最強だぜ？」

「へっ、ご大層なこと言ってくれるじゃねーか。  
いいぜ、お前が何でも思い通りに出来るってなら」

アクセラレータ  
一方通行が接地している足に触れたベクトルを操作、巻き上げて  
いた風が一点に収束する。

その仕草、わずかな仕草が喧嘩開始の合図だった。当麻も、一方  
ラレータ  
通行も、どちらも理解して、すぐさま戦闘へと移る。

「その幻想をぶち殺す！！」

結果、一方通行が人除けのために撒いておいた砂塵は殆ど意  
味をなさなかった。  
アクセラレータ

調子に乗った一方通行による戦闘が巻き起こす轟音はたちまち他  
ジャッジメント  
の風紀委員や警備員を引き寄せ、二人の喧嘩はめでたく中断。  
アンチスキル

研究所や第一位という称号の関係で嚴重注意で済んだ一方通行と  
ジャッジメント  
は違って一介の風紀委員である当麻は相当に絞られ、また、いつも

の口癖を叫ぶことになったのだが。

そのあと二人がごくごくたまに街で出会った際には立ち話をするような関係になったのも、それはまた、別の話である。

「不幸だああああー！ーッ！！！！」

## 設定集 『登場人物紹介』（前書き）

拙作に置いて極めて魔改造されてしまった方々、オリキャラについて説明していきます。

項目が増えるごとに、最新話として掲載しなおしますので、ご注意ください。

## 設定集 『登場人物紹介』

### カガリ

『正体不明、目的不明、“絶対無敵の”学園都市序列第六位』

保有能力：発火能力者 / L V 5 バイロキネシスト

所属：長点上機学園

好きなもの：物珍しいもの、面白いこと、弟妹

嫌いなもの：子どもを虐める人間、子どもに害があること

特技：無敵

天敵：不明

学園都市序列第一位である最強の超能力者、一方通行アクセラレータの友人で、自らも超能力者レベル5の第六位である。

珍しいもの、楽しいものに対して興味津々であり、少しでも面白そうなことがあるとホイホイついていってしまう子供じみた性格をしている一方、友人である一方通行アクセラレータや知り合った美琴などに対しては兄のような態度を取ることも多い。

夏場でも常に裾が脛まであるような長い白衣を羽織り、その下に籍だけ置いている長点上機学園の制服を着込んだ格好で昼間でも夜でもフラフラ学園都市のあちらこちらを彷徨っている。

目つきは鋭く優しげだが生気が宿っておらず、熱でもあるかのよう  
にフラフラ、あるいはユラユラとしていることが多い。引つ張つたりするとまるで体重がないかのように軽いことが分かるだろう。

基本的に食物を人前では取らず、飲み物、それも炭酸飲料ばかりを好んで飲む。また普通の男子高校生なら当然知っているべき一般

常識に欠け、下ネタなどにもアレルギー反応を示す。

### 【無尽火焰】 フレイム・ジン

パイロキネシス  
最強の発火能力であるが、基本的に発火能力者は応用性に乏しい能力者である。

普通ならそのはずなのだが、カガリの能力は異常な程に応用力がある。

彼の能力は物質的な質量を持ち、焰を壁代わりにして物体を受け止めたり、ハンマーのように相手を打ち据えたり出来る。またその焰に触れた相手に火傷を負わせることがないという、物理常識を超越したものだ。

また『絶対無敵の第六位』の看板が示す通りに、ありとあらゆる攻撃が通用しない。全ての攻撃は彼の体をすり抜け、アクセラレータ一方通行による攻撃も一切効果が無い。

これらについての考察は只一人のとある研究者のみが把握しており、レベル5彼が超能力者である所以となっている。

### アクセラレータ 一方通行

『並ぶ者なき絶対を目指す、ゲテモノ好きかつ苦労性のゲーマー超能力者』

保有能力：ベクトル操作 / Lv 5

所属：長点上機学園

好きなもの：ゲーム各種（但し除く頭脳ゲー等）、ゲテモノ料理  
嫌いなもの：雑魚

特技：演算、計算、頭脳ゲー

天敵：押しが強い女

学園都市数百万人の能力者の頂点に立つ、七人いる超能力者の第一位。<sup>レベル5</sup>“最強の上に行く無敵であること”を目指して『絶対能力進<sup>レベル6シ</sup>化計画<sup>フト</sup>』に協力している。

かつて路地裏をフラフラしていたカガリと些細な切っ掛けで戦闘。<sup>アクセラレータ</sup>一方通行にとつては最強であるはずの自分の能力が全く効かなかったこと、カガリにとつては“見過ごせない独りぼっちの弟”と彼を認識したことによって、以降親友として行動の大部分を共にすることになった。

筋金入りのゲーマーで、特に学園都市外レベルのゲームやレトロゲームをこよなく愛するが、腕はどうかと言われれば お察し下さい。

本来、彼の尋常ならざる演算能力を用いればどのようなゲームだろうとクソゲーに成り下がるのだが、彼は敢えてゲームを楽しむために、その演算能力はゲームに使用せず、感覚と経験のみで楽しんでいる。そのため、どうしても頭を使わずにはいられない頭脳ゲーは嫌っている。

また同様に筋金入りのゲテモノ料理好きである。

そのポリシーはとても常人には理解することなど出来ないが、普段は普通のを食べているので味覚は正常。だからこそ、その趣味が全くもって理解出来ないのであるが。

ゲテモノ料理好きのコミュニティなどでそれなりに顔も広く、その人脈の全てをゲテモノ料理探索のために用いている。

『解せぬ』

初春飾利

『激甘ボイスの天災ハッカー 可愛いバラはトゲだらけ ドス黒風<sup>ジ</sup> ヤッジメント 紀委員』

保有能力：定温保存／L V 1<sup>サーマルハンド</sup>

所属：柵川中学／風紀委員第177支部<sup>ジャッジメント</sup>

好きなもの：甘味、P C、毒を吐くこと

嫌いなもの：自分の思いとおりにいけないこと

特技：P C 操作全般

天敵：佐天涙子

頭に乗せた花飾りが特徴的な、コンピュータの操作に長ける凄腕ハッカル。

本来ならばそれなりの戦闘能力がなければ採用されないはずの風紀委員<sup>ヤッジメント</sup>において、その類い希なコンピューター操作能力と低能力者<sup>レベル1</sup>とは思えないほどの演算能力、現場判断能力を買われて第177支部でもエースの座を担っている。

実際、黒子も現場をモニターしている初春の指示には問答無用で従い（従わされ）、彼女を制御出来るのは支部長である固法ただ一人だけ。

普段は温厚かつ押しの弱い普通のかわいらしい乙女であるが、ひとたびスイッチが入ると人格が豹変。笑顔のままトンデモない暴言や毒を吐き、時には人格すら軽く否定して命令を下す、初春 黒春と化す。

この状態の彼女に逆らうことは精神的に地獄に送られることを意味する。

佐天涙子

『深刻なネラーが発生しました 日本正統少林寺拳法初段J C』

保有能力：金剛禅少林寺拳法／初段

所属：柵川中学

好きなもの：@ちゃんねる、@ちゃんねるまとめサイトのまとめ、修行

嫌いなもの：リア充、曲がったこと

特技：体を動かすこと、実力行使、ブラインドタッチ

天敵：飛び道具、能力者

柵川中学に通う、初春の親友。

日々ネットサーフィンを行う@ちゃんねらーであり、情報の信憑性はさておいて、かなりの情報通。時にソース不明ながらも初春の情報網すら上回る情報を手にしていることもある。

またネットゲの類にも手を出しており、プレイ時間と全く釣り合わない神プレイの数々に、その界限ではそれなりに名前を知られていたりして。

但し性格自体は原作と殆ど相違なく、たまに飛び出る@ちゃんねらー用語以外は、正義感がさらに強くなった頼もしい友人。

物心ついた頃から近所の道院（少林寺拳法で言う、道場）に通っており、今では立派な黒帯を締める少林寺拳士である。

その技術は演舞においてすら一切の形骸化を排除し、実践に基づいた技術は同年代の中でも修行量も相まって完全に一線を画す。

下手に彼女の手首やら胸ぐらやらを掴んだが最後、一呼吸の間に急所を極められ、投げ飛ばされてしまうことだろう。そのせいとかにかく昔から手が早く、現在でも正義や人道に悖る行為の一切を許せない正義漢　もとい漢女である。

なお、押しが強いために一方通行はどこその巨乳で眼鏡の風紀委員と同じく、彼女のことを苦手としている。



## 上条当麻

『あらゆる異能を右手で砕く、このところ立ち位置が不安定な熱血風紀委員』  
ジャッジメント

保有能力：幻想殺し／Lv3  
イマジンプレイカー  
ジャッジメント

所属：風紀委員第171支部

好きなもの：特売

嫌いなもの：目の前で行われる、理不尽

特技：そげぶ

天敵：巨乳で眼鏡の風紀委員  
ジャッジメント

超能力を打ち消す右手、幻想殺しを持つツンツン頭の風紀委員。  
イマジンプレイカー  
システムスキャン  
レベル0

身体検査では一切の反応が出ずに無能力者という扱いであったが、街で偶然出会った眼鏡で巨乳の風紀委員の少女の紹介によって専門の研究機関でスキャンを受け、結果として何の反応も出ず、異常性から様々な実験を受ける。

その後の実験結果から強能力者の判定を受け、通っている高校の中では一番のエリートに。レベル3  
ジャッジメント流れで風紀委員まで務めることになり忙しい毎日を送っているが、奨学金は尋常じゃなく増えたので生活は安定。また能力が判明している関係上、無茶苦茶な補習を受けるようなこともない。（頭は相変わらずよろしくないが）

ちなみに不幸体質は当然のことながら変化なし。風紀委員として巡回に出ればたちまちイザコザに巻き込まれ、相当に苦労しているが、全ての事件を解決しているため実戦経験は豊富で頼りにされている。  
ジャッジメント

その一環で知り合った一方通行とは集に2、3回は繁華街で出くわし、立ち話をしたり非番の時はたまに遊んだりする仲。  
アクセラレータ

眼鏡で巨乳の風紀委員 ジャツジメント

保有能力：不明／不明

所属：不明

好きなもの：フラフラしている学生、説教、カウンセリング、ムサ

シノ牛乳

嫌いなもの：フラフラしている学生

特技：スカウト

天敵：不明

アクセラレータ

一方通行に度々ちょっかいを出し、上条当麻を風紀委員に勧誘した少女。

かなり図太い性格をしており、あからさまにヤバイ雰囲気を漂わ

アクセラレータ

せている一方通行に臆面もなく説教をしたり、あからさまに引け腰な当麻を無理矢理研究所に引きずっていったりと、図太いというよりはいい性格をしているとも言える。

アクセラレータ

ちなみに彼女も佐天と同じく、一方通行の天敵。

“あの子達”

詳細不明。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0088v/>

---

とある科学の無尽火焰《フレイム・ジン》

2011年10月7日18時16分発行